仙台市文化財調査報告書第404集

仙台平野の遺跡群22

－平成23年度発掘調査報告書－

洞ノ口遺跡第14～18次・鴻ノ巣遺跡第13次
沖野城跡第6～11次・南小泉遺跡第65～66次・
小鶴城跡第6～7次・今泉遺跡第9次・中在家南遺跡第5次
城丸古墳第1次・大野田官衙遺跡第7、9次

２０１２年３月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第404集
仙台平野の遺跡群22
―平成23年度発掘調査報告書―
二〇一二年三月
仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第404集

仙台平野の遺跡群22

−平成23年度発掘調査報告書−

洞ノ口遺跡第14〜18次・鴻ノ巣遺跡第13次
沖野城跡第6〜11次・南小泉遺跡第65〜66次・
小鶴城跡第6〜7次・今泉遺跡第9次・中在家南遺跡第5次
城丸古墳第1次・大野田官衙遺跡第7、9次

２０１２年３月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市は「杜の都･仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれています。この仙台の風景は、私たち市民の誇りであり、将来へ守るべき大切な財産でもあります。

昨年度は、３月11日の東日本大震災により、東北地方の沿岸部では多くの被害が発生しました。震災の後は復興に伴う住宅建築の増加により、平成23年度の発掘調査の件数も例年をはるかに上回るものになりました。遺跡の保存もさることながら、復旧・復興は急務であります。市教育委員会としましても、皆様のご理解とご協力を賜りながら、復旧・復興への対応、文化財の保存と継承に日々努めているところです。

本報告書には、住宅等建築に先立ち本発掘調査を実施した、洞ノ口遺跡、鴻ノ巣遺跡、沖野城跡、南小泉遺跡、小鶴城跡、今泉遺跡、中在家南遺跡、城丸古墳、大野田官衙遺跡の調査成果を収録しています。

先人達の遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの大切な仕事であります。地域が育んだ文化を語る上で、歴史や文化資源がその根底を成しているからです。つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で活用され、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しましてご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、心より深く感謝申し上げます。

平成24年３月

仙台市教育委員会
教育長　青 沼　一 民

例　　言

1. 本書は、平成23年度国庫補助事業による個人住宅他補助対象事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。
2. 本書は、仙台市教育委員会が実施した個人住宅等建築に伴う洞ノ口遺跡第14～18次、鴻ノ巣遺跡第13次、沖野城跡第６～11次、南小泉遺跡第65～66次、小鶴城跡第６～７次、今泉遺跡第９次、中在家南遺跡第５次、城丸古墳第１次、大野田官衙遺跡第７・９次の各発掘調査報告を合本にした報告書である。
3. 本書は、仙台市教育委員会文化財課調査調整係の担当職員の協議のもとに、遺物および各章のまとめを小泉博明が、その他を廣瀬真理子が執筆し、廣瀬が編集した。
4. 遺物実測等の整理作業は、結城慎一と向田文化財整理収蔵室の作業員が行い、廣瀬がトレースを行った。また、遺物写真撮影は、橋本勇人と吉野信が行った。
5. 本書に関わる遺物・写真・実測図面等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。
6. 本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1999）に準拠した。
7. 本書中で使用した地形図は、国土地理院発行の１：25,000『仙台市東南部、西南部、東北部』の一部を利用している。
8. 断面図の標高は、海抜高度を示している。また、海抜高度・座標は、平成23年３月11日の東日本大震災前のものを使用している。
9. 遺構は種別ごとに次の略号を用いた。

   ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝跡　ＳＥ：井戸跡　ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＫ：土坑　Ｐ：ピット
   ＳＸ：性格不明遺構
10. 遺物の登録は、以下の分類と略号を用いた。

   Ｃ：土師器（非ロクロ）　Ｄ：土師器（ロクロ）　Ｅ：須恵器　　Ｆ：丸瓦　Ｇ：平瓦　Ｉ：陶器
   Ｊ：磁器　Ｋ：石器・石製品　Ｌ：木製品　Ｎ：金属製品　Ｐ：土製品　Ｑ：骨角製品・自然遺物
11. 土師器実測図における網掛けは、黒色処理されていることを示している。
12. 遺物観察表のカッコ内の法量のうち、器高は残存値を、また口径および底径は復元値を示している。
13. 本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田1980）は、これまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田ａ火山灰（To－a)」と考えられている。降下年代は現在、西暦915年と推定されており、本書もこれに従う。

庄子貞雄・山田一郎1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城―昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所

仙台市教育委員会2000『沼向遺跡第１～３次発掘調査』仙台市文化財調査報告書第241集

小口雅史2003「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題―十和田aと白頭山（長白頭）を中心に―」『日本律令制の展開』吉川弘文館

目　　次

序文
例言
目次
Ⅰ　調査計画と実績 …… 1
1　調査体制
2　調査計画
3　調査実績

Ⅱ　洞ノ口遺跡第14～18次発掘調査報告 …… 3
1　調査要項
2　調査に至る経過と調査方法
3　遺跡の位置と環境
4　第14次調査
5　第15次調査
6　第16次調査
7　第17次調査
8　第18次調査
9　まとめ

Ⅲ　鴻ノ巣遺跡第13次発掘調査報告 …… 37
1　調査要項
2　調査に至る経過と調査方法
3　遺跡の位置と環境
4　基本層序
5　発見遺構と出土遺物
6　まとめ

Ⅳ　沖野城跡第６～11次調査 …… 42
1　調査要項
2　調査に至る経過と調査方法
3　遺跡の位置と環境
4　第６次調査
5　第７次調査
6　第８次調査
7　第９次調査
8　第10次調査
9　第11次調査
10　まとめ

Ⅴ　南小泉遺跡第65～66次発掘調査報告 …… 55
1　調査要項
2　調査に至る経過と調査方法
3　遺跡の位置と環境
4　第65次調査
5　第66次調査
6　まとめ

Ⅵ　小鶴城跡第６～７次発掘調査報告 …… 65
1　調査要項
2　調査に至る経過と調査方法
3　遺跡の位置と環境
4　第６次調査
5　第７次調査
6　まとめ

Ⅶ　今泉遺跡第９次発掘調査報告……72
1　調査要項
2　調査に至る経過と調査方法
3　遺跡の位置と環境
4　基本層序
5　発見遺構と出土遺物
6　まとめ

Ⅷ　中在家南遺跡第５次発掘調査報告……78
1　調査要項
2　調査に至る経過と調査方法
3　遺跡の位置と環境
4　基本層序
5　発見遺構と出土遺物
6　まとめ

Ⅸ　城丸古墳第１次発掘調査報告……87
1　調査要項
2　調査に至る経過と調査方法
3　遺跡の位置と環境
4　基本層序
5　発見遺構と出土遺物
6　まとめ

Ⅹ　大野田官衙遺跡第７・９次発掘調査報告……92
1　調査要項
2　調査に至る経過と調査方法
3　遺跡の位置と環境
4　基本層序
5　第７次調査
6　第９次調査
7　まとめ

Ⅺ　郡山遺跡……100

Ⅰ　調査計画と実績

1　調査体制

調 査 主 体　　仙台市教育委員会

調 査 担 当　　文 化 財 課　課　　長　吉岡恭平

調査調整係　主幹兼係長　佐藤甲二

主　　査　荒井　格　平間亮輔

主　　事　小泉博明　廣瀬真理子　及川謙作

文化財教諭　吉野　信　石山智之　鈴木健弘　佐藤洋平　橋本勇人

専　門　員　結城慎一

臨 時 職 員　五十嵐愛

整備活用係　係　　長　長島栄一

主　　事　大久保弥生

文化財教諭　佐藤正弥

調査指導係　主　　事　鈴木　隆

2　調査計画

主に個人専用住宅の建築に伴う発掘調査費用の補助を目的とし、個人専用住宅他補助対象事業費として、当初は総経費7,686千円、国庫補助金額3,715千円の予算で計画した。しかし、東日本大震災の影響により、個人住宅等の建替え工事に伴う発掘調査の件数が増加したため、年度途中より総経費15,184千円、国庫補助金額7,392千円に増額した。

3　調査実績

今年度の調査実績は、下表に示したとおりである。調査原因は、すべて個人専用住宅の建築である。そのうち、調査次数が付いている遺跡については、郡山遺跡を除いて本書にその成果を載せている。また、本年度は震災復興による個人住宅の調査件数が多かったため、№50以降のもので詳細な報告が必要なものは、次年度以降に報告するものとした。

NO.	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	備考	届出等NO.
1	郡山遺跡	67.23㎡	67.23㎡	5月9日～6月4日	205次	H22 104－257
2	洞ノ口遺跡	92.71㎡	36㎡	5月16日～5月19日	14次	H23 106－7
3	鴻ノ巣遺跡	71.63㎡	6.9㎡	5月23日～5月24日		H23 106－12
4	南小泉遺跡	63.0㎡	21㎡	5月13日		H23 106－21
5	南小泉遺跡	74.92㎡	17.1㎡	6月6日～6月7日		H23 106－14
6	高田A遺跡	69.56㎡	24㎡	6月6日		H23 106－43
7	鴻ノ巣遺跡	93.28㎡	30㎡	6月13日～6月14日		H23 106－31
8	欠ノ上Ⅱ遺跡	59.62㎡	21㎡	6月20日		H23 106－44
9	鴻ノ巣遺跡	84.46㎡	16.8㎡	6月20日		H23 106－15
10	南小泉遺跡	65.41㎡	15㎡	6月28日		H23 106－24
11	小鶴城跡	105.21㎡	27㎡	6月29日	6次	H23 106－20
12	荒井館跡	72.04㎡	18㎡	7月4日		H23 106－38
13	下飯田遺跡	103.70㎡	21㎡	7月4日～7月8日		H23 106－42
14	大野田官衙遺跡	75.9㎡	30㎡	7月5日～7月7日	9次	H23 106－66
15	欠ノ上Ⅱ遺跡	69.02㎡	20.1㎡	7月6日		H23 106－61
16	鴻ノ巣遺跡	66.24㎡	20㎡	7月11日～7月12日	13次	H23 106－46
17	南小泉遺跡	71.63㎡	24㎡	7月11日～7月14日		H23 106－52
18	沖野城跡	111.26㎡	30.3㎡	7月19日	8次	H23 106－37
19	御堂平遺跡	101.85㎡	30㎡	7月26日		H23 106－28
20	下飯田遺跡	134.77㎡	24㎡	7月26日		H23 106－93

第1表　調査実績1

NO.	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	備考	届出等NO.
21	南小泉遺跡	51.39㎡	16㎡	8月1日～8月5日	65次	H23 106－82
22	南小泉遺跡	52.99㎡	9.6㎡	8月2日		H23 106－98
23	南小泉遺跡	52.2㎡	21.0㎡	8月23日		H23 106－56
24	南小泉遺跡	60.93㎡	12.9㎡	8月23日		H23 106－123
25	中在家南遺跡	229.6㎡	33㎡	8月29日～8月30日		H23 106－69
26	小鶴城跡	76.18㎡	22.2㎡	8月29日	7次	H23 106－119
27	鴻ノ巣遺跡	73.31㎡	16.2㎡	9月5日		H23 106－95
28	沖野城跡	115.93㎡	43.2㎡	9月5日	9次	H23 106－117
29	新宿囲遺跡	64.75㎡	11.25㎡	9月7日		H23 106－136
30	鴻ノ巣遺跡	63.25㎡	18㎡	9月7日		H23 106－132
31	沖野城跡	104.34㎡	40.5㎡	9月12日	10次	H23 106－127
32	洞ノ口遺跡	88.45㎡	22.8㎡	9月13日～9月27日	15次	H23 106－100
33	洞ノ口遺跡	159.77㎡	24.3㎡	9月26日～9月27日	16次	H23 106－148
34	南小泉遺跡	86.95㎡	30㎡	9月26日～9月29日		H23 106－59
35	砂押屋敷遺跡	58.23㎡	16㎡	9月28日		H23 106－134
36	南小泉遺跡	91.87㎡	22.5㎡	10月5日～10月7日		H23 106－179
37	城丸古墳	122.48㎡	31.5㎡	10月7日～10月12日	1次	H23 106－183
38	南小泉遺跡	94.95㎡	24.9㎡	10月24日～10月26日		H23 106－164
39	日辺館跡	94.40㎡	17.4㎡	11月1日～11月4日		H23 106－220
40	洞ノ口遺跡	124.42㎡	28.8㎡	11月7日～11月10日	17次	H23 106－192
41	南小泉遺跡	175.15㎡	42.6㎡	10月24日		H23 106－198
42	沖野城跡	65.62㎡	15㎡	10月26日		H23 106－197
43	今市遺跡	64.59㎡	18㎡	11月7日		H23 106－221
44	洞ノ口遺跡	63.70㎡	20.0㎡	11月14日～11月17日	18次	H23 106－240
45	長喜城跡	86.44㎡	28.5㎡	11月14日		H23 106－239
46	南小泉遺跡	78.66㎡	24.9㎡	11月21日～11月22日		H23 106－238
47	今市遺跡	63.96㎡	18.6㎡	11月24日～11月25日		H23 106－165
48	今泉遺跡	135.80㎡	39.0㎡	11月28日		H23 106－188
49	沖野城跡	211.45㎡	67.8㎡	11月29日～12月2日	11次	H23 106－256
50	本町遺跡	104.54㎡	24.6㎡	12月5日		H23 106－184
51	的場遺跡	77.42㎡	17.1㎡	12月19日		H23 106－226
52	小鶴城跡	78.66㎡	21㎡	12月20日		H23 106－283
53	郡山遺跡	67.23㎡	22.1㎡	1月10日～1月16日	217次	H23 106－275
54	南小泉遺跡	94.19㎡	34.3㎡	1月10日～1月13日		H23 106－231
55	中田北遺跡	114.50㎡	18㎡	1月16日		H23 106－310
56	南小泉遺跡	59.62㎡	24.6㎡	1月24日～1月25日		H23 106－308
57	鴻ノ巣遺跡	52.17㎡	17.0㎡	1月23日～1月24日		H23 106－307
58	鴻ノ巣遺跡	66.24㎡	19.8㎡	1月30日		H23 106－295
59	中在家南遺跡	97.63㎡	19.5㎡	1月30日		H23 106－312
60	南小泉遺跡	107.44㎡	12.1㎡	2月6日～9日		H23 106－346
61	小鶴城跡	57.96㎡	19.5㎡	2月6日～2月8日		H23 106－316
62	稲荷館跡	261.63㎡	36.3㎡	2月13日		H23 106－278
63	沖野城跡	155.86㎡	40.12㎡	2月20日		H23 106－356

第1表　調査実績2

Ⅱ　洞ノ口遺跡第14～18次発掘調査報告

1　調査要項

遺　跡　名　洞ノ口遺跡（宮城県遺跡登録番号01372）

調 査 地 点　第14次：仙台市宮城野区岩切字洞ノ口106番１
（平成23年４月18日届出、H23教生文第106－７号回答）
第15次：仙台市宮城野区岩切字洞ノ口82番48
（平成23年７月25日届出、H23教生文第106－100号回答）
第16次：仙台市宮城野区岩切字洞ノ口165－７
（平成23年８月29日届出、H23教生文第106－148号回答）
第17次：仙台市宮城野区岩切字洞ノ口102番１
（平成23年10月５日届出、H23教生文第106－192号回答）
第18次：仙台市宮城野区岩切字洞ノ口105
（平成23年10月10日届出、H23教生文第106－240号回答）

調 査 期 間　第14次：平成23年５月16日～19日　第15次：平成23年９月13日～27日
第16次：平成23年９月26日～27日　第17次：平成23年10月７日～10日
第18次：平成23年11月14日～17日

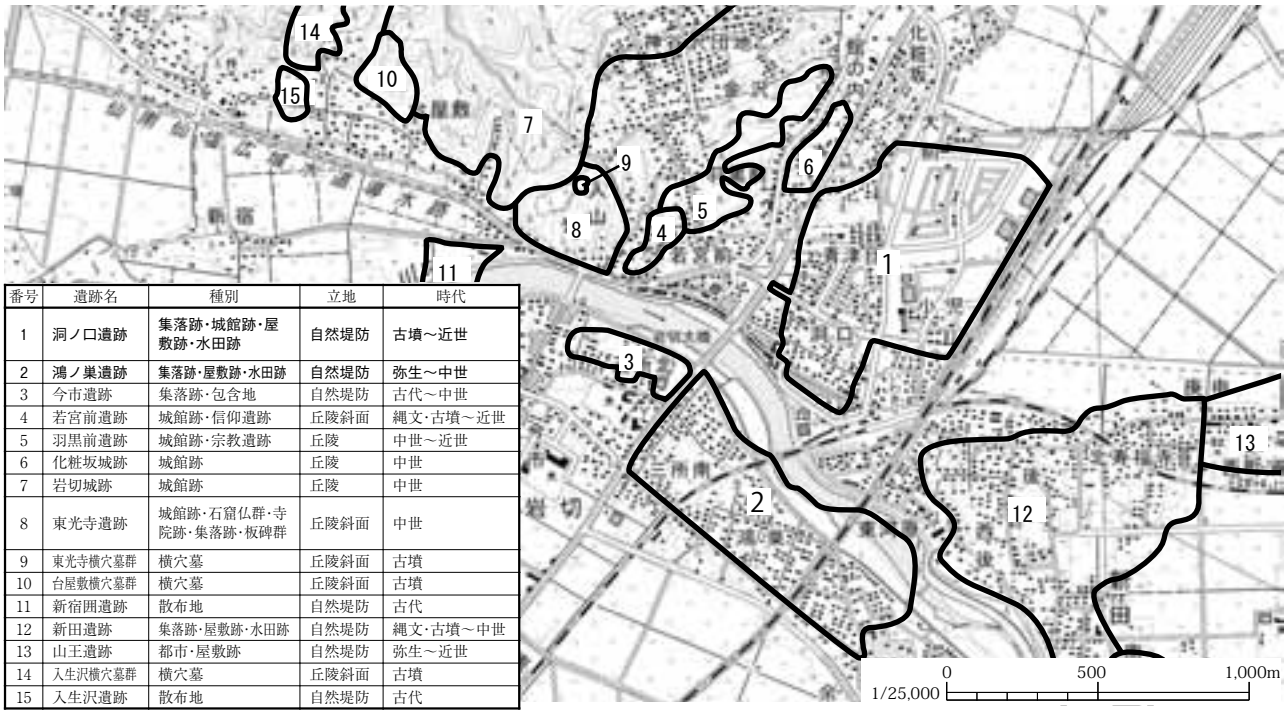
調 査 面 積（調査対象面積）　第14次：36㎡（92.71㎡）　第15次：22.8㎡（88.45㎡）　第16次：24.3㎡（159.77㎡）
第17次：28.8㎡（548.97㎡）　第18次：20.0㎡（63.70㎡）

調 査 原 因　個人住宅建築工事

調 査 主 体　仙台市教育委員会

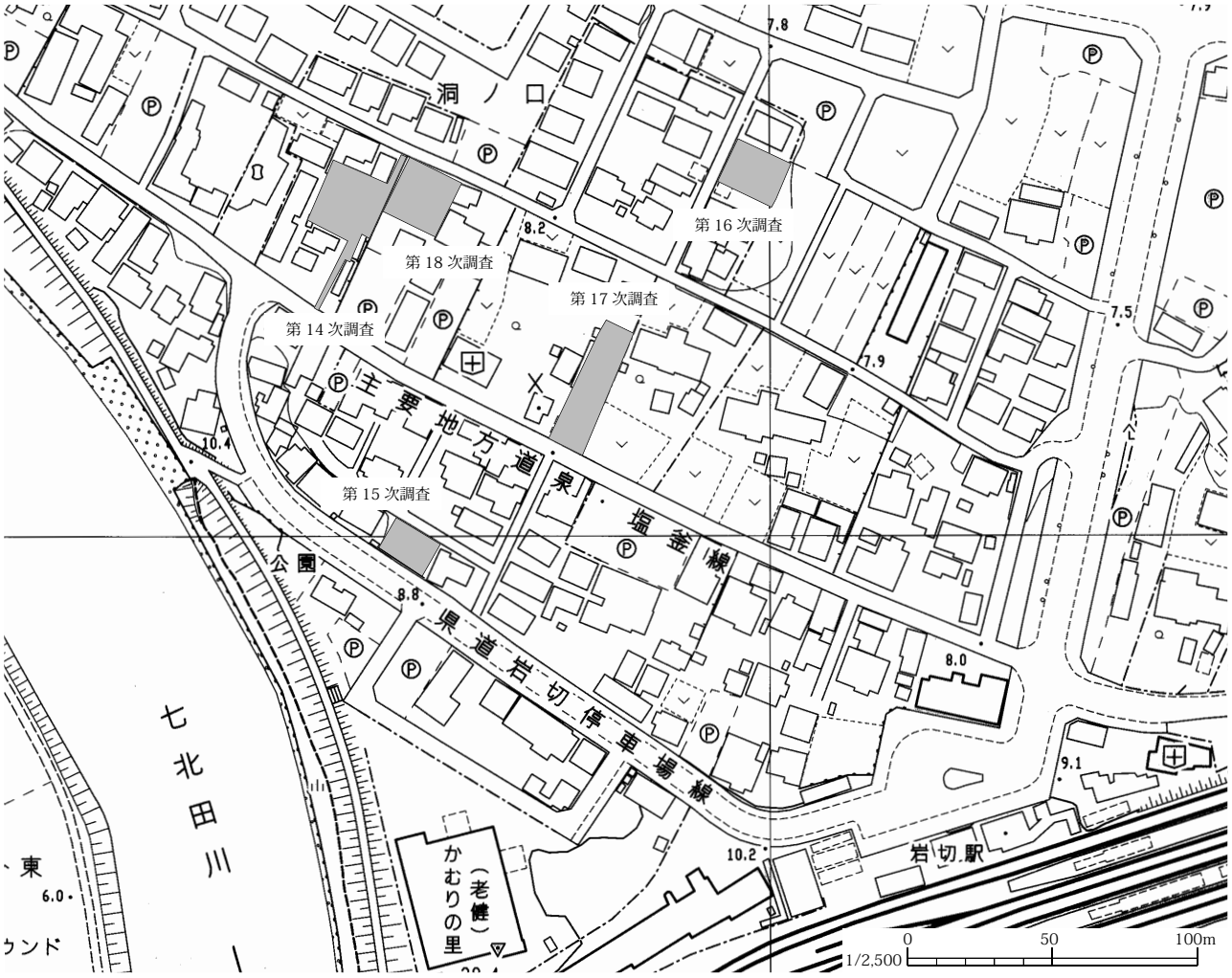
調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係

担 当 職 員　第14次：主事　小泉博明　文化財教諭　橋本勇人
第15次：主事　廣瀬真理子　小泉博明　文化財教諭　橋本勇人　石山智之　佐藤洋平
第16次：主事　小泉博明　文化財教諭　石山智之
第17次：主事　小泉博明　文化財教諭　石山智之
第18次：主事　小泉博明　文化財教諭　吉野　信　石山智之



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	洞ノ口遺跡	集落跡・城館跡・屋敷跡・水田跡	自然堤防	古墳～近世
2	鴻ノ巣遺跡	集落跡・屋敷跡・水田跡	自然堤防	弥生～中世
3	今市遺跡	集落跡・包含地	自然堤防	古代～中世
4	若宮前遺跡	城館跡・信仰遺跡	丘陵斜面	縄文・古墳～近世
5	羽黒前遺跡	城館跡・宗教遺跡	丘陵	中世～近世
6	化粧坂城跡	城館跡	丘陵	中世
7	岩切城跡	城館跡	丘陵	中世
8	東光寺遺跡	城館跡・石窟仏群・寺院跡・集落跡・板碑群	丘陵斜面	中世
9	東光寺横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
10	台屋敷横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
11	新宿囲遺跡	散布地	自然堤防	古代
12	新田遺跡	集落跡・屋敷跡・水田跡	自然堤防	縄文・古墳～中世
13	山王遺跡	都市・屋敷跡	自然堤防	弥生～近世
14	入生沢横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
15	入生沢遺跡	散布地	自然堤防	古代

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　調査区の位置

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より提出された、「埋蔵文化財発掘の届出について」に対して、文化財保護法第93条に基づき実施した。確認調査を実施したところ、各調査区で遺構が検出されたため、引き続き本発掘調査を実施した。調査区はいずれも住宅建築範囲内に設定した。

適宜、平面・断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

3　遺跡の位置と環境

洞ノ口遺跡は、仙台市の北東部、JR岩切駅の北側に位置する。遺跡の南側には七北田川が流れ、その自然堤防上から後背湿地にかけて立地する。遺跡は、東西500～600m、南北1000mの範囲におよび、標高は５～８ｍである。

本遺跡は、古墳時代から近世にかけての複合遺跡であるが、その中でも中世の遺構･遺物が多く発見されている。これまでの調査では、12世紀に遡る遺構群と、15世紀後半から16世紀後半にかけての城館に関連する遺構群の、少なくとも二時期あることが明らかになっている。また、出土遺物には、常滑産、渥美産、古瀬戸、在地産の他、中国産の陶磁器や、饗宴や儀式で使用したかわらけなど、多種多様な遺物が出土している。

4　第14次調査

1）基本層序

第14次調査で確認した基本層は大別４層、細別５層である。遺構掘り込み面はⅢ層上面であるが、Ⅳ層上面で遺構を検出している。

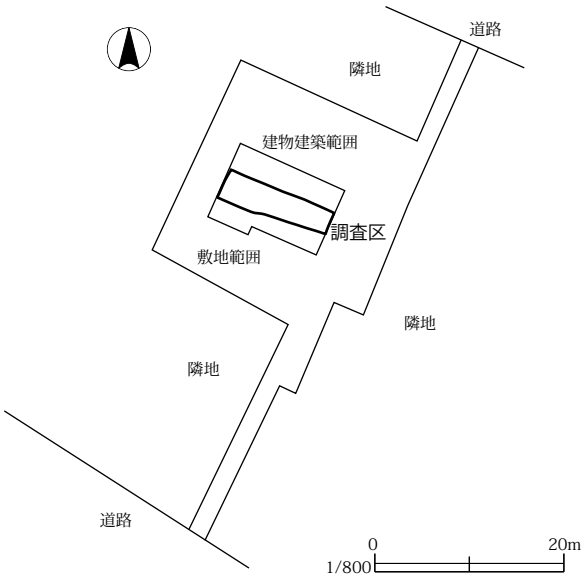
Ⅰ層：層相から２層に細分される。Ⅰa層は暗褐色（10YR３／４）のシルト、Ⅰb層は褐色（10YR４／４）のシルトで

ある。盛土以前の旧畑地耕作土である。層厚は25～40cm程度である。

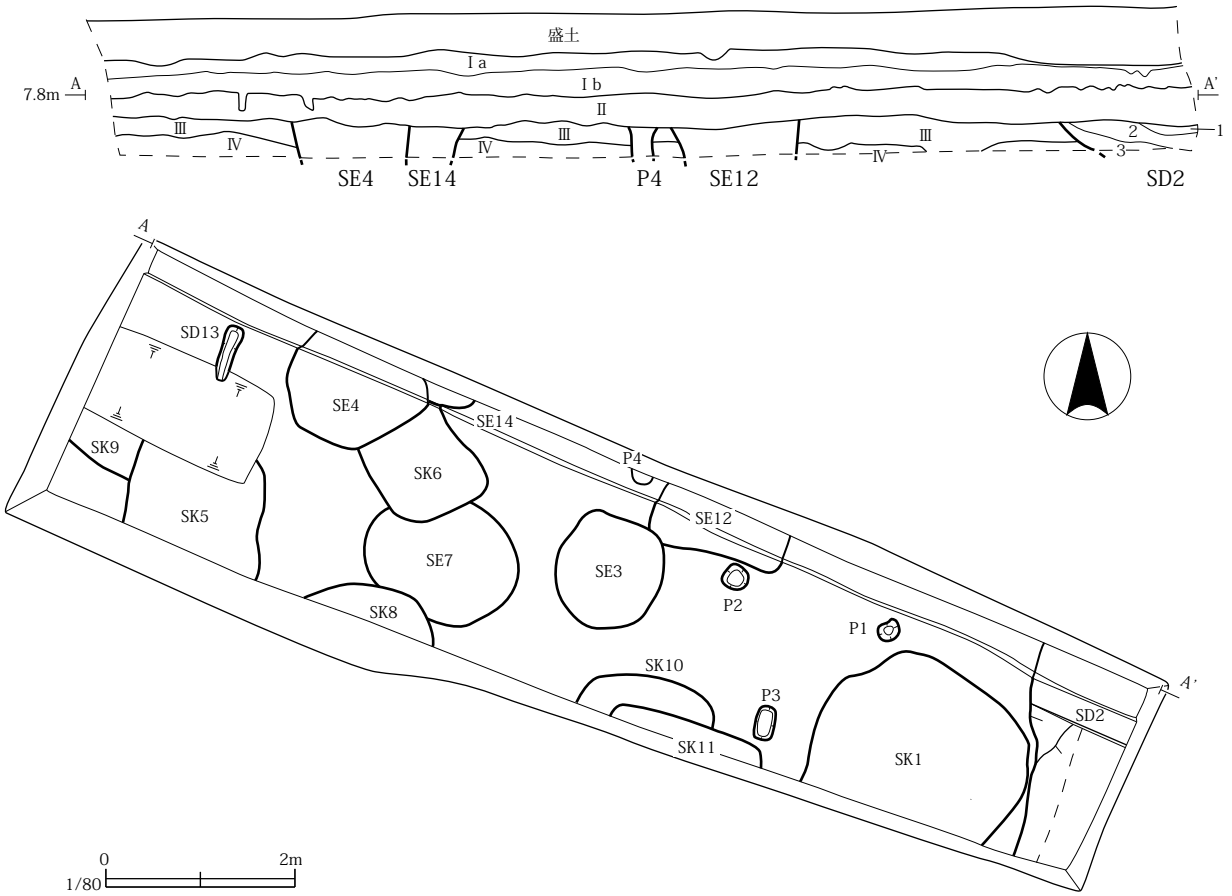
Ⅱ層：黒褐色（10YR３／２）の粘土質シルトで、炭化物を少量含む。旧畑地耕作土である。層厚は20～40cm程度である。

Ⅲ層：黒褐色（10YR３／１）の粘土質シルトで、にぶい黄褐色の粘土質シルトと炭化物を小ブロック状に含む。層厚は20～30cm程度で、遺構の掘り込み面である。 第18次調査のⅡa層に対応する。

Ⅳ層：にぶい黄褐色（10YR５／３）の粘土質シルトである。自然堤防を形成する水成堆積層である。第18次調査のⅢ層に対応する。



第３図　第14次調査　調査区配置図



層位	土色･土質	しまり	粘性	混入物等	備考
Ⅰa	10YR３／４暗褐色シルト	ややあり	あまりなし	均質	盛土前の畑地耕作土
Ⅰb	10YR４／４褐色シルト	ややあり	あまりなし	均質	旧畑地耕作土
Ⅱ	10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を少量含む	旧畑地耕作土か
Ⅲ	10YR３／１黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトと炭化物を小ブロック状に含む	遺構掘り込み面　第18次Ⅱa層対応
Ⅳ	10YR５／３にぶい黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	自然堤防を形成する水成堆積層	遺構検出面　第18次Ⅲ層対応

遺構･層位		土色･土質	しまり	粘性	混入物等	備考
SE12		2.5Y３／１黒褐色粘土質シルト	あり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に多く、炭化物を若干、含む	人為的埋土か
SD２	1	10YR３／３暗褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトを粒状にごく少量含む	自然堆積土
	2	10YR３／１黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を若干、にぶい黄褐色の粘土質シルトを粒状に若干、含む	自然堆積土
	3	10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に少量、炭化物を粒状にごく少量、含む	自然堆積土
P４		10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトと炭化物を粒状にごく少量含む	

第４図　第14次調査　遺構配置図・断面図

2）発見遺構と出土遺物

溝跡２条、井戸跡５基、土坑７基、ピット４基を検出した。調査区の制約や湧水により、遺構の全体や底面が検出できたものは少なく、土坑としたものには井戸跡が含まれている可能性がある。

遺物は遺構検出面、遺構堆積土から土師器、須恵器、かわらけ、瓦質土器、陶器、磁器、土製品、石製品、金属製品、鉄滓が出土している。

（１）溝跡

ＳＤ２溝跡

調査区東半部に位置する。他の遺構との重複はない。検出長は1.90mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅1.20m以上、下端幅および断面形は底面未検出のため不明である。深さ15cm以上である。堆積土は３層を確認している。Ⅳ層を起源とするにぶい黄褐色の粘土質シルトや炭化物を含む暗褐色や黒褐色の粘土質シルトで、いずれも自然堆積層と考えられる。

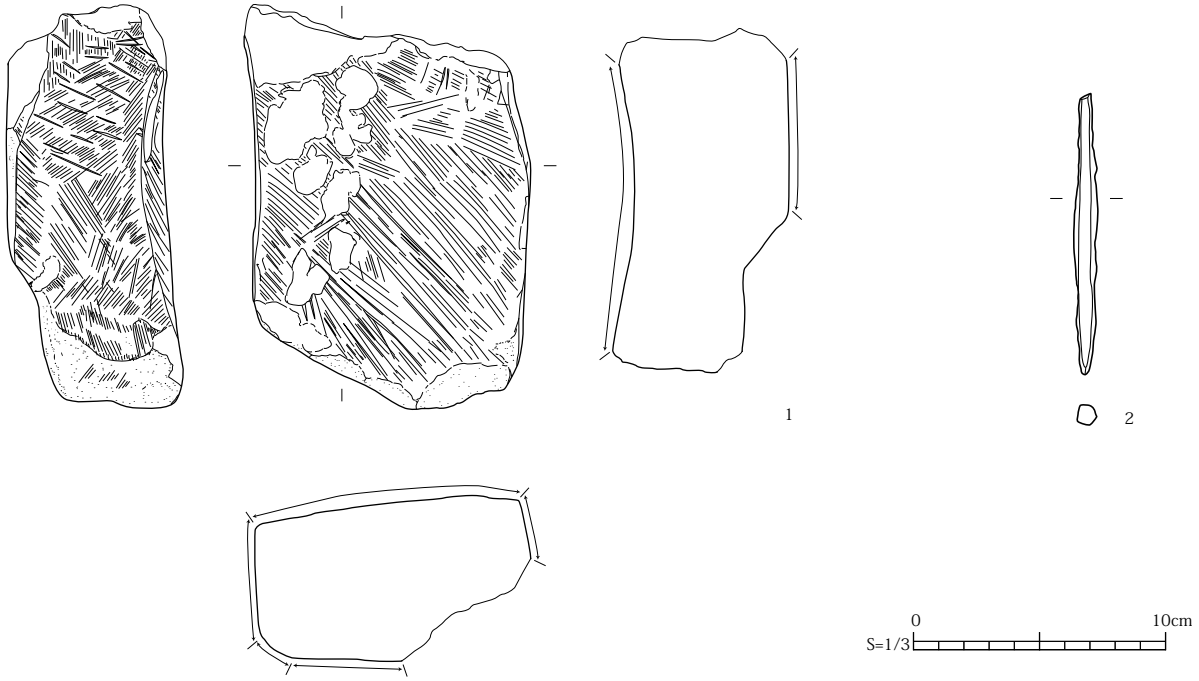
遺物は、土師器鉢、常滑産甕、砥石（第５図－１）、鉄釘（第５図－２）が出土している。

（２）井戸跡

ＳＥ３井戸跡

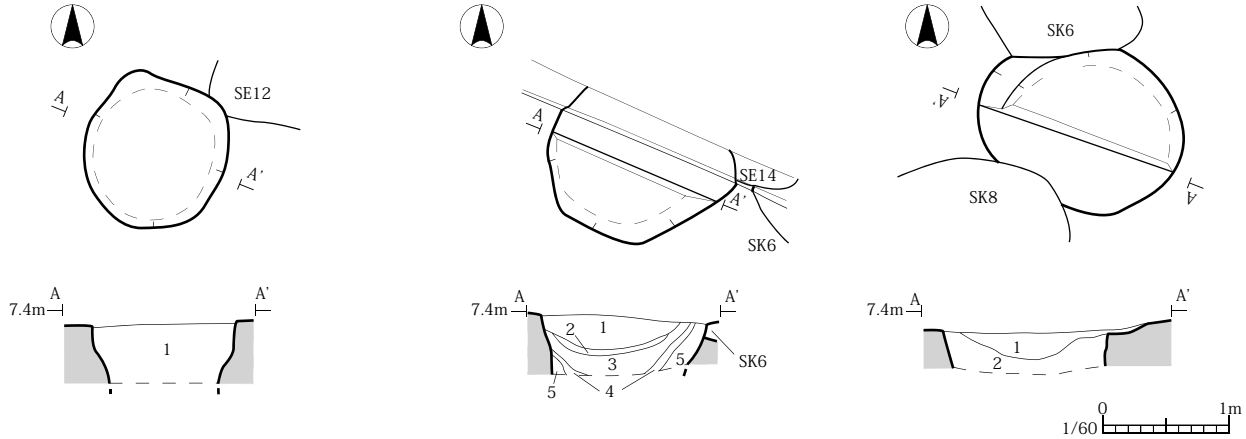
調査区東半部に位置する。ＳＥ12井戸跡と重複し、これよりも新しい。平面形は不整円形を呈する。規模は長軸1.26m、短軸1.13mである。底面は未検出であるが、断面形は円筒形を呈するものとみられる。堆積土は１層を確認している。炭化物を含む黒褐色の粘土質シルトで、人為的埋土と考えられる。

遺物は、土師器、ロクロ土師器坏・甕、常滑産甕（第７図－２）、在地産擂鉢（第７図－３）、鉄釘（第７図－１）が出土している。



図中番号	登録番号	遺構名	種　別	器種	法量(cm)			特徴･備考	写真図版
					長さ	幅	厚さ		
1	K－２	SD２	石製品	砥石	(15.9)	11.4	6.7	砥面４面　石材:凝灰岩　被熱	６－12
2	N－１	SD２	金属製品	釘	(11.1)	0.9	0.8		６－９

第５図　ＳＤ２溝跡出土遺物



ＳＥ３井戸跡　　ＳＥ４井戸跡　　ＳＥ７井戸跡

遺構･層位		土色･土質	しまり	粘性	混入物等	備考
SE３		10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を小ブロック状に若干含む	
SE４	1	10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を若干含む	自然堆積土
	2	10YR２／１黒色粘土	あまりなし	あり	炭化物を主体とする層	
	3	10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を若干含む	
	4	10YR３／３暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	黒褐色の粘土質シルトを小ブロック状に少量含む	
	5	10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を含む	
SE７	1	10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトと炭化物を粒状に少量含む	人為的埋土
	2	2.5Y３／２黒褐色粘土質シルト	あり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に多く､炭化物を粒状にごく少量､含む	

第６図　井戸跡　平面・断面図

ＳＥ４井戸跡

調査区西半部に位置する。ＳＫ６土坑、ＳＥ14井戸跡と重複し、いずれよりも新しい。平面形は一部が調査区外となるが、不整円形とみられる。規模は東西1.50m、南北1.00m以上である。深さは50㎝以上である。底面は未検出であるが、断面形は円筒状を呈するとみられる。堆積土は５層を確認している。炭化物などを含む黒褐色などの粘土質シルトで、２層は炭化物主体層である。いずれも自然堆積土と考えられる。

遺物は、土師器、須恵器坏・甕、在地産鉢、瓦質土器鉢（第７図－４）、坩堝が出土している。

ＳＥ７井戸跡

調査区西半部に位置する。ＳＫ６・ＳＫ８土坑と重複し、いずれよりも古い。平面形は不整楕円形とみられる。規模は長軸1.66m、短軸1.25mで、深さは40㎝以上である。底面は未検出であるが、断面形は円筒状を呈するとみられる。堆積土は２層を確認している。いずれも黒褐色の粘土質シルトで、にぶい黄褐色の粘土質シルトや炭化物を含み、人為的埋土と考えられる。

遺物は、土師器、常滑産甕（第７図－６～８）、在地産甕･壺（第７図－５）、瀬戸産瓶類（写真図版６－２）、産地不明壺（写真図版６－３）、鉄釘、鉄滓（写真図版６－８）が出土している。

ＳＥ12井戸跡

調査区東半部に位置する。ＳＥ３井戸跡と重複し、これよりも古い。平面形は一部が調査区外となるが、方形を基調としたものとみられる。規模は東西1.50m、南北0.55m以上で、深さは35㎝以上である。底面は未検出であるが、断面形は円筒状を呈するとみられる。堆積層は１層を確認している。にぶい黄褐色の粘土質シルトブロックと炭化物を含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

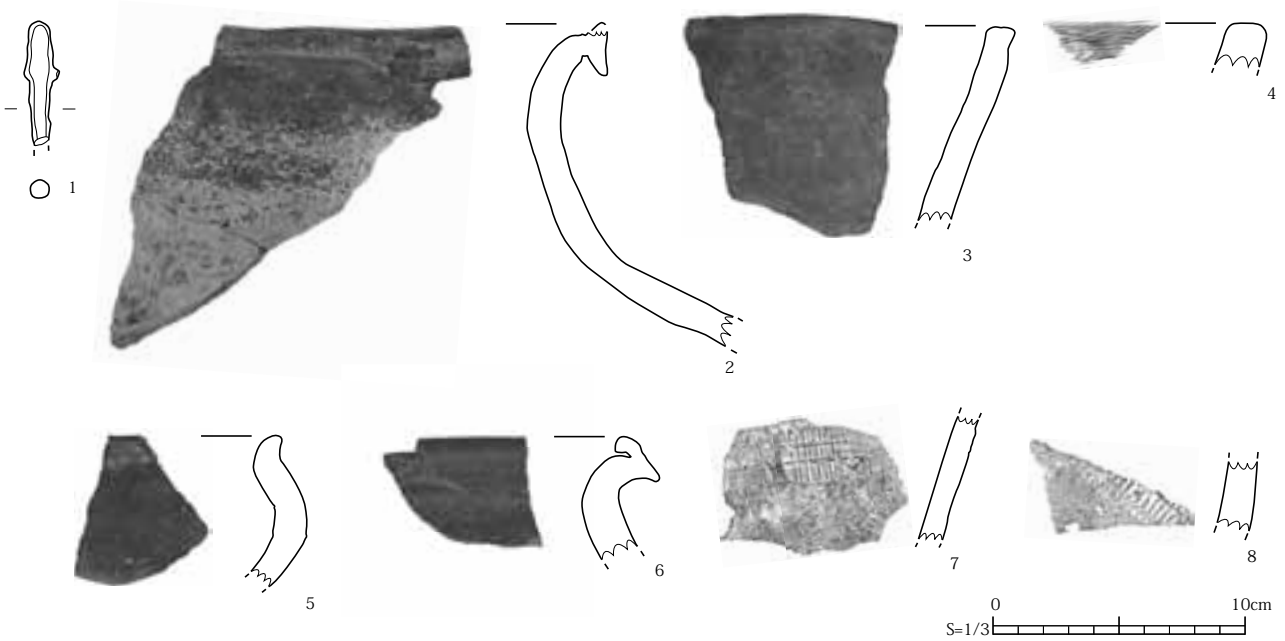
遺物は出土していない。

ＳＥ14井戸跡

調査区西半部に位置する。ＳＥ４井戸跡、ＳＫ６土坑と重複し、ＳＥ４井戸跡よりも古く、ＳＫ６土坑よりも新しい。平面形は大半が調査区外となることから不明である。規模は東西0.60m以上、南北0.15m以上で、深さは35㎝以上である。断面形は円筒状を呈するとみられる。堆積層は１層を確認している。にぶい黄褐色の粘土質シルトブロッ

クと炭化物を含む黒褐色の粘土質シルトで、人為的埋土と考えられる。

遺物は出土していない。



図中番号	登録番号	遺構名	種　別	器種	法量(cm)			特徴・備考	写真図版
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)		
1	N－2	SE3	金属製品	釘か	(5.0)	0.7	0.8		6－7
2	I－5	SE3	陶器	甕	－	－	－	常滑　13C後半～14C前半	－
3	I－6	SE3	陶器	擂鉢	－	－	－	在地(白石窯)　13C後半～14C前半	－
4	I－7	SE4	瓦質土器	鉢か	－	－	－	押印	－
5	I－8	SE7	陶器	壺	－	－	－	在地(白石窯)　13C後半～14C前半	－
6	I－9	SE7	陶器	甕	－	－	－	常滑　14C	－
7	I－11	SE7	陶器	甕	－	－	－	常滑　押印	－
8	I－12	SE7	陶器	甕	－	－	－	常滑　押印	6－1
－	I－10	SE7	陶器	瓶類	－	－	－	瀬戸　鉄釉　梅瓶か	6－2
－	I－13	SE7	陶器	壺か	－	－	－	産地不明	6－3
－	N－3	SE7	金属製品	鉄滓	－	－	－	152.5g	6－8

第７図　井戸跡出土遺物

（３）土坑

ＳＫ１土坑

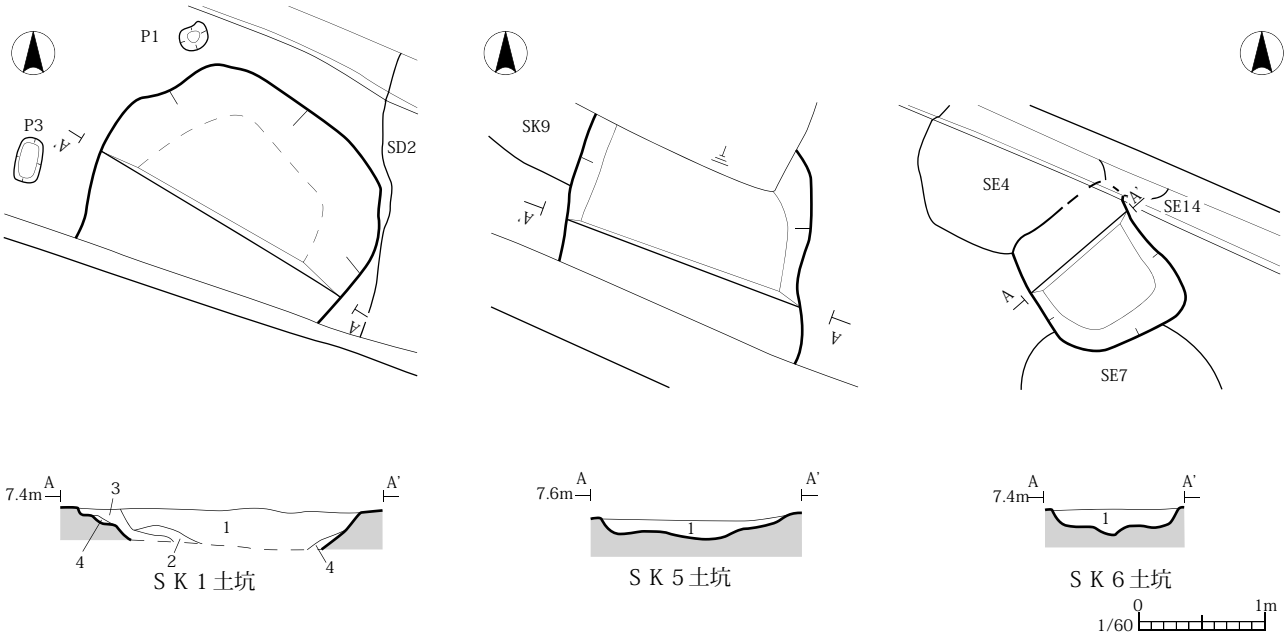
調査区東半部に位置する。他の遺構との重複はない。平面形は一部が調査区外となるが、不整方形を基調とするとみられる。規模は南北1.70m以上、東西2.30mで、深さは35cm以上である。底面未検出のため、断面形は不明である。堆積土は４層を確認している。１、３層はにぶい黄褐色の粘土質シルトと炭化物を含む黒褐色の粘土質シルトで、２、４層はにぶい黄褐色の粘土質シルトを含む黒褐色の粘土である。いずれも自然堆積土と考えられる。

遺物は、土師器、須恵器甕、常滑産甕、在地産鉢、産地不明壺、砥石（第９図－１）、が出土している。

ＳＫ５土坑

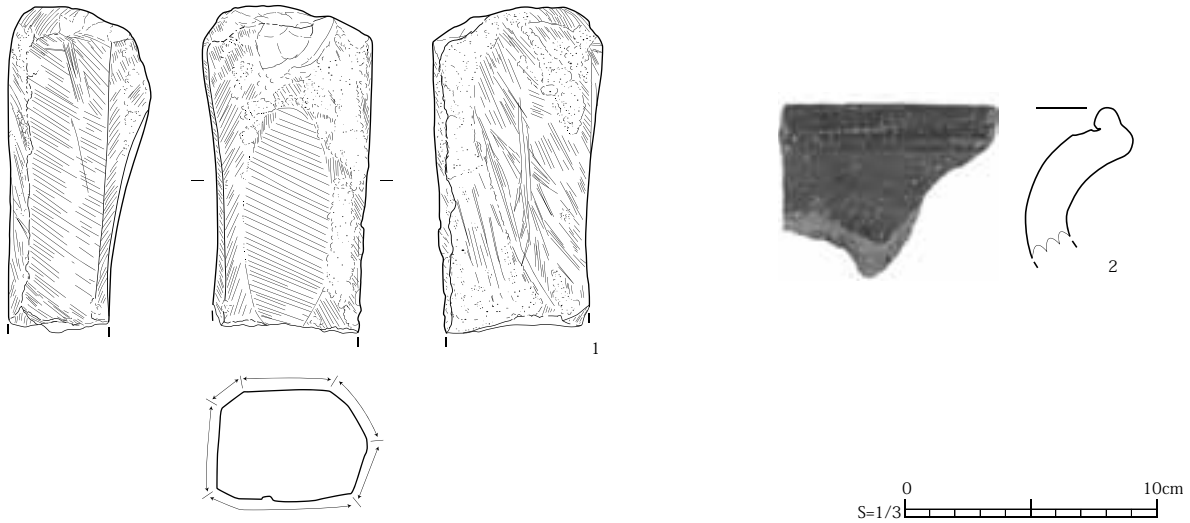
調査区西半部に位置する。ＳＫ９土坑と重複し、これよりも新しい。平面形は一部が調査区外となることから不明である。規模は東西1.50m、南北1.15m以上である。断面形は皿状を呈し、底面にはやや凹凸がみられる。堆積土は単層で、炭化物やにぶい黄褐色の粘土質シルトのブロックを含む黒褐色の粘土質シルトである。

遺物は、土師器、常滑産甕、龍泉窯系青磁碗（写真図版６－４、５）が出土している。



遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
SK 1	1	10YR 3／2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色粘土質シルトと炭化物を粒状に若干含む	自然堆積土
	2	10YR 3／1 黒褐色粘土	あまりなし	あり	にぶい黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む	自然堆積土
	3	2.5Y 3／2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色粘土質シルトを粒～小ブロック状にやや多く含む　炭化物を粒状にごく少量含む	自然堆積土
	4	10YR 2／2 黒褐色粘土	あまりなし	あり	にぶい黄褐色粘土質シルトを粒状にごく少量含む	自然堆積土
SK 5		10YR 3／2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物, 炭化物粒を含む　にぶい黄褐色粘土質シルトを小ブロック, ブロック状に含む	人為的埋土か
SK 6		10YR 3／2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む　炭化物を少量含む	人為的埋土か

第８図　土坑　断面図



図中番号	登録番号	遺構名	種　別	器種	法量(cm)			特徴・備考	写真図版
					長	縦幅	横幅		
1	K－3	SK 1	石製品	砥石	12.9	6.7	5.6	砥面６面　　石材：凝灰岩	6－11
2	I－14	SK 6	陶器	甕	－	－	－	常滑　13C前～中葉	－
－	J－4	SK 5	青磁	碗	－	－	－	龍泉窯系　14C	6－4
－	J－5	SK 5	青磁	碗	－	－	－	龍泉窯系　蓮弁文　13～14C	6－5
－	J－3	SK 8	青磁	碗	－	－	－	龍泉窯系　蓮弁文　13～14C	6－6

第９図　土坑出土遺物

ＳＫ６土坑

調査区西半部に位置する。ＳＥ４、ＳＥ７井戸跡、ＳＥ14井戸跡と重複し、ＳＥ４、14井戸跡よりも古く、ＳＥ７井戸跡よりも新しい。平面形は正方形を呈する。規模は長軸1.10m、短軸1.00mで、深さは10～23cmである。断面形は逆台形を呈し、底面には凹凸がみられる。堆積土は単層で、にぶい黄褐色の粘土質シルトのブロックと炭化物を含む黒褐色の粘土質シルトである。

遺物は、かわらけ皿、常滑産甕（第９図－２）、山茶碗系片口鉢が出土している。

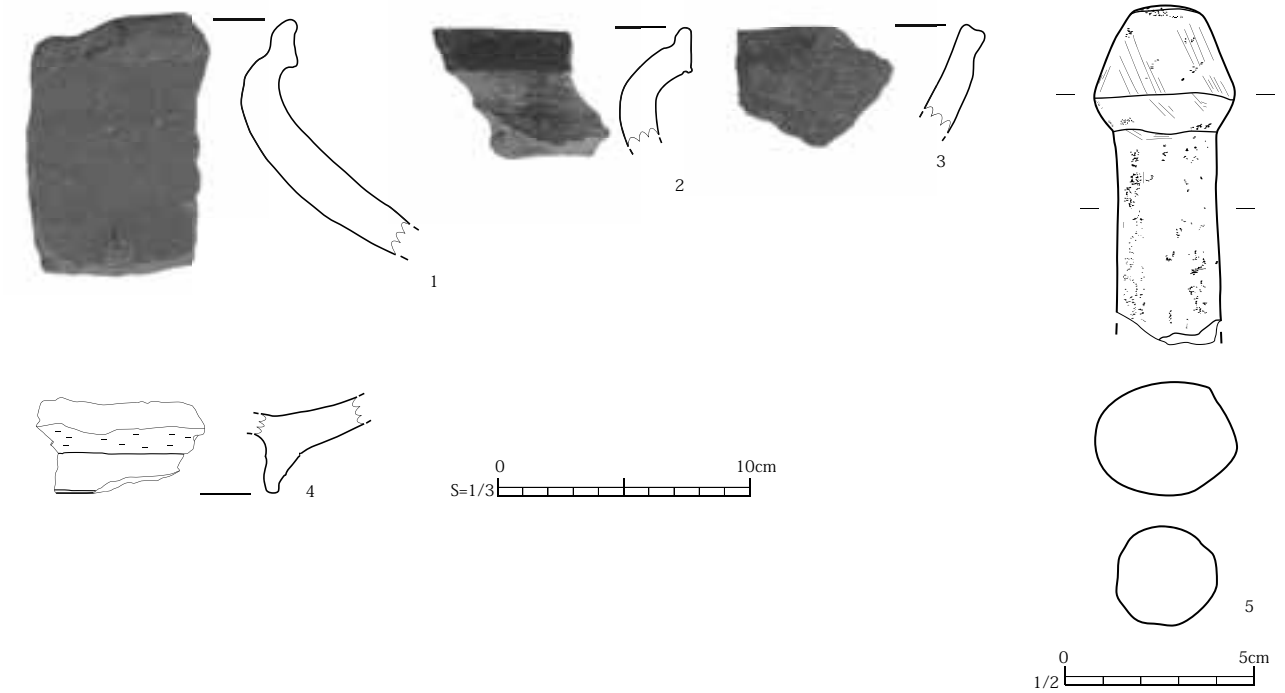
（４）ピット

調査区東半部に分布し、４基を検出した。いずれも他の遺構との重複はない。平面形は円形もしくは楕円形を呈する。柱痕跡が確認されたものはない。堆積土はにぶい黄褐色の粘土質シルトを含む黒褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

（５）その他の遺物

遺構検出面から常滑産甕（第10図－２）、在地産鉢（第10図－３）・甕（第10図－１）、山茶碗系片口鉢（第10図－４）、瀬戸産とみられる壺、産地不明青磁碗、石棒（第10図－５）が出土している。また、ＳＫ８土坑検出面から龍泉窯系青磁碗（写真図版６－６）が出土している。



図中番号	登録番号	出土層位	種　別	器種	法量(cm)			特徴･備考	写真図版
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)		
1	Ⅰ－１	遺構確認面	陶器	甕	－	－	－	在地　13C後半～14C前半	－
2	Ⅰ－２	遺構確認面	陶器	甕	－	－	－	常滑　13C中葉～後葉	－
3	Ⅰ－３	遺構確認面	陶器	擂鉢	－	－	－	在地　13C後半～14C前半	－
4	Ⅰ－４	遺構確認面	陶器	片口鉢	－	－	(3.8)	山茶碗系　13C後半	－
5	Ｋ－１	遺構確認面	石製品	石棒	(8.9)	3.8	2.9	石材:粘板岩	６－10

第10図　遺構外出土遺物

5　第15次調査

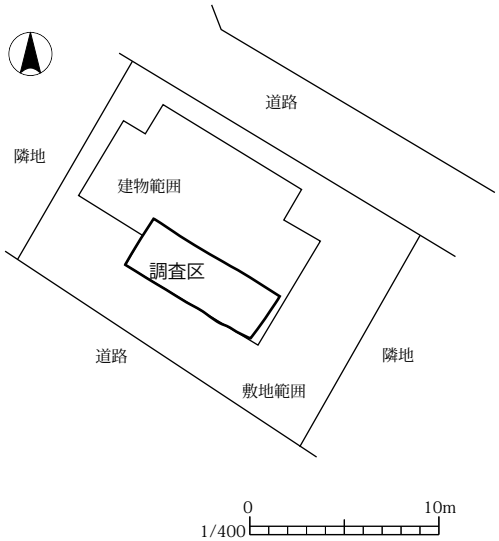
1）基本層序

第15次調査では、基本層は大別５層、細別８層を確認した遺構掘り込み面はⅢ層上面とⅣａ層上面であるが、すべての遺構をⅣａ層上面で検出している。また、深掘トレンチを設定し、Ⅳａ層以下の断面観察を行っている。

Ⅰ層：暗褐色（10ＹＲ３／３）のシルトで、旧畑地耕作土である。層厚は20cm程度である。

Ⅱ層：黒褐色（10ＹＲ２／２）の粘土質シルトで、炭化物を粒状に少量含む。旧畑地耕作土である。層厚は20～30cm程度である。

Ⅲ層：黒褐色（10ＹＲ３／２）の粘土質シルトで、にぶい黄褐色（10ＹＲ４／３）の粘土質シルトを少量含む。層厚は10～20cm程度である。陶器などを多量に含む。遺構の掘り込み面である。



第11図　第15次調査　調査区配置図

Ⅳ層：層相から３層に細分される。Ⅳａ層は、にぶい黄褐色（10ＹＲ４／３）の粘土質シルトで、焼土を粒状に少量含む。層厚は30cm程度である。土師器や須恵器を多く含む。ＳＫ８土坑などの遺構掘り込み面である。Ⅳｂ層は、にぶい黄褐色（10ＹＲ４／３）の粘土質シルトで、黄褐色（10ＹＲ５／３）の砂質シルトを斑状に含む。層厚は15～25cm程度である。Ⅳｃ層は、調査区の東に設定した深掘トレンチでのみ確認した、暗褐色（10ＹＲ３／４）の粘土質シルトである。層厚は５cm程度である。

Ⅴ層：自然堤防を形成する水成堆積層である。層相から２層に細分される。Ｖａ層は、黄褐色（2.5Ｙ５／３）の砂質シルトである。層厚は５～18cm程度である。Ｖｂ層は、黒褐色（10ＹＲ３／２）の砂質シルトである。

2）　発見遺構と出土遺物

今回の調査では溝跡１条、土坑11基、ピット40基以上を検出した。遺物は基本層、遺構堆積土から土師器、ロクロ土師器、須恵器、陶器、土製品、石製品、鉄製品、銭貨が出土している。なお、今回の調査で検出した遺構は、Ⅲ層上面から掘り込まれている遺構もあるが、すべてⅣ層上面で検出している。

（１）溝跡

ＳＤ３溝跡

調査区東半部に位置する南北方向の溝跡である。ＳＫ13土坑と重複し、それよりも新しい。検出長は約1.7mである。規模は、上端幅0.20m、下端幅0.12mで、検出面からの深さは16cmほどである。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、炭化物を粒状にやや多く含む黒褐色の砂質シルトである。

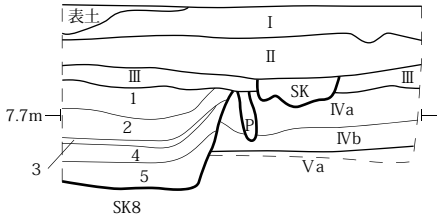
遺物は、土師器甕、ロクロ土師器甕、須恵器甕、古瀬戸とみられる壺が出土している。

（２）土坑

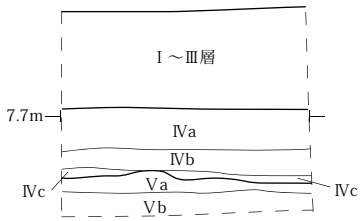
ＳＫ１土坑

調査区西端に位置する。ＳＫ５・ＳＫ７・ＳＫ８土坑と重複し、そのいずれよりも新しい。規模は長軸1.15m、短軸0.80mである。検出面からの深さは50cmほどである。断面形は箱形を呈する。堆積土は４層に細分される。黒褐色、暗褐色の砂質シルトと粘土質シルトであり、いずれも自然堆積土と見られる。そのうち、１層にごく少量の骨片、２層に炭化物粒、３層に骨片を含んでいるが、土坑の性格については不明である。

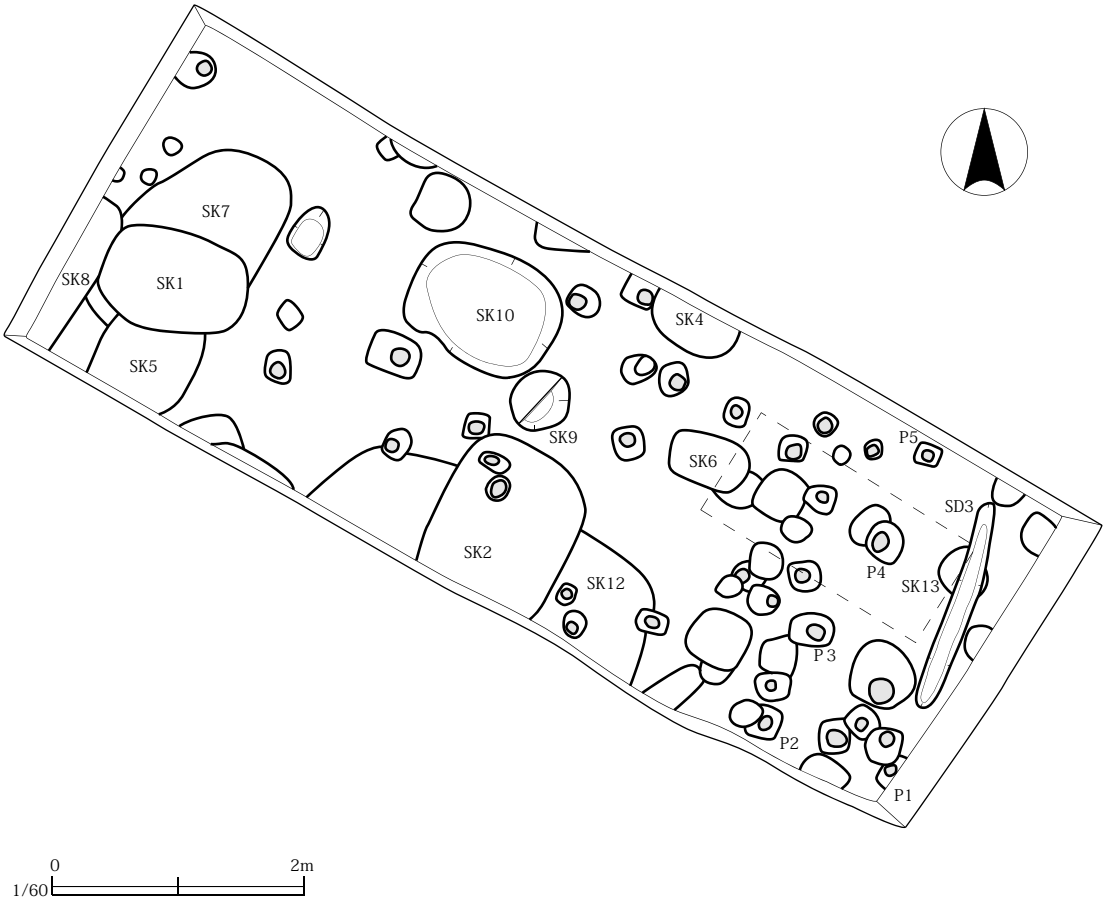
遺物は、土師器甕、ロクロ土師器坏・甕、須恵器坏・甕、大戸産長頸瓶（写真図版６－22）、常滑産甕、銭貨（写真図版７－１）、骨片が出土している。



西壁断面図

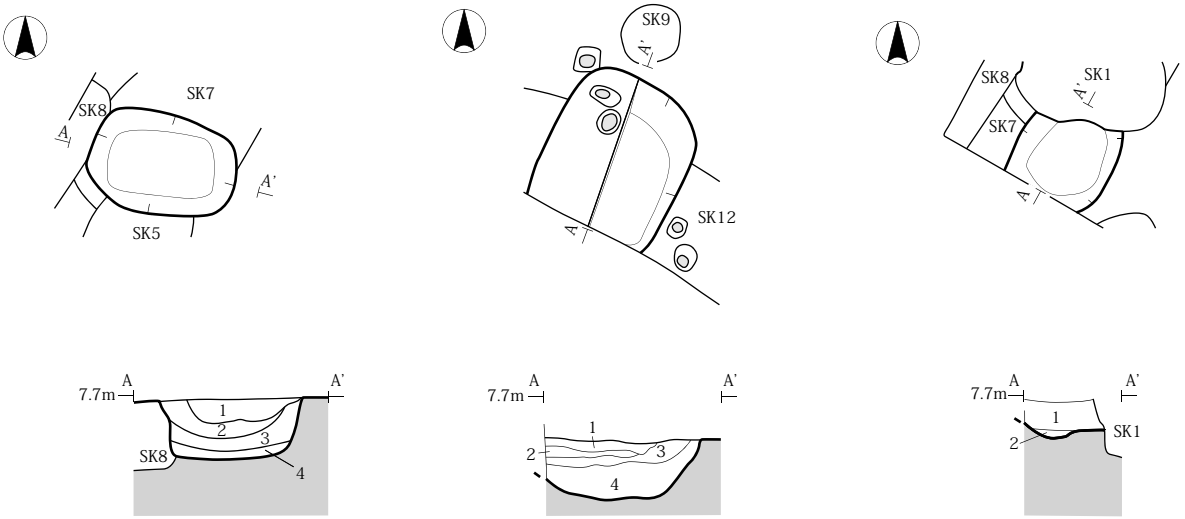


深掘部　北壁断面図

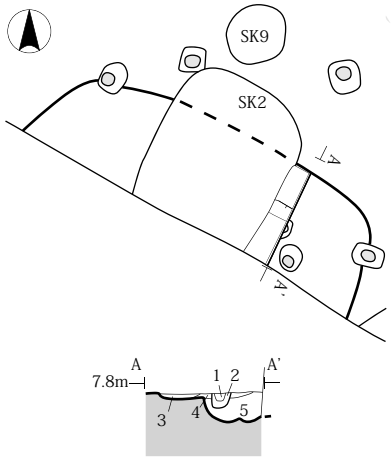


遺構･層位		土色･土質	しまり	粘性	混入物等	備考
Ⅰ		10YR３/３暗褐色シルト	あまりなし	ややあり		旧畑地耕作土
Ⅱ		10YR２/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に少量含む	旧畑地耕作土
Ⅲ		10YR３/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色(10YR４/３)の粘土質シルトを少量含む	
Ⅳa		10YR４/３にぶい黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり		
Ⅳb		10YR４/３にぶい黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	黄褐色(10YR５/３)の砂質シルトをブロック状に含む	
Ⅳc		10YR３/４暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり		
Va		2.5Y５/３黄褐色砂質シルト	あまりなし	ややあり		
Vb		10YR３/２黒褐色砂質シルト	ややあり	ややあり	砂質味強い	
SK８	1	10YR２/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状にごく少量含む	自然堆積
	2	10YR２/２黒褐色粘土質シルト	やや強い	弱い		
	3	10YR３/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	黄褐色(10YR５/３)の砂質シルトをブロック状に少量含む	
	4	10YR２/２黒褐色粘土質シルト	やや強い	弱い	炭化物の層と互層状に堆積	
	5	10YR２/３黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり		
SK		10YR２/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	あまりなし		
P		10YR２/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	あまりなし		

第12図　第15次調査　遺構配置図・断面図



ＳＫ１土坑　　ＳＫ２土坑　　ＳＫ５土坑



ＳＫ12土坑

遺構・層位		土色・土質	粘性	しまり	混入物等
SK 1	1	10YR 2／2 黒褐色砂質シルト	あまりなし	ややあり	炭化物ブロック多量、焼土粒やや多く含む 骨片、ごく少量出土
	2	10YR 2／2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状にごく少量含む
	3	10YR 3／2 黒褐色砂質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色（10YR 5／4）の粘土質シルトを粒～ブロック状にやや多く含む　骨片、銭貨出土
	4	10YR 3／3 暗褐色砂質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色（10YR 5／4）の粘土質シルトをブロック状に多量含む
SK 2	1	10YR 3／2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	灰を多量、炭化物を大ブロック状に少量含む
	2	7.5YR 2／1 黒色粘土質シルト	ややあり	あまりなし	炭化物の層　灰を少量含む
	3	10YR 2／3 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	焼土塊ごく少量、炭化物を粒～ブロック状にやや多く、含む
	4	10YR 4／3 にぶい黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	焼土粒を少量、炭化物を粒状にごく少量、にぶい黄橙色（10YR 7／4）の粘土質シルトを粒状に中量、含む
SK 5	1	10YR 2／2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状にやや多く含む
	2	10YR 4／3 にぶい黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	黒褐色の粘土質シルトをブロック状に多量、炭化物を粒状に少量、含む
SK12	1	10YR1. 7/1 黒色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に少量含む ピット　柱痕跡か
	2	10YR 2／3 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	焼土粒をごく少量含む ピット　柱掘方か
	3	10YR 2／1 黒色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を主体とする層
	4	10YR 3／4 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	焼土粒を少量含む
	5	10YR 4／4 褐色砂質シルト	ややあり	ややあり	焼土をブロック状に多量、炭化物を粒状にごく少量含む

0　　2m
1/60

第13図　土坑　平面・断面図

ＳＫ２土坑

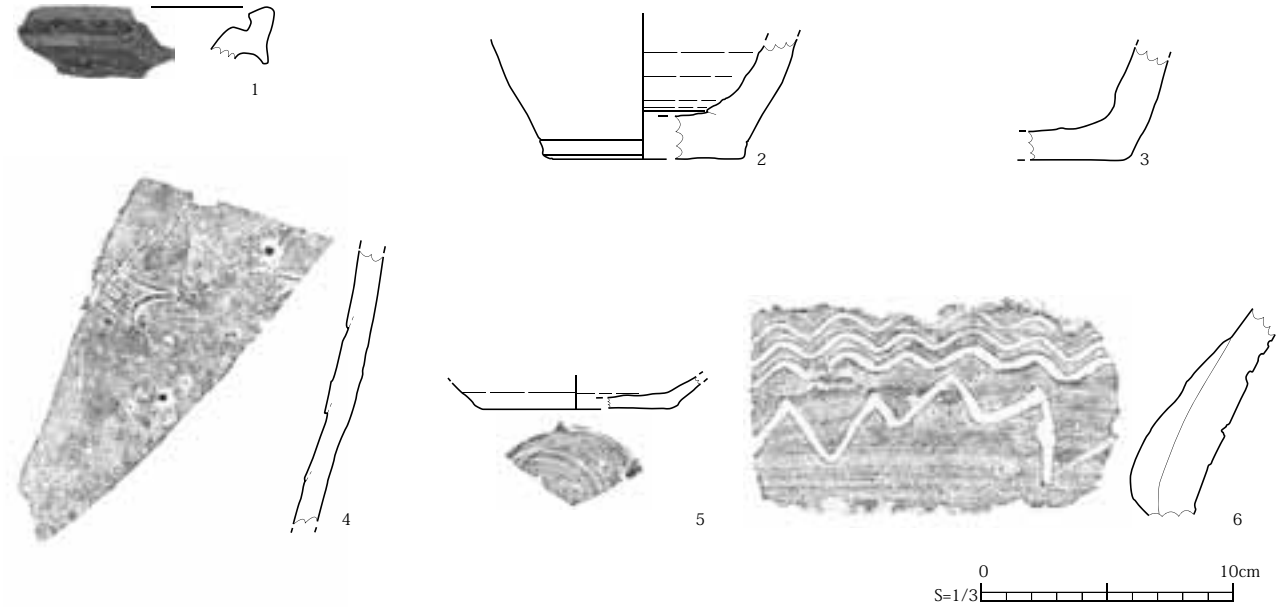
調査区中央部に位置する。ＳＫ12土坑およびピット２基と重複し、ＳＫ12土坑よりも新しく、ピット２基よりも古い。規模は、長軸1.25m以上、短軸1.10mで、検出面からの深さは45cmほどである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は３層に細分され、炭化物や焼土塊を含むにぶい黄褐色、黒褐色の粘土質シルトである。

遺物は、土師器甕、ロクロ土師器坏・甕、須恵器坏・甕、大戸産長頸瓶、常滑産甕（第14図－１）、銭貨（写真図版７－２）が出土している。

ＳＫ５土坑

調査区西端に位置する。ＳＫ２、ＳＫ７土坑と重複し、ＳＫ７土坑よりも新しく、ＳＫ２土坑よりも古い。規模は、南北0.60m以上、東西0.78mで、検出面からの深さは28cmほどである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は２層に細分され、炭化物を粒状に含む黒褐色～にぶい黄褐色の粘土質シルトである。

遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏・長頸瓶・甕、古瀬戸壺（第14図－３）、産地不明壺（第14図－２）が出土している。



図中番号	登録番号	遺構名	出土層位	種別	器種	法量(cm)			特徴・備考	写真図版
						口径(長)	底径(幅)	器高(厚)		
－	E－5	SK1	2	須恵器	長頸瓶	－	－	－	大戸	6－22
－	N－4	SK1	3・4	銅製品	銭貨	2.5	－	－	「□□元宝」(判読不可)　重さ3.4g	7－1
1	I－13	SK2	1	陶器	甕	－	－	－	常滑　13C後半	－
－	N－6	SK2	1	銅製品	銭貨	(2.1)	－	－	「咸平元宝」　北宋　初鋳:真宗咸平元(998)年　重さ:2.0g	7－2
2	I－14	SK5	1	陶器	壺	－	(8.1)	(4.7)	産地不明	6－28
3	I－15	SK5	1	陶器	壺	－	－	(4.5)	古瀬戸	6－29
4	I－17	SK8		陶器	甕	－	－	－	常滑　押印　14C	－
5	E－3	SK8		須恵器	坏	－	(7.6)	(1.2)	外面:ロクロナデ　底部、回転糸切り　内面:ロクロナデ	－
6	E－4	SK8		須恵器	甕	－	－	－	外面:ヘラ描波状文	6－23

第14図　土坑出土遺物

ＳＫ８土坑

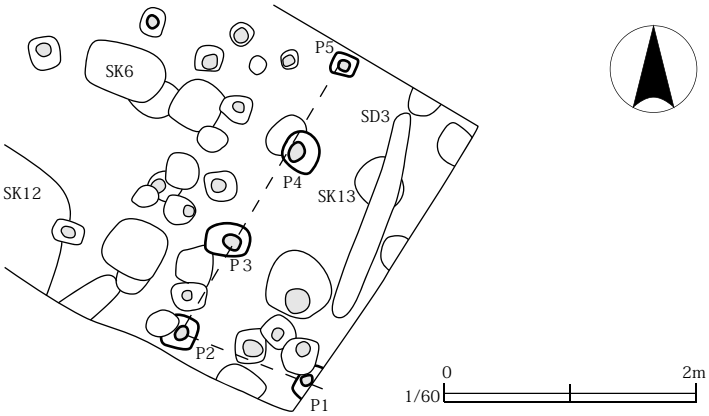
調査区西端に位置する。ＳＫ１・ＳＫ７土坑と重複し、いずれよりも古い。遺構のほとんどが調査区外であり、その規模については不詳である。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。Ⅳａ層上面からの深さは、80cmほどである。

遺物は、土師器甕、須恵器坏（第14図－５）・甕（第14図－６）、常滑産甕（第14図－４）が出土している。

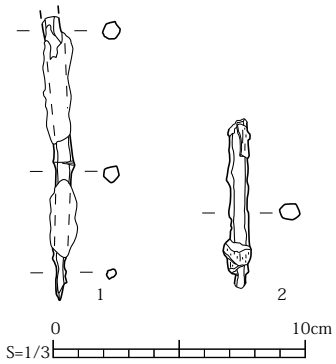
（３）ピット

調査区全域で、40基以上のピットを検出した。そのほとんどで柱痕跡と柱掘方あるいは柱抜き取り穴と柱掘方を確認した。柱掘方は楕円形ないし隅丸方形を基調としている。深さは15～30cmほどである。

掘方埋土は、Ｖａ層に由来すると考えられる黄褐色のシルトを多量に含む黒褐色の砂質シルト、粘土質シルトと、炭化物を粒状、ブロック状に多量に含む黒褐色、褐色などの砂質シルトと粘土質シルトとに大別される。Ｐ１～５は、柱掘方埋土が類似していることや、検出位置などから、同一の建物を構成する柱穴である可能性が指摘できる。



第15図　柱穴配置図



図中番号	登録番号	遺構名	出土層位	種別	器種	法量(cm)			特徴・備考	写真図版
						長	幅	厚		
1	N－7	P21	掘方	金属製品	釘か	(11.3)	0.9	0.8		6－30
2	N－9	P21	掘方	金属製品	不明	(6.7)	1.1	0.7	木質残存	－

第16図　ピット出土遺物

遺物は、土師器、土師器坏・甕、須恵器、須恵器坏・甕、大戸産長頸瓶、常滑産甕、不明金属製品（第16図－１、２）が出土している。

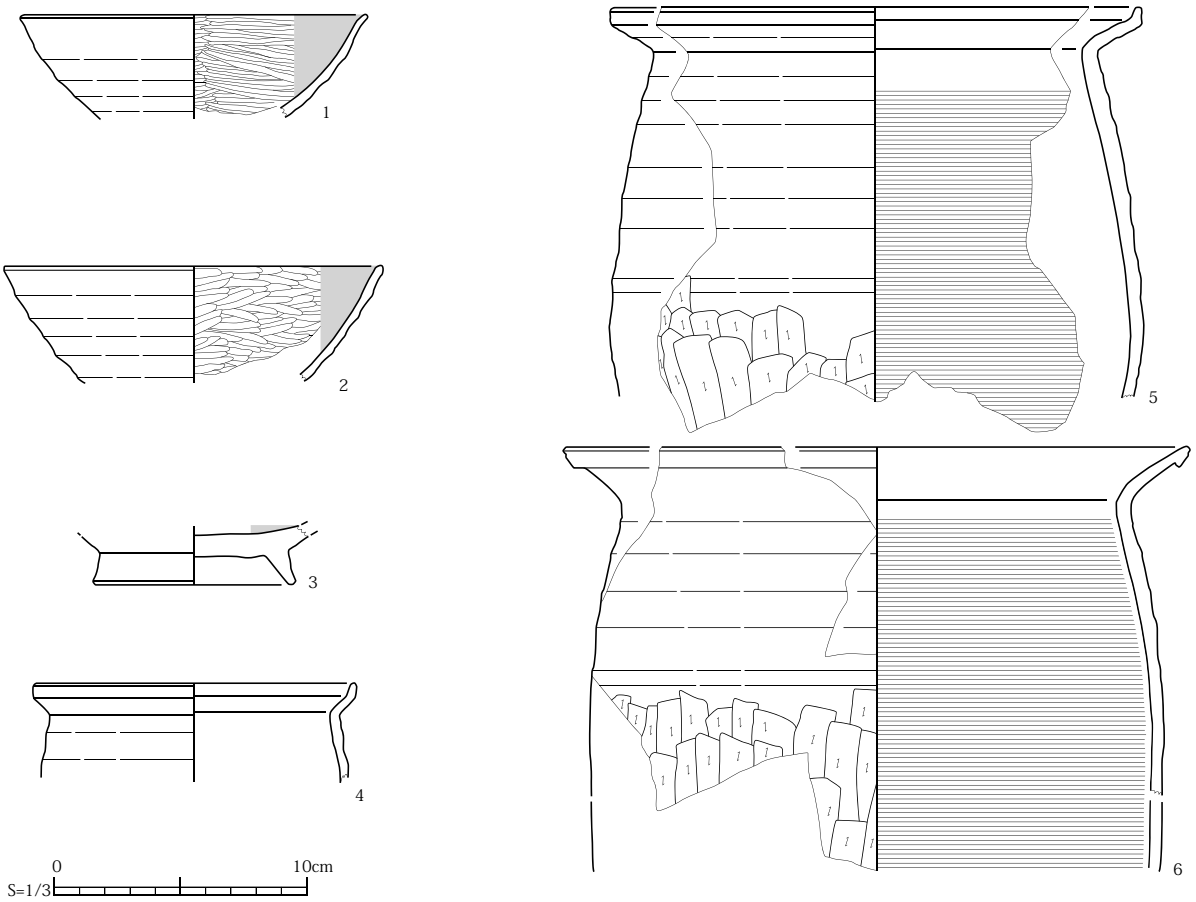
（４）その他の出土遺物

基本層Ⅳ層およびⅣａ層から、土師器坏・甕（第18図－２）、ロクロ土師器坏（第17図－２）・甕、須恵器坏（第18図－11）・大戸産短頸壺（第18図－12）手捏土器（第18図－１）、丸瓦（第19図－７）が出土している。

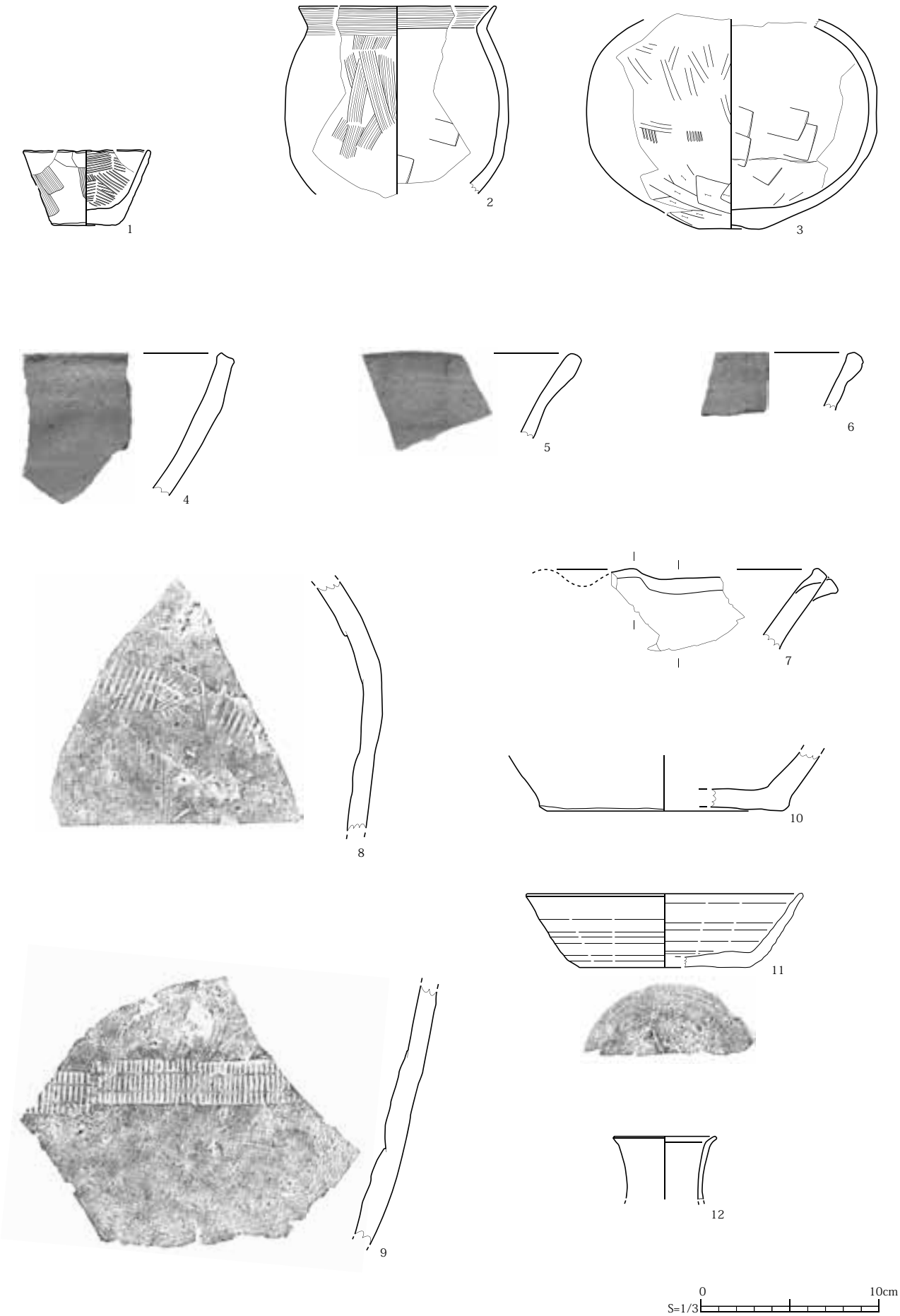
基本層Ⅴ層から、土師器甕・壺（第18図－３）が出土している。

その他基本層、表土、遺構検出面から、土師器坏・甕、ロクロ土師器坏（第17図－１）・高台付坏（第17図－３）・甕（第17図－４～６）、常滑産甕（第18図－８～10）、渥美産甕、産地不明甕、山茶碗系片口鉢（第18図－５、６）、在地産片口鉢（第18図－７）･鉢（第18図－４）、砥石（第19図－１～４）、小刀（第19図－６）、鉄釘（第19図－５）、銭貨が出土している。銭貨は錆化のため判読できないが、３枚が密着した状態で出土している。

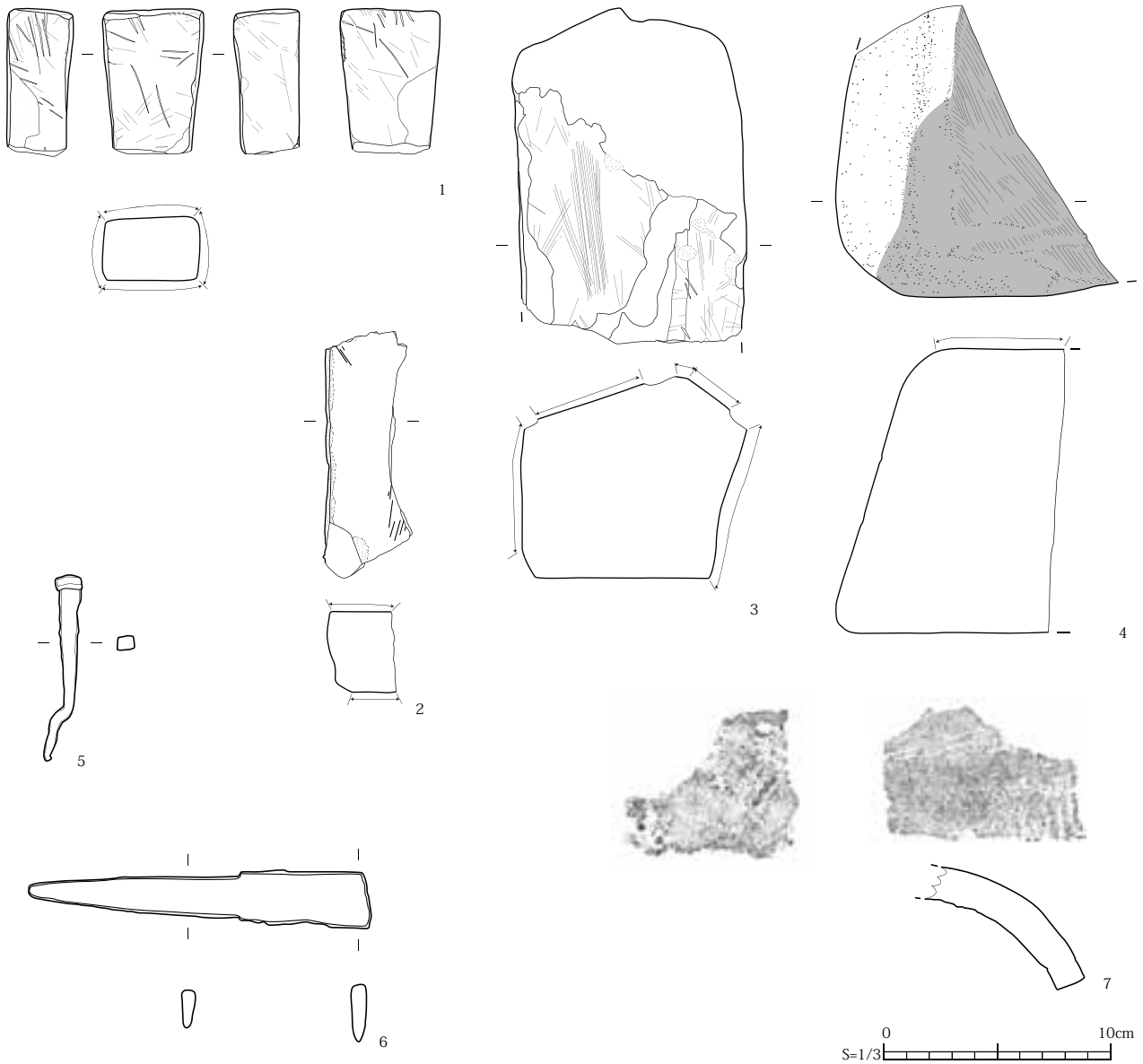
また、ＳＫ６土坑から土師器甕が出土している。



第17図　その他の出土遺物１



第18図　その他の出土遺物２



図中番号	登録番号	出土層位	種別	器種	法量(cm)			特徴・備考	写真図版
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)		
17－1	D－2	遺構検出面	ロクロ土師器	坏	(15.0)	－	(4.6)	外面:ロクロナデ　内面:ヘラミガキ→黒色処理	－
17－2	D－6	Ⅳ	ロクロ土師器	坏	(13.8)	－	(4.4)	外面:ロクロナデ　内面:ヘラミガキ→黒色処理	6－16
17－3	D－1	Ⅱ・Ⅲ	ロクロ土師器	高台付坏	－	(8.0)	(2.4)	外面:ロクロナデ　底面、回転糸切り　内面:ヘラミガキ→黒色処理	6－19
17－4	D－5	遺構検出面	ロクロ土師器	甕	(12.8)	－	(3.9)	外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ	6－20
17－5	D－3	遺構検出面	ロクロ土師器	甕	(21.0)	－	(16.8)	外面:ロクロナデ→ヘラケズリ　内面:ロクロナデ→回転ハケメ	6－17
17－6	D－4	遺構検出面	ロクロ土師器	甕	(24.8)	－	(16.8)	外面:ロクロナデ→ヘラケズリ　内面:ロクロナデ→回転ハケメ	6－18
18－1	C－1	Ⅳa	土製品	手捏土器	(7.2)	3.8	4.2	外面:ユビナデ　ヘラナデ　内面:ハケメ	6－13
18－2	C－2	Ⅳ	土師器	甕	(11.0)	－	(10.5)	外面:ヨコナデ・ヘラナデ　内面:ヨコナデ・ヘラナデ	6－14
18－3	C－3	Ⅴ	土師器	壺	－	3.7	(12.0)	外面:ハケメ・ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面:ヘラナデ	6－15
18－4	I－1	表土	陶器	鉢	－	－	－	在地(白石窯系)　13C後～14C前半	－
18－5	I－2	Ⅱ・Ⅲ	陶器	片口鉢	－	－	－	山茶碗系　13C	－
18－6	I－7	遺構検出面	陶器	片口鉢	－	－	－	山茶碗系　13C	－
18－7	I－6	遺構検出面	陶器	片口鉢	－	－	－	在地(白石窯)　13C後～14C前半	－
18－8	I－8	遺構検出面	陶器	甕	－	－	－	常滑　押印	－
18－9	I－5	Ⅲ	陶器	甕	－	－	－	常滑　押印　13C	－
18－10	I－3	Ⅱ・Ⅲ	陶器	甕	－	(14.0)	(3.1)	常滑	6－27
－	I－4	Ⅱ・Ⅲ	陶器	甕	－	－	－	常滑	6－26
18－11	E－1	Ⅳa	須恵器	坏	(15.5)	(9.4)	4.6	外面:ロクロナデ　底部、回転ヘラ切り　ヘラガキ「一」　内面:ロクロナデ	6－21
18－12	E－2	Ⅳa	須恵器	壺	(5.8)	－	(3.5)	大戸　外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ	6－24
－	J－2	遺構検出面	青磁	碗	－	－	－	龍泉窯系　王縁状口縁　14C後半	6－25
19－1	K－3	遺構検出面	石製品	砥石	(6.4)	4.5	3.0	石材:凝灰岩　砥面4面	7－3
19－3	K－4	遺構検出面	石製品	砥石	(14.7)	10.4	8.8	石材:凝灰岩　砥面5面	7－5
19－2	K－1	Ⅲ	石製品	砥石	(10.9)	(3.9)	3.6	石材:砂岩　砥面2面	7－4
19－4	K－2	Ⅲ	石製品	砥石	(13.0)	(12.8)	12.5	石材:安山岩　砥面2面　被熱による黒変	7－6
19－5	N－2	遺構検出面	金属製品	釘	8.2	1.2	0.9		6－31
19－6	N－1	Ⅱ・Ⅲ	金属製品	小刀	15.1	2.5	0.7	茎部長9.3cm	6－33
19－7	F－1	Ⅳa	瓦	丸瓦	(6.5)	(7.1)	1.6	凹面:布目　凸面:縄目タタキ擦り消し	6－32

第19図　その他の出土遺物3

6　第16次調査

1）基本層序

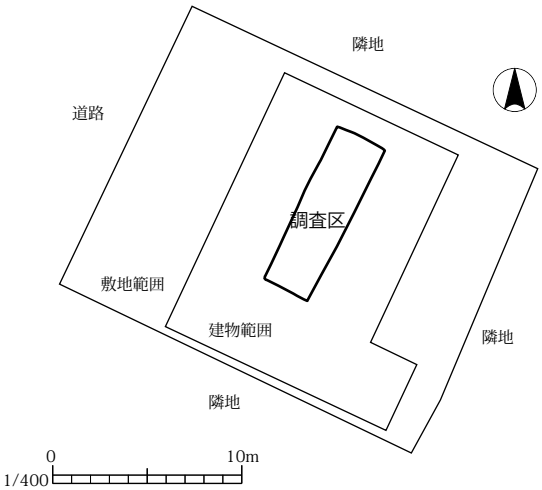
第16次調査では、基本層を６層確認した。遺構掘り込み面はⅢ層上面であるが、Ⅴ層上面で遺構を検出している。

Ⅰ層：にぶい黄褐色（10ＹＲ４／３）の粘土質シルトで、宅地化以前の畑地耕作土である。層厚は50cm程度である。

Ⅱ層：黒褐色（10ＹＲ３／２）の粘土質シルトで、焼土と炭化物を粒状に若干含む。層厚は20～30cm程度である。

Ⅲ層：黒褐色（2.5Ｙ３／２）の粘土質シルトで、にぶい黄褐色（10ＹＲ５／４）の粘土質シルトを粒状に若干含む。層厚は８cm程度で、遺構の掘り込み面である。

Ⅳ層：褐灰色（10ＹＲ４／１）の粘土質シルトで、にぶい黄褐色（10ＹＲ５／４）の粘土質シルトを斑状に含む。層厚は10cm程度である。



第20図　第16次調査　調査区配置図

Ⅴ層：均質なにぶい黄褐色（10ＹＲ５／４）の砂質シルトで、自然堤防を形成する水成堆積層とみられる。今回の調査における遺構検出面である。

Ⅵ層：暗灰黄色（2.5Ｙ５／２）の砂で、自然堤防を形成する水成堆積層とみられる。

2）　発見遺構と出土遺物

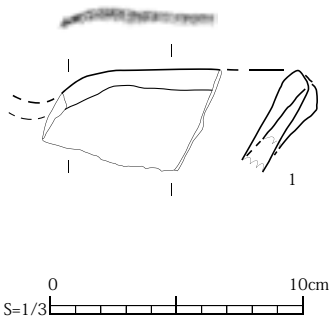
今回の調査では溝跡２条を検出した。遺物は基本層、遺構堆積土から土師器、須恵器、陶器、瓦、銭貨、鉄滓が出土している。なお、今回の調査で検出した溝跡は、いずれも基本層Ⅴ層上面で検出しているが、基本層Ⅲ層上面から掘り込まれていることを、調査区壁面の観察から確認している。

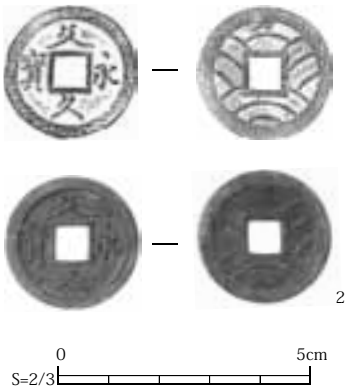
（１）溝跡

ＳＤ１溝跡

調査区東半部に位置する南北方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長は約7.10mで、さらに調査区外南北へ延びる。一部の検出であることから、規模は不明であるが、現状で上端幅0.90m以上、下端幅0.60m以上である。検出面からの深さは20cmほどである。断面形は逆台形を呈するものとみられる。堆積土は３層に細分される。炭化物を含む黒褐色の粘土などで、いずれも自然堆積土である。

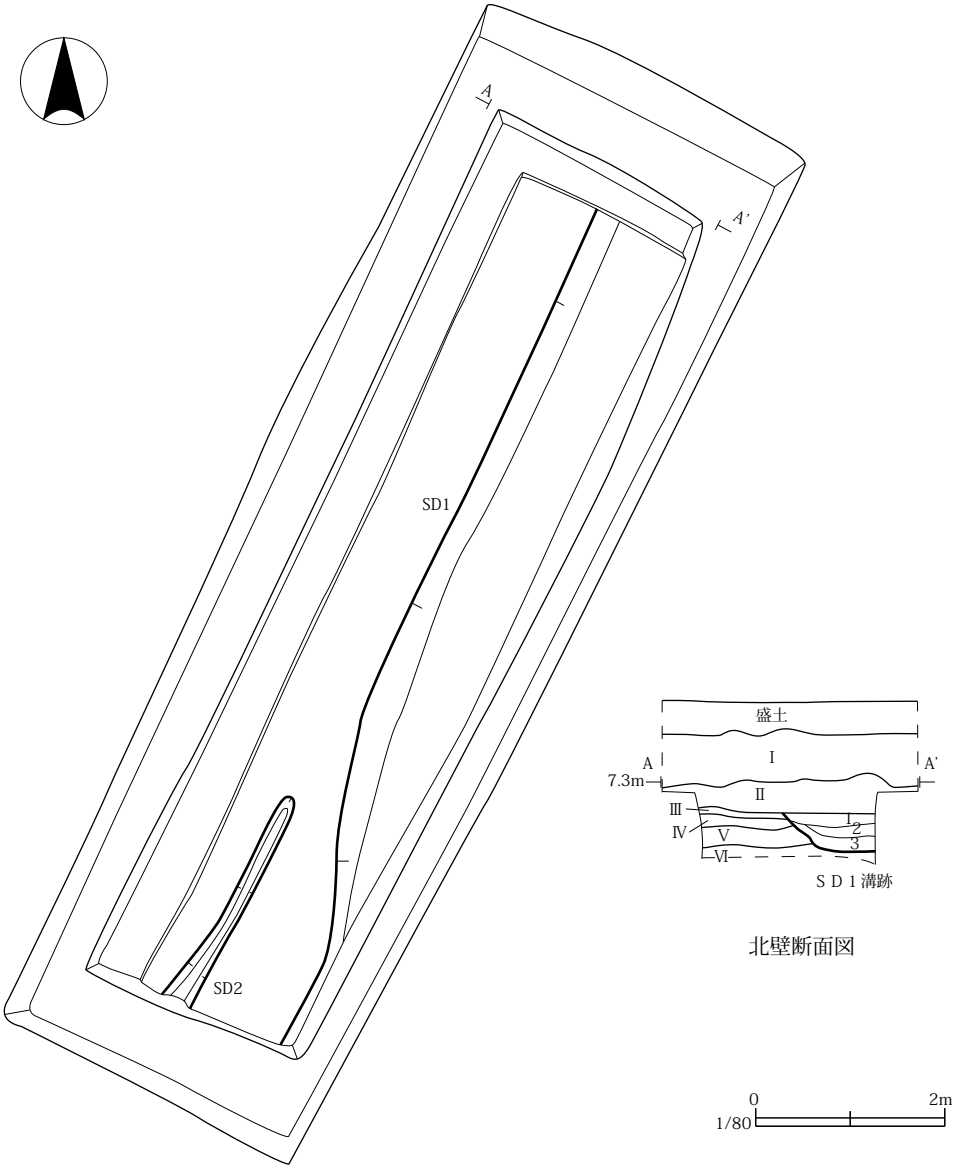
遺物は、土師器甕、須恵器坏・甕、山茶碗系片口鉢（第21図－１）、龍泉窯系青磁碗、平瓦、鉄滓が出土している。





図中番号	登録番号	遺構･層位	種　別	器種	法量(cm)			特徴･備考	写真図版
					器高(径)	口径	底径		
1	Ⅰ－１	SD１	陶器	片口鉢	－	－	－	山茶碗系　　13C ？	－
2	Ｎ－１	Ⅱ層	銅製品	銭貨	3.7	－	－	「文久永宝」　初鋳:文久３(1863)年　重さ:3.2g	－

第21図　第16次調査　出土遺物



遺構･層位		土色･土質	しまり	粘性	混入物等
Ⅰ		10YR４/３にぶい黄褐色シルト	あまりなし	なし	炭化物を粒状にごく少量含む　一部グライ化する
Ⅱ		10YR３/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	あまりなし	焼土粒､炭化物を粒状に若干含む
Ⅲ		2.5Y３/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトを粒状に若干含む
Ⅳ		10YR４/１褐灰色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトを斑状に含む
Ⅴ		10YR５/４にぶい黄褐色砂質シルト	あり	なし	均質
Ⅵ		2.5Y５/２暗灰黄色砂	ややあり	なし	均質
SD１	1	10YR３/２黒褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	炭化物を粒状に少量含む
	2	10YR３/３暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に若干含む
	3	10YR３/１黒褐色粘土	あまりなし	あり	黄褐色の粘土質シルトを小ブロック状に少量含む
SD２		10YR３/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	黄褐色の粘土質シルトをブロック状にやや多く含む

第22図　第16次調査　平面・断面図

ＳＤ２溝跡

調査区南部に位置する南北方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長は約1.90mで、さらに調査区外南へ延びる。規模は上端幅約0.25m、下端幅約0.15mで、深さ５cmほどである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層で、にぶい黄褐色の砂質シルトを含む黒褐色のシルトである。

遺物は出土していない。

(2) その他の出土遺物

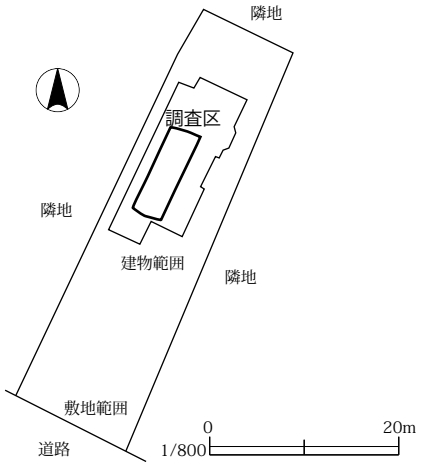
基本層Ⅱ層から銭貨「文久永宝」（第21図－２）が出土している。

7　第17次調査

1）基本層序

今回の調査では、基本層を４層確認した。遺構掘り込み面はⅡ層上面であるが、ⅢおよびⅣ層上面で遺構を検出している。

Ⅰ層：層相から４層に細分される。Ⅰａ層は均質な暗褐色（10ＹＲ３／４）のシルト、Ⅰｂ層は炭化物を粒状に含む暗褐色（10ＹＲ３／３）のシルトで、いずれも調査区全域に分布する畑地耕作土である。Ⅰｃ層は炭化物粒をごく少量含む黒褐色（10ＹＲ３／２）の粘土質シルト、Ⅰｄ層はしまりのあまりない黒褐色（10ＹＲ３／１）の粘土質シルトで、調査区南半部で確認された。盛土による整地事業後の窪地に堆積した自然堆積土の可能性がある。



第23図　第17次調査 調査区配置図

Ⅱ層：黒褐色（10ＹＲ３／２）の粘土質シルトで、にぶい黄褐色の粘土質シルトの小ブロックと炭化物を含む。層厚は20cm程度で、遺構の掘り込み面である。

Ⅲ層：にぶい黄褐色（10ＹＲ４／３）の粘土質シルトで、暗褐色（10ＹＲ３／３）のシルトを斑状に含む。層厚は15～30cmで、今回の調査における遺構検出面である。

Ⅳ層：均質なにぶい黄褐色（10ＹＲ５／４）の粘土である。調査区南半部では、本層上面で遺構検出を行っている。

2）　発見遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構は、整地層、井戸跡１基、土坑12基、焼土遺構２基、ピット12基である。なお、調査区壁面に接する遺構には、調査区壁面崩落の可能性や湧水を考慮し、底面を検出していないものがある。このことから、土坑および性格不明遺構としたものには井戸跡が含まれている可能性がある。

遺物は、基本層、遺構堆積土から土師器、須恵器、陶器、磁器、金属製品が出土している。

（１）整地層

ＳＸ16整地層

調査区西壁南半部～南壁で確認した盛土による整地層である。ＳＫ10土坑、ＳＸ９性格不明遺構を覆う。層厚は最大40cmほどである。盛土は３層に細分され、炭化物や黄褐色の粘土を含む黒褐色のシルトなどで、しまりがある。

遺物は出土していない。

（２）井戸跡

ＳＥ８井戸跡

調査区中央部に位置する。他の遺構との重複はない。撹乱に大きく壊されているが、規模は東西0.45m以上、南北0.60m以上で、深さは30cm以上である。底面は未検出であるが、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は４層を確認した。炭化物を含むにぶい黄褐色や暗褐色の粘土質シルトなどで、いずれも自然堆積土とみられる。

遺物は出土していない。

（３）土坑

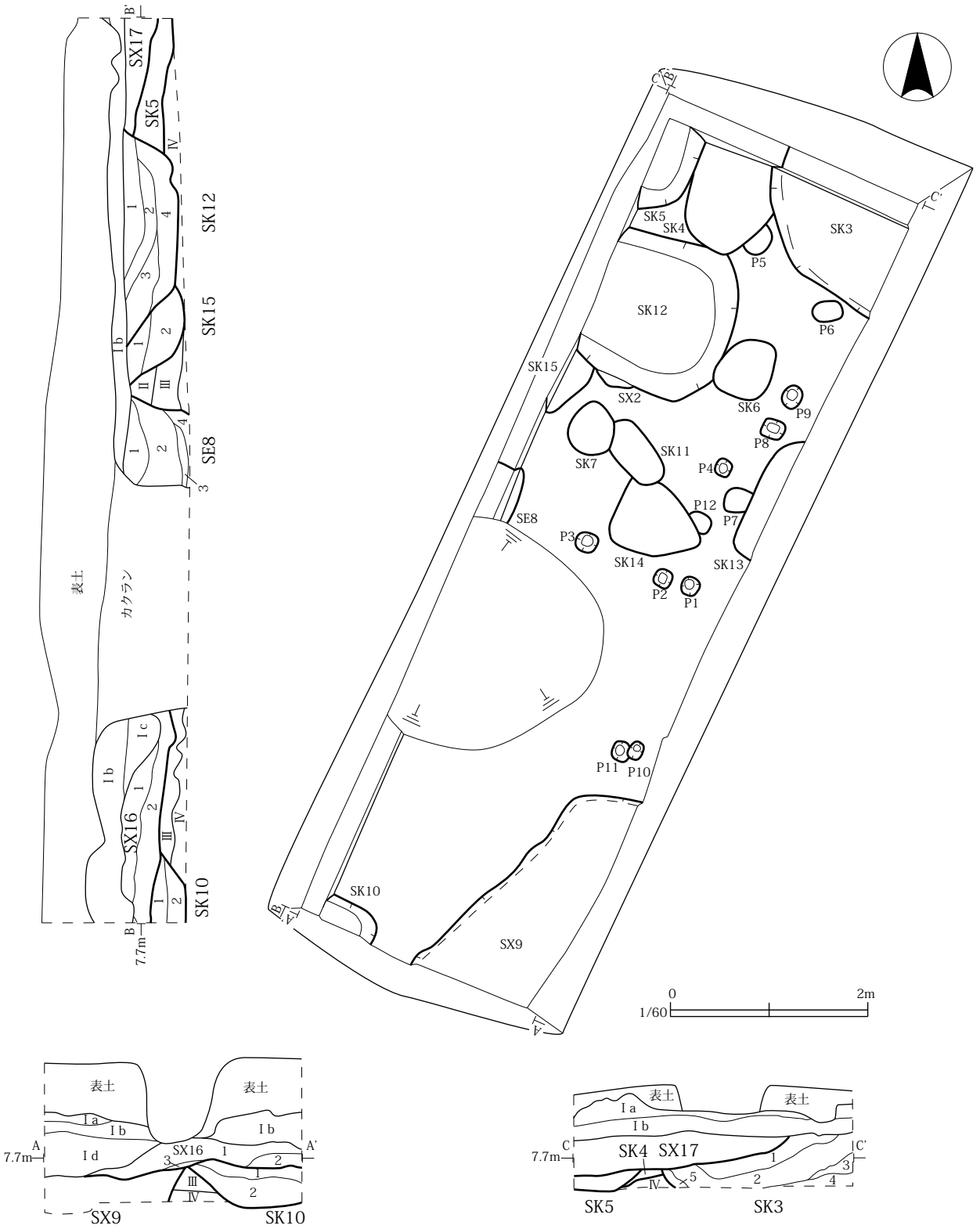
ＳＫ３土坑

調査区北部に位置する。ＳＫ４土坑と重複し、これよりも新しい。規模は東西1.50m以上、南北1.35m以上、深さは20cm以上である。底面を検出していないため、断面形は不明である。堆積土は５層を確認した。炭化物を含む黒褐色の粘土質シルトなどで、いずれも自然堆積土とみられる。

遺物は、須恵器甕、常滑産甕（第27図－１）、山茶碗系片口鉢（第27図－２）が出土している。

ＳＫ４土坑

調査区北部に位置する。ＳＫ３・５・12、Ｐ５土坑と重複し、ＳＫ３・５土坑よりも古く、ＳＫ12土坑、Ｐ５より



遺構・層位	土色・土質	しまり	粘性	混入物等
Ⅰa	10YR３／４暗褐色シルト	あまりなし	あまりなし	均質　旧畑地耕作土
Ⅰb	10YR３／３暗褐色シルト	あまりなし	あまりなし	炭化物をごく少量含む　旧畑地耕作土
Ⅰc	10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状にごく少量含む
Ⅰd	10YR３／１黒褐色粘土質シルト	あまりなし	あり	炭化物、黄褐色粘土を粒状に若干含む
Ⅱ	10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	Ⅲ層ブロック、炭化物を小ブロック状に含む
Ⅲ	10YR４／３にぶい黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	暗褐色（10YR３／３）のシルトを斑状に含み、炭化物を粒状に若干含む
Ⅳ	10YR５／４にぶい黄褐色粘土	あり	あり	均質

第24図　第17次調査　遺構配置図・断面図

遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
SK３	１	10YR３／３暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に少量含む	
	２	10YR３／４暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に含む	
	３	2.5Y３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトを粒状に、炭化物を粒状に少量含む	
	４	10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に少量含む	
	５	10YR３／２黒褐色粘土	あまりなし	あり	Ⅳ層を粒状に少量含む	
SK４		10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	あり	にぶい黄褐色の粘土質シルトを粒状に、炭化物を粒状に若干含む	
SK５		2.5Y３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトを粒状にをごく少量含む	
SE８	１	2.5Y３／３暗オリーブ褐色シルト	あまりなし	あまりなし	均質	
	２	10YR３／３暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を互層状に含む	
	３	10YR４／３にぶい黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に少量含む	
	４	2.5Y３／２黒褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	にぶい黄褐色の粘土、粘土質シルトを小ブロック状に含む	
SX９		2.5Y３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	Ⅳ層をブロック状に多く含む	
SK10	１	10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土、粘土質シルトを粒状に少量含む	
	２	2.5Y３／１黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土、粘土質シルトを粒状に若干含む	
SK11		2.5Y３／１黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトを粒状に若干含み、炭化物を粒状にごく少量含む	自然堆積か
SK12	１	10YR３／４暗褐色シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に、にぶい黄褐色の粘土、粘土質シルトを小ブロック状に少量含む	
	２	10YR３／３暗褐色シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に、にぶい黄褐色の粘土、粘土質シルトを小ブロック状に少量含む	
	３	10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に、にぶい黄褐色の粘土、粘土質シルトを粒状に若干含む	
	４	2.5Y２／２黒褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	炭化物を多く含み、にぶい黄褐色の粘土、粘土質シルトを小ブロック状に少量含む	
SK13		10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトを粒状に、炭化物を粒状に若干含む	自然堆積か
SK14		10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に多く含む	
SK15	１	10YR３／３暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に、にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に少量含む	
	２	10YR２／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を多く含む	
SX16	１	10YR３／１黒褐色粘土質シルト	あり	ややあり	黄褐色の粘土を互層状に含む	
	２	10YR３／４暗褐色粘土質シルト	あり	ややあり	黄褐色の粘土をブロック状に含む	
	３	10YR３／１黒褐色粘土質シルト	あり	ややあり	黄褐色の粘土を小ブロック状に若干含む	
SX17		10YR３／３暗褐色シルト	あり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状にやや多く含む	

第１表　第17次調査　土層註記表

も新しい。一部の検出であるが、楕円形を呈するものとみられる。規模は東西0.85m、南北1.35m以上で、深さは５cm以上である。断面形は皿状を呈する。堆積土は単層で、炭化物、にぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

ＳＫ５土坑

調査区北部に位置する。ＳＫ４・12土坑と重複し、ＳＫ12土坑よりも古く、ＳＫ４土坑よりも新しい。規模は東西0.60m以上、南北1.25m以上で、深さは10cmほどである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層で、にぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

ＳＫ６土坑

調査区北部に位置する。ＳＫ12土坑と重複し、これよりも新しい。平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸0.65m、短軸0.55mで、深さは20cmほどである。断面形はＵ字状を呈する。堆積土は２層に細分され、炭化物やにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色の粘土質シルトである。

遺物は、土師器甕、常滑産甕（第27図－３）が出土している。

ＳＫ７土坑

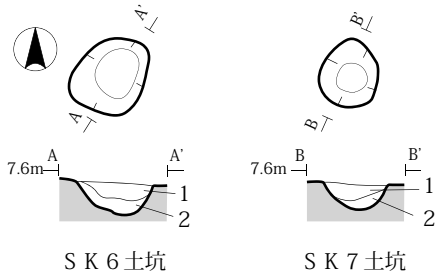
調査区中央部に位置する。ＳＫ11土坑と重複し、これよりも新しい。平面形は円形を呈する。規模は径0.55mで、深さは20cmほどである。断面形はＵ字状を呈する。堆積土は２層に細分され、炭化物やにぶい黄褐色の粘土などを含む黒褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

ＳＫ10土坑

調査区南部に位置する。他の遺構との重複はない。一部の検出であるが、隅丸方形を基調としたものとみられる。規模は東西0.80m以上、南北1.60m以上で、深さは５cmほどである。断面形は皿状を呈する。堆積土は２層に細分され、炭化物やにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色の粘土質シルトなどである。

遺物は出土していない。



ＳＫ６土坑　　ＳＫ７土坑

遺構･層位		土色･土質	しまり	粘性	混入物等
SK 6	1	10YR３/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトを粒状に少量含む
	2	2.5Y３/１黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトを粒状にごく少量､炭化物を粒状に少量含む
SK 7	1	2.5Y３/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に少量含む
	2	2.5Y３/１黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトを小ブロック状に若干含む

第25図　土坑　平面・断面図

ＳＫ12土坑

調査区北部に位置する。ＳＫ４・５・６・15土坑、ＳＸ１・２焼土遺構と重複し、ＳＫ４・６土坑、ＳＸ１・２焼土遺構よりも古く、ＳＫ５・15土坑よりも新しい。一部の検出であるが、平面形は隅丸方形を基調としたものとみられる。規模は東西1.70m以上、南北1.60mで、深さは10cmほどである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は４層に細分される。炭化物やにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色の粘土質シルトなどで、いずれも自然堆積土とみられる。

遺物は、常滑産甕が出土している。

ＳＫ13土坑

調査区中央部に位置する。Ｐ７と重複し、これよりも新しい。一部の検出であることから、平面形は不明である。規模は東西0.35m以上、南北1.35mで、深さは20cm以上である。底面が未検出であることから、断面形は不明である。確認した堆積土は単層で、炭化物やにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

ＳＫ15土坑

調査区中央部に位置する。ＳＫ12土坑と重複し、これよりも古い。一部の検出であることから、平面形は不明である。規模は東西0.70m、南北0.55m以上で、深さは10cmほどである。断面形はＵ字状を呈する。堆積土は２層に細分され、炭化物、にぶい黄褐色の粘土を含む暗褐色や黒褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

（４）焼土遺構

ＳＸ１焼土遺構

調査区北部に位置する。ＳＫ12土坑と重複し、これよりも新しい。径15cmほどの浅い窪みにしまりのない焼土が堆積し、その周辺が赤変している。

遺物は出土していない。

ＳＸ２焼土遺構

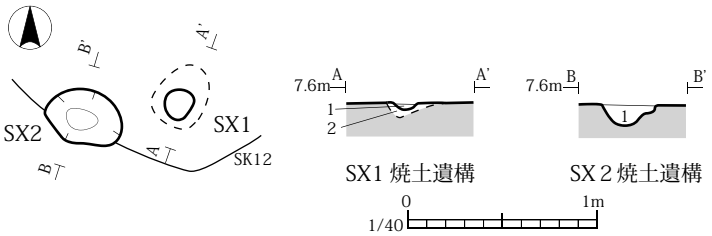
調査区北部に位置する。ＳＫ12土坑と重複し、これよりも新しい。長軸28cm、短軸13cmほどの楕円形を呈する窪みにしまりのない焼土と灰を含む暗オリーブ褐色の粘土が堆積し、その周辺が赤変している。

遺物は出土していない。

（５）性格不明遺構

ＳＸ９性格不明遺構

調査区南部に位置する。他の遺構との重複はないが、ＳＸ16整地層に覆われる。一部の検出であることから、平面形は不明である。規模は東西1.35m以上、南北2.45m以上で、深さは20cm以上である。底面が未検出であることから、



遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
SX１	1	5Y4/4にぶい赤褐色	なし	なし		焼土層
	2	5Y３/２暗赤褐色				被熱赤変範囲
SX２	1	2.5Y３/３暗オリーブ褐色粘土	あまりなし	ややあり	灰を小ブロック状に含む	

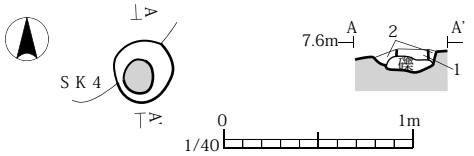
第26図　焼土遺構　平面・断面図

断面形は不明である。確認した堆積土は単層である。にぶい黄褐色の粘土をブロック状に含む黒褐色の粘土質シルトで、人為的埋土とみられる。

遺物は、須恵器甕、常滑産甕、渥美産甕、産地不明甕、瀬戸産とみられる壺か（写真図版７－７）、不明金属製品が出土している。

（６）ピット

主に調査区北～中央部に分布し、12基を検出した。平面形は円形もしくは楕円形を呈する。堆積土は大半が単層で、炭化物やにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色の粘土質シルトである。今回の調査で検出したピット群のうち、Ｐ５・６の底面から礫が出土し、状況から柱材の沈下を防ぐための礎板石である可能性が高い。



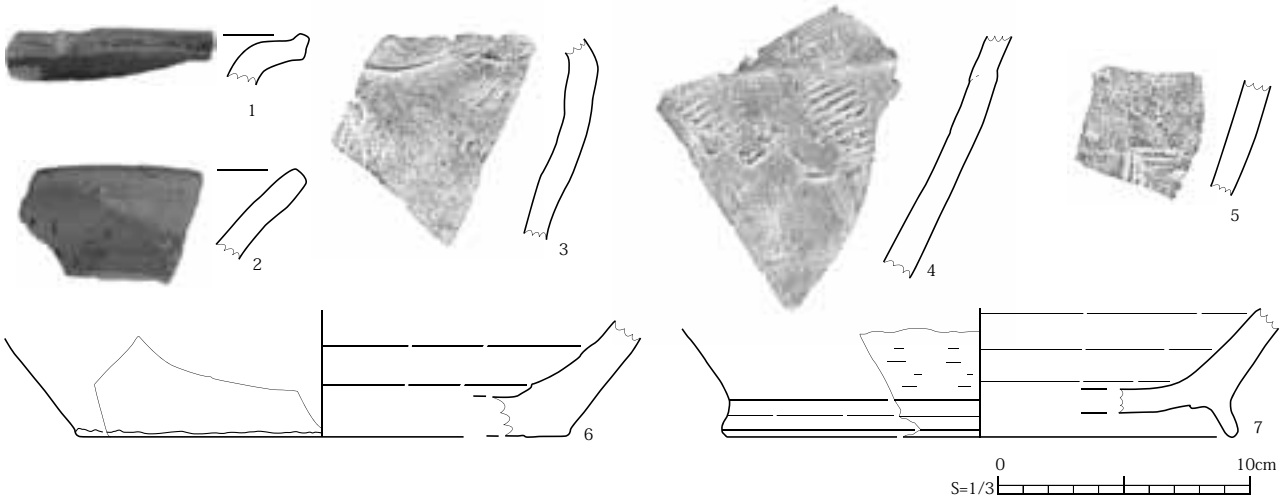
遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等
P５	1	10YR３/２黒褐色粘土質シルト	あまりなし	あり	炭化物、地山を粒状にごく少量含む
	2	2.5Y３/２黒褐色粘土質シルト	あり	ややあり	地山を小ブロック状にやや多く含む

第27図　Ｐ５断面図

遺物はＰ４から常滑産甕、Ｐ５から土師器甕が出土している。

（７）その他の出土遺物

遺構検出面から、土師器、土師器甕、須恵器、常滑産甕（第27図－５、６　写真図版７－10）、渥美産壺（第27図－４）、山茶碗系片口鉢（第27図－７）、産地不明白磁碗（写真図版７－15）、龍泉窯系青磁碗が出土している。また、ＳＫ14土坑から、龍泉窯系青磁碗（写真図版７－14）が出土している。



図中番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴・備考	写真図版
1	I－９	SK３	陶器	甕	－	(19.6)	(4.6)	常滑　13C初頭	－
2	I－13	SK３	陶器	片口鉢	－	－	－	山茶碗系　13C後半～14C前半	－
3	I－10	SK６	陶器	甕	－	－	－	常滑	－
－	I－14	SX９	陶器	壺か	－	－	－	瀬戸	７－７
4	I－２	遺構検出面	陶器	甕	－	－	－	渥美か　押印　12C	７－９
5	I－３	遺構検出面	陶器	甕	－	－	－	常滑　押印	７－11
6	I－１	遺構検出面	陶器	甕	－	(19.6)	(4.6)	常滑	７－８
－	I－５	遺構検出面	陶器	甕	－	－	－	常滑	７－10
－	I－６	遺構検出面	陶器	甕	－	－	－	産地不明	７－12
7	I－12	遺構検出面	陶器	片口鉢	－	(20.4)	(5.1)	山茶碗系　13C後半～14C前半	７－13
－	J－３	SK14	青磁	碗	－	－	－	龍泉窯系　内面に画花文	７－14
－	J－１	遺構検出面	白磁	碗	－	－	－	口禿　13C～14C	７－15

第28図　第17次調査出土遺物

8　第18次調査

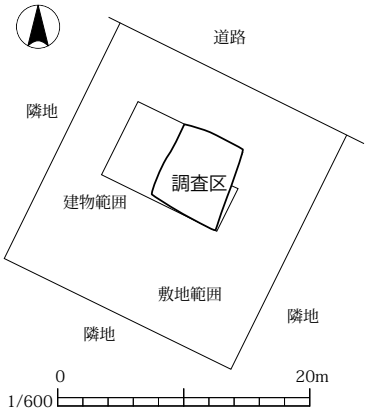
1）基本層序

第18次調査では、基本層を３層確認した。遺構掘り込み面はⅡａ層上面であるが、Ⅲ層上面で遺構を検出している。

Ⅰ層：にぶい黄褐色（10ＹＲ４／３）を呈する均質なシルトで、宅地化以前の畑地耕作土である。層厚は20cm程度である。

Ⅱ層：黒褐色の粘土質シルトで、層相から２層に細分される。Ⅱａ層は炭化物を粒状、ブロック状に若干含み、Ⅱｂ層は炭化物を粒状に少量、黄褐色の砂質シルトをブロック状に少量含む。層厚は50～60cmである。Ⅱａ層上面が遺構掘り込み面であり、第14次調査のⅢ層に対応する。

Ⅲ層：にぶい黄褐色（10ＹＲ５／４）を呈する均質な砂質シルトである。今回の調査における遺構検出面である。第14次調査のⅣ層に対応する。



第29図　第18次調査　調査区配置図

2）発見遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構には、溝跡１条、井戸跡２基、土坑２基がある。なお、調査区壁面に接する遺構には、調査区壁面崩落の可能性や湧水を考慮し、底面を検出していないものがある。このことから、土坑としたものには井戸跡が含まれている可能性がある。

遺物は、基本層、遺構検出面、遺構堆積土から土師器、ロクロ土師器、須恵器、陶器、土製品、瓦が出土している。

（１）溝跡

ＳＤ１溝跡

調査区北半部で検出した東西方向の溝跡である。ＳＥ２井戸跡、ＳＫ３土坑と重複し、いずれよりも新しい。調査区壁面の観察から、２時期の変遷を確認した（Ａ→Ｂ期）。検出長は約3.90mである。

遺物は、ロクロ土師器甕、須恵器坏・甕（第31図－１、２）、常滑産甕（写真図版７－21）、在地産鉢（写真図版７－22）、古瀬戸瓶類（写真図版７－26）、平瓦（第31図－３）、転用砥（第31図－４）が出土している。

ＳＤ１（Ａ）溝跡

規模は、上端幅4.40m以上、深さ1.40m以上である。断面形は不明であるが、検出した溝跡南壁は比較的緩やかに立ち上がる。堆積土は10層を確認した。炭化物を含む黒褐色の粘土質シルトや比較的均質な灰黄褐色の砂質シルトなどで、いずれも自然堆積土である。

ＳＤ１（Ｂ）溝跡

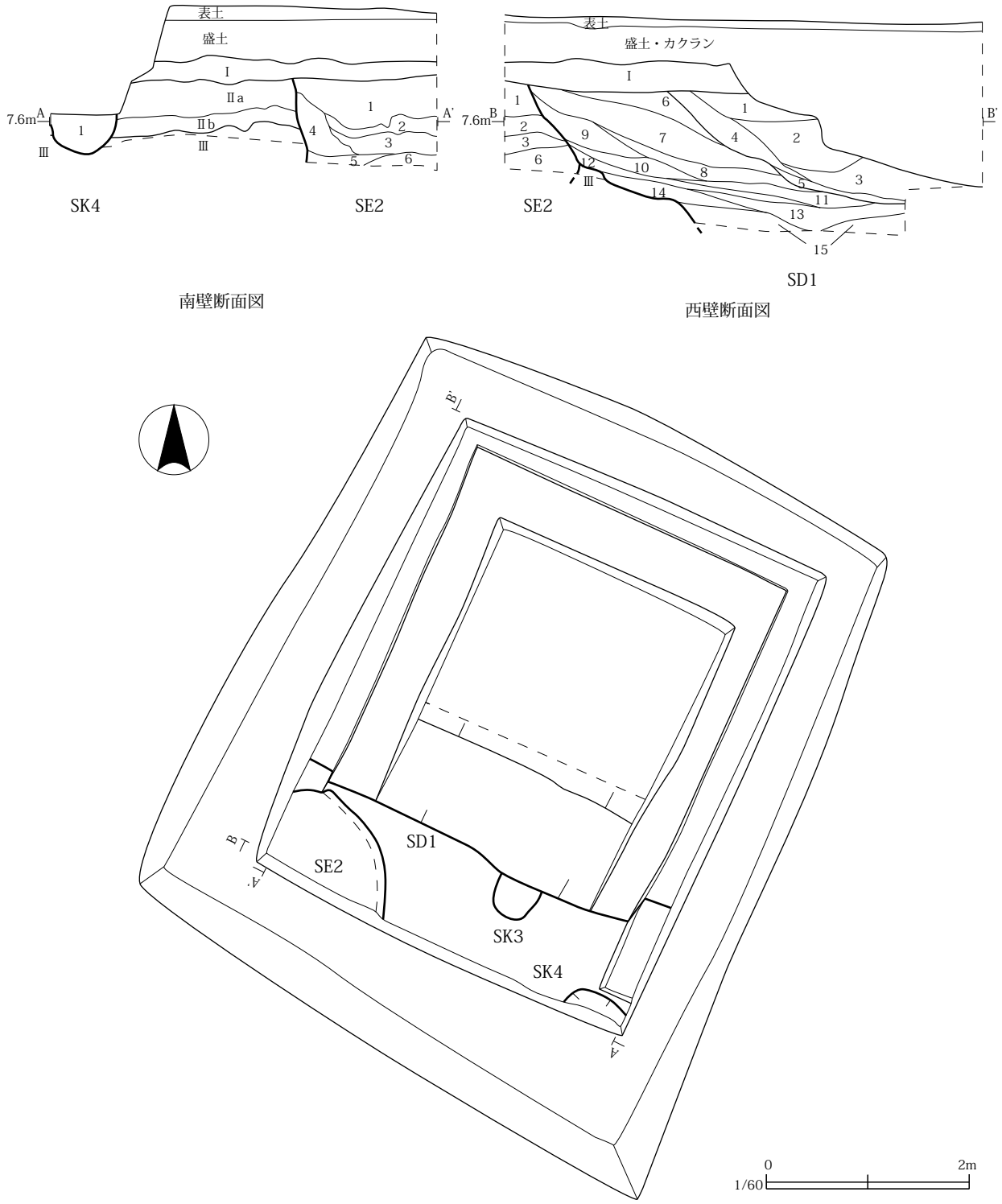
規模は、上端幅3.10m以上、深さ1.10mである。断面形は不明であるが、検出した溝跡南壁は比較的緩やかに立ち上がる。堆積土は５層を確認した。細砂やにぶい黄褐色の砂質シルトを含む黒褐色の粘土質シルトなどで、いずれも自然堆積土である。

（２）井戸跡

ＳＥ２井戸跡

調査区南西部に位置する。ＳＤ１溝跡と重複し、これよりも古い。一部の検出であることから平面形、規模は不明で、東西1.30m以上、南北0.75m以上の円形を基調としたものとみられる。調査区南壁面で確認した深さは80cm以上である。底面は未検出であるが、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は６層を確認した。炭化物を含むにぶい黄褐色、暗褐色の粘土質シルトで、いずれも自然堆積土とみられる。

遺物は、土師器甕、須恵器坏、常滑産甕（写真図版７－24、25）が出土している。



遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
Ⅰ		10YR 4／3 にぶい黄褐色シルト	なし	あまりなし	均質	宅地化前の畑地耕作土
Ⅱa		10YR 3／2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状、小ブロック状に若干含む	遺構掘り込み面　第14次Ⅲ層対応
Ⅱb		10YR 3／3 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に少量、にぶい黄褐色の砂質シルトをブロック状に少量、含む	
Ⅲ		10YR 5／4 にぶい黄褐色砂質シルト	ややあり	あまりなし	均質	第14次Ⅳ層対応
SE 2	1	10YR 3／3 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を小ブロック状に若干含む	自然堆積土か
	2	10YR 4／2 灰黄褐色粘土質シルト	あり	ややあり	にぶい黄褐色の砂質シルトをブロック状に多量、炭化物をブロック状に少量、含む	
	3	10YR 3／2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物、にぶい黄褐色の砂質シルトを小ブロック状に少量、含む	
	4	10YR 3／3 暗褐色粘土質シルト	あり	ややあり	炭化物を小ブロック状に、にぶい黄褐色の砂質シルトを小ブロック状に若干、含む	
	5	10YR 3／1 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物をブロック状にやや多く含む	
	6	10YR 3／4 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の砂質シルト、炭化物を粒状、小ブロック状に少量含む	
SK 4		10YR 3／2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物をブロック状に、にぶい黄褐色の砂質シルトを粒状、小ブロック状に含む	

第30図　第18次調査　平面・断面図

遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
SD１	1	10YR４/４褐色シルト	あまりなし	あまりなし	比較的均質　炭化物を粒状にごく少量含む	SD１(B)
	2	2.5Y４/３オリーブ褐色シルト	あまりなし	あまりなし	にぶい黄褐色の砂質シルトをブロック状に少量含む	
	3	2.5Y３/３オリーブ褐色粘土質シルト	ややあり	あり	細砂を均質に含む	
	4	10YR３/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	細砂塊をブロック状に含む	
	5	10YR４/１褐灰色粘土	あまりなし	あり	黒褐色(2.5Y３/２)の粘土質シルトをブロック状に若干含む	
	6	2.5Y４/２暗灰黄色シルト	あまりなし	あまりなし	細砂を均質に含み、にぶい黄褐色(10YR５/３)の砂質シルトをブロック状にごく少量含む	SD１(A)
	7	10YR３/３暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に若干含む	
	8	10YR４/２灰黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の砂質シルトをブロック状にやや多く含む	
	9	2.5Y３/３暗オリーブ褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物、焼土を粒状にごく少量含む	
	10	2.5Y３/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物、にぶい黄褐色の砂質シルトを粒状に含む	
	11	10YR５/２灰黄褐色砂質シルト	ややあり	あまりなし	均質	
	12	10YR３/１黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に若干含む	
	13	2.5Y３/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の砂質シルトを小ブロック状、ブロック状に少量含む	
	14	10YR５/２灰黄褐色砂質シルト	ややあり	あまりなし	黒褐色(10YR３/２)の粘土を小ブロック状に少量含む	
	15	10YR３/２黒褐色粘土	あまりなし	あり	細砂を均質に含む	

第２表　第18次調査　土層註記表

ＳＥ５井戸跡

調査区中央部に位置する。ＳＤ１溝跡と重複し、これよりも古い。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.30ｍ、短軸約1.00ｍで、深さ50cm以上である。底面は未検出であるが、断面形は円筒状を呈するものとみられる。確認した堆積土は単層である。にぶい黄褐色の砂質シルトをブロック状に含む黒褐色の粘土で、人為的埋め土とみられる。

遺物は、土師器坏・甕、ロクロ土師器甕、常滑産甕（写真図版７－27、29、30）、在地産甕、羽口が出土している。

（３）土坑

ＳＫ３土坑

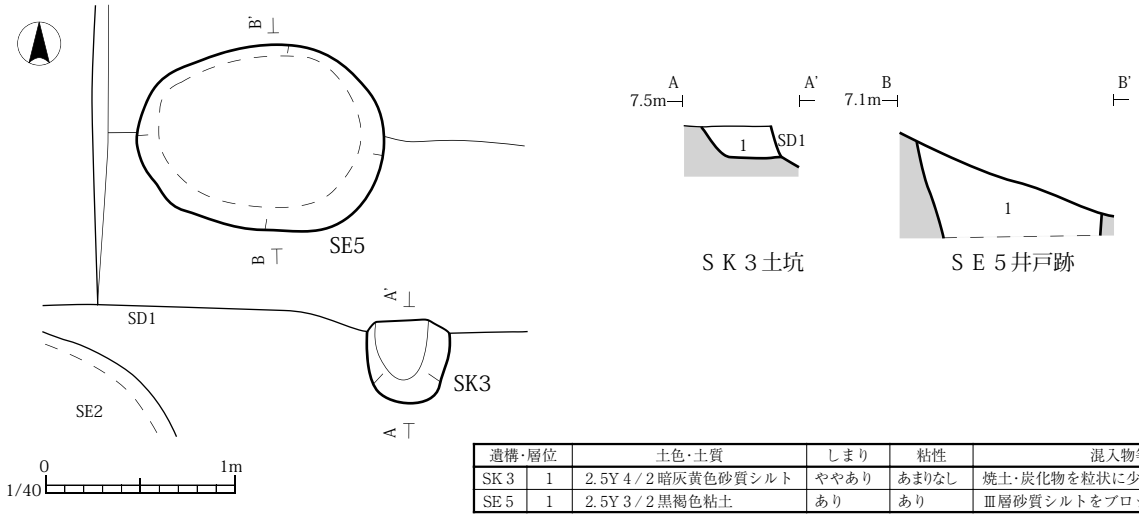
調査区南部に位置する。ＳＤ１溝跡と重複し、これよりも古い。ＳＤ１溝跡に壊されているが、平面形は楕円形を基調としたものとみられる。規模は、長軸0.45ｍ以上、短軸約0.45ｍである。深さは15cmほどである。断面形は逆台形を呈するものとみられる。堆積土は単層で、焼土と炭化物を含む暗灰黄色の砂質シルトである。

遺物は、土師器甕、ロクロ土師器甕（第31図－５）、須恵器長頸瓶が出土している。

ＳＫ４土坑

調査区南東部に位置する。他の遺構との重複はない。一部の検出であることから、平面形、規模は不明であるが、東西0.60cm以上、南北0.15cm以上である。調査区南壁で確認した深さは35cm以上である。断面形はＵ字状を呈する。確認した堆積土は１層で、炭化物とにぶい黄褐色の砂質シルトを含む黒褐色の粘土質シルトである。

遺物はロクロ土師器甕（第31図－６）が出土している。

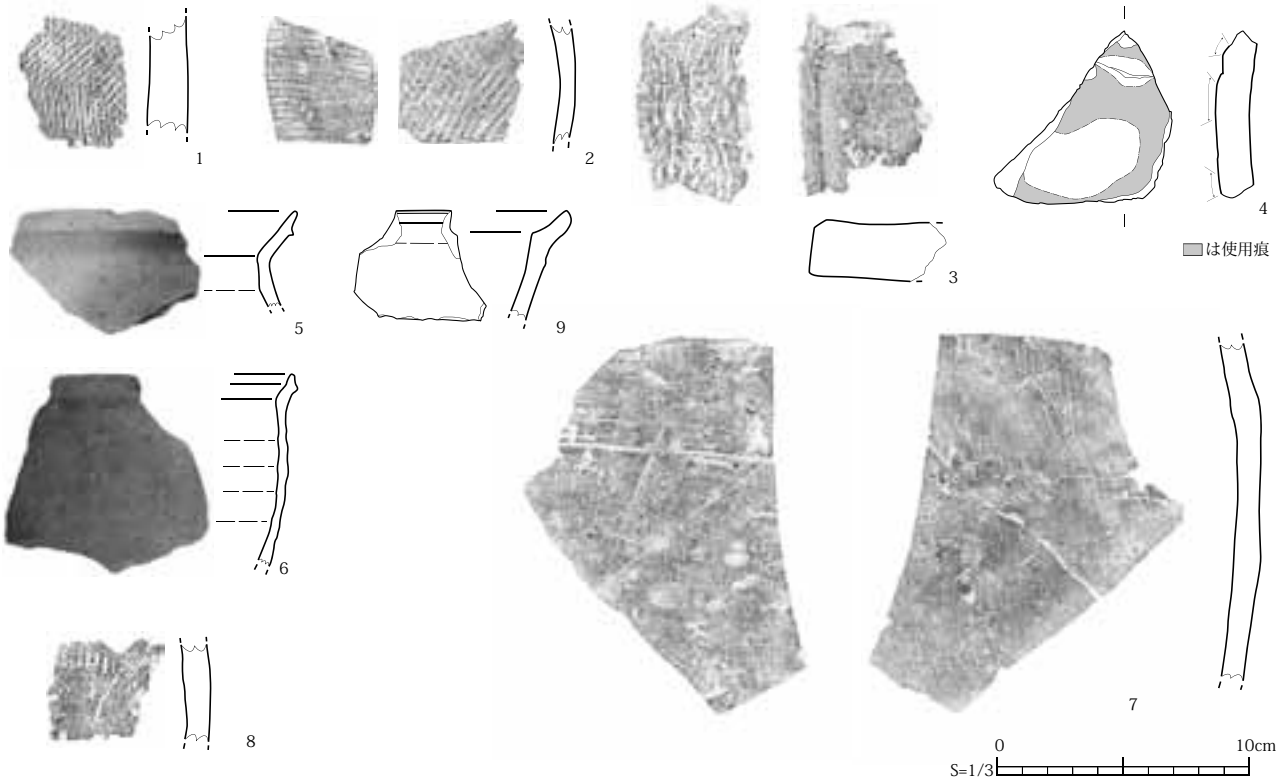


遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等
SK３	1	2.5Y４/２暗灰黄色砂質シルト	ややあり	あまりなし	焼土・炭化物を粒状に少量含む
SE５	1	2.5Y３/２黒褐色粘土	あり	あり	Ⅲ層砂質シルトをブロック状に多く含む

第31図　ＳＫ３土坑・ＳＥ５井戸跡　平面・断面図

（４）遺構外出土遺物

基本層、遺構検出面などから、大戸産長頸瓶（写真図版７－19）、常滑産甕（第31図－７、８）、在地産甕、唐津産折縁皿（第31図－９）が出土している。



図中番号	登録番号	遺構・出土層位		種別	器種	法量(cm)			特徴・備考	写真図版
						口径(長)	底径(幅)	器高(厚)		
1	E－1	SD１	堆	須恵器	甕	－	－	－	外面:平行タタキ	７－16
2	E－4	SD１	堆	須恵器	甕	－	－	－	外面:平行タタキ　内面:平行オサエ	７－18
3	G－1	SD１	堆	瓦	平瓦	－	－	2.2	凹面:布目　凸面:縄目タタキ	７－20
－	I－5	SD１	堆	陶器	鉢	－	－	－	在地　13C後～14C前	７－22
4	I－3	SD１	堆	陶器	転用砥	7.9	4.8	1.3	常滑　胴部片を転用	７－23
	I－6	SD１	堆	陶器	甕	－	－	－	常滑	７－21
－	I－7	SD１	堆	陶器	瓶類	－	－	－	古瀬戸　灰釉　13C～14C	７－26
－	I－8	SE２	堆	陶器	甕	－	－	－	常滑　13Cか	７－24
－	I－9	SE２	堆	陶器	甕	－	－	－	常滑	７－25
5	D－1	SK３	検出面	ロクロ土師器	甕	(16.8)	－	(3.8)	外面:ロクロナデ　内面:ヘラミガキ→黒色処理	－
－	E－2	SK３	検出面	須恵器	壺	－	－	－	外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ	７－17
6	D－2	SK４	堆	ロクロ土師器	甕	(11.0)	－	(7.6)	外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ	－
－	I－10	SE５	堆	陶器	甕	－	－	－	常滑	７－27
－	I－11	SE５	堆	陶器	甕	－	－	－	常滑	７－29
－	I－12	SE５	堆	陶器	甕	－	－	－	常滑	７－30
7	I－1	遺構検出面		陶器	甕	－	－	－	常滑	７－28
8	I－2	遺構検出面		陶器	甕	－	－	－	常滑	－
9	I－13	東側溝		陶器	折縁皿	－	－	－	唐津　17C	７－31
－	E－3	不明		須恵器	長頸瓶	－	－	－	大戸	７－19

第32図　第18次調査　出土遺物

9　まとめ

今年度は、第14次から第18次まで、５次にわたる本発掘調査を行った。いずれの調査区も、洞ノ口遺跡南西部に位置する。

1）　第14次調査では、溝２条、井戸跡５基、土坑７基、ピット４基を検出した。

遺物は、陶器を主体に、土師器、須恵器、かわらけ、瓦質土器、陶器、磁器、土製品、金属製品、鉄滓が出土した。ほとんどが破片資料で、遺構廃絶後の流入、もしくは遺棄・廃棄されたものとみられる。そのなかで、常滑産甕、白石窯産を含む在地産甕・壺、龍泉窯系青磁碗は13～14世紀代、山茶碗系片口鉢は13世紀後半の年代が与えられる。したがって、今回の調査で検出した遺構は、この時期を中心とした中世に属するものと推定される。

また、ＳＥ５井戸跡検出面からは石棒が出土し、縄文時代にまで遡る遺物が含まれている。

2）　第15次調査では、溝跡１条、土坑11基、ピット40基以上を検出した。

ピットは、そのほとんどで柱痕跡が認められた。調査区の制約から全体を把握することはできないが、配置から建物跡の可能性があるものが含まれ、今年度行われた他の調査区で検出した遺構群と様相が異なる。

遺物は、土師器、ロクロ土師器、須恵器、陶器、土製品、石製品、鉄製品、銭貨が出土した。ほとんどが破片資料で、遺構の詳細な年代を検討する指標にはなり得ない。年代がある程度分かる遺物には、13～14世紀代の常滑産甕、13～14世紀代の白石窯産を含む在地産甕・壺、13世紀代の山茶碗系片口鉢、13～14世紀代の龍泉窯系青磁碗、12世紀代の渥美産甕がある。また、ＳＫ１土坑およびＳＫ２土坑などから、銭貨が計６枚出土している。錆化が著しく、判読できるものは限られるが、ＳＫ２土坑からは咸平元宝が１枚出土している。このことから、今回の調査で検出した遺構は、中世に属し、概ね13～14世紀を中心としたものと推定される。本調査区では確認されなかったが、12世紀代に遡る遺構が、周辺に分布する可能性が考えられる。

基本層からは、土師器、ロクロ土師器、須恵器、土製品が一定量出土している。基本層Ⅳ層およびⅣａ層からは、ロクロ土師器坏を主体に、土師器、ロクロ土師器、須恵器、大戸産壺、丸瓦、手捏土器が出土している。また、基本層Ⅴ層からは、南小泉式の範疇に収まる特徴をもつ土師器壺が出土している。

3）　第16次調査では、溝跡２条を検出した。

遺物は、土師器、須恵器、陶器、瓦、銭貨、鉄滓が出土した。

ＳＤ１溝跡は、区画施設などの可能性もあるが、部分的な調査であることから性格を明らかにすることはできない。また、遺物は散在的に出土し、まとまりをもたない。年代がある程度把握できる遺物には、13世紀後半の山茶碗系鉢、13世紀代の龍泉窯系青磁碗、14世紀後半とみられる産地不明の青磁碗がある。このことから、ＳＤ１溝跡の年代は中世以降と考えられる。

4）　第17次調査では、整地層、井戸跡１基、土坑12基、焼土遺構２基、性格不明遺構２基、ピット12基を検出した。ピットには礫を礎板石としたものが認められることから、建物跡の存在が想定される。

遺物は、土師器、須恵器、陶器、磁器、金属製品が出土した。

出土遺物は、破片資料がほとんどで、遺構の堆積土もしくは埋土に混入したものとみられ、遺構の年代を直接示すものではない。しかし、13～14世紀代の常滑産甕、13世紀後半から14世紀前半の山茶碗系片口鉢、13～14世紀の龍泉窯系青磁碗、13～14世紀代の産地不明白磁碗などがあり、渥美産甕などの12世紀に属するものが少量含まれる。このことから、本調査で検出した遺構の年代は、概ねこの時期を中心とした中世と推定される。本調査区では確認されなかったが、12世紀代に遡る遺構が、この周辺に分布する可能性がある。

5）　第18次調査では、溝跡１条、井戸跡２基、土坑２基を検出した。

遺物は、土師器、ロクロ土師器、須恵器、陶器、土製品、瓦が出土した。

ＳＤ１溝跡は、上端幅4.40m以上、深さ1.40m以上で、本遺跡で検出される他の溝跡と比較して、その規模は大きい。位置や方向、同位置での変遷が認められること、他の遺構との重複関係などから、15～16世紀にかけての城館に伴う区画施設の可能性がある。出土遺物はいずれも断片的な破片資料で、遺構廃絶後に流入、もしくは遺棄・廃棄されたものとみられる。このことから、出土遺物から、遺構の詳細な年代を検討することはできないが、13世紀代とみられる常滑産甕、13世紀後半から14世紀前半の白石窯産を含む在地産甕・鉢、13～14世紀代とみられる古瀬戸瓶類が出土している。

また、本調査で検出した遺構は隣接する第14次調査の成果から、中世に属するものと考えられる。このうち、ＳＫ３土坑およびＳＫ４土坑からは、土器類のみが出土していることから、古代まで遡る可能性がある。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（2005）：『洞ノ口遺跡』仙台市文化財調査報告書第281集

1　遺構完掘状況（東から）

2　SK 1 土坑（北から）

3　SE 3 井戸跡（南から）

4　SE 4 井戸跡・SK 6 土坑（南から）

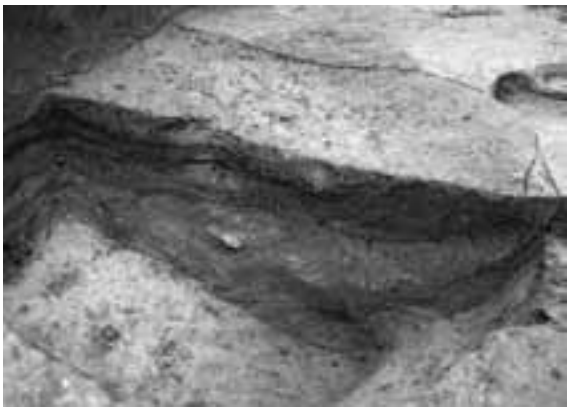
5　SE 7 ・ 8 井戸跡（北から）

写真図版 1（第14次調査）

6　遺構検出状況（西から）

7　遺構完掘状況（西から）

8　SK１土坑（北から）

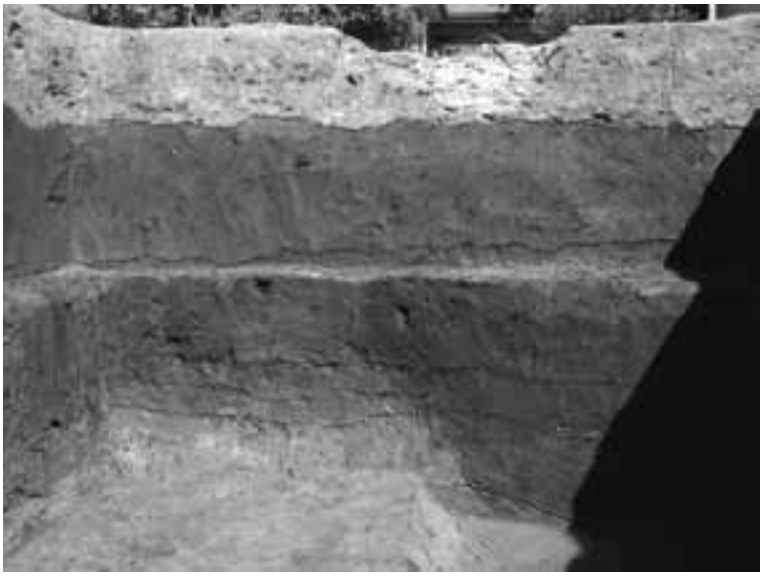


9　SK２土坑（北から）

写真図版２（第15次調査）

10　遺構検出状況（南西から）

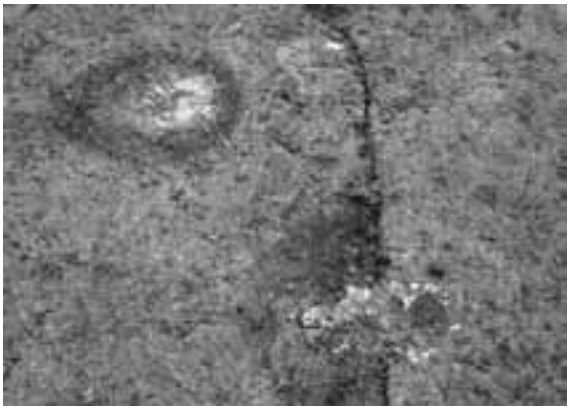
11　遺構完掘状況（北から）



12　調査区北壁断面（南から）

写真図版 3（第16次調査）

13　遺構完掘状況（北から）



14　ＳＸ１・２焼土遺構検出状況（西から）

15　Ｐ５断面（西から）

16　調査区南壁断面（北から）

17　SK12･15土坑断面（北東から）

写真図版４（第17次調査）

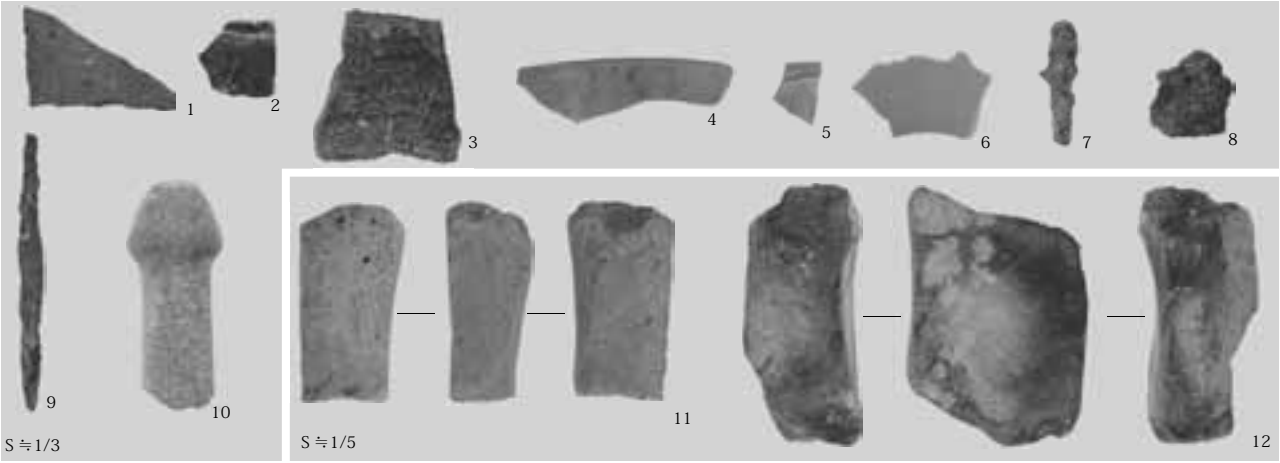
18　遺構検出状況（東から）

19　遺構完掘状況（北東から）

20　SE 2 井戸跡南壁断面（北から）

21　SE 5 井戸跡断面（東から）

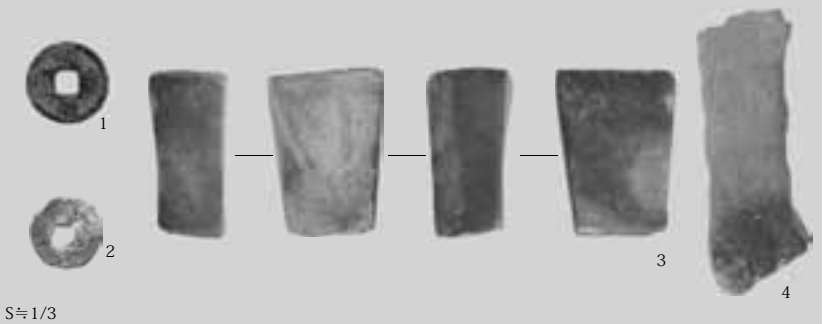
写真図版 5（第18次調査）



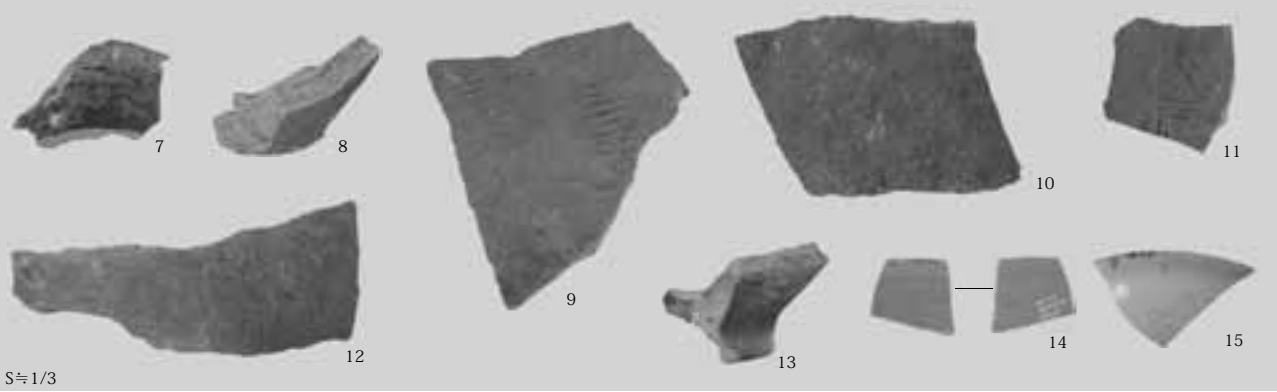
第14次調査出土遺物

第15次調査出土遺物 1

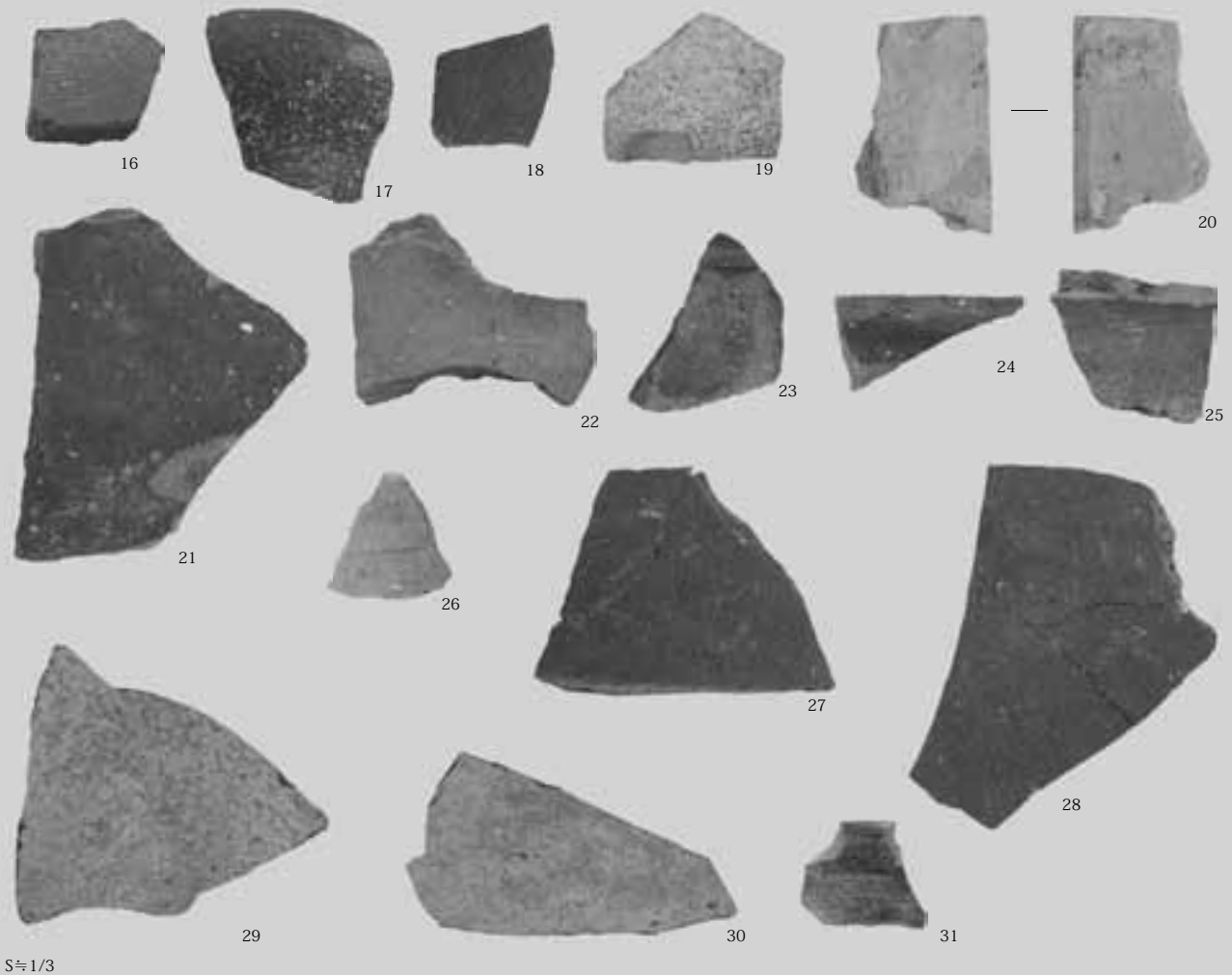
写真図版 6



第15次調査出土遺物 2



第17次調査出土遺物



第18次調査出土遺物

写真図版 7

Ⅲ　鴻ノ巣遺跡第13次発掘調査報告

1　調査要項

遺　跡　名　　鴻ノ巣遺跡（宮城県遺跡登録番号01034）
調 査 地 点　　仙台市宮城野区岩切字鴻巣79－６
調 査 期 間　　平成23年７月11～12日
調査対象面積　　66.24㎡
調 査 面 積　　20㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員　　主事　廣瀬真理子　　文化財教諭　佐藤洋平

2　調査に至る経過と調査方法

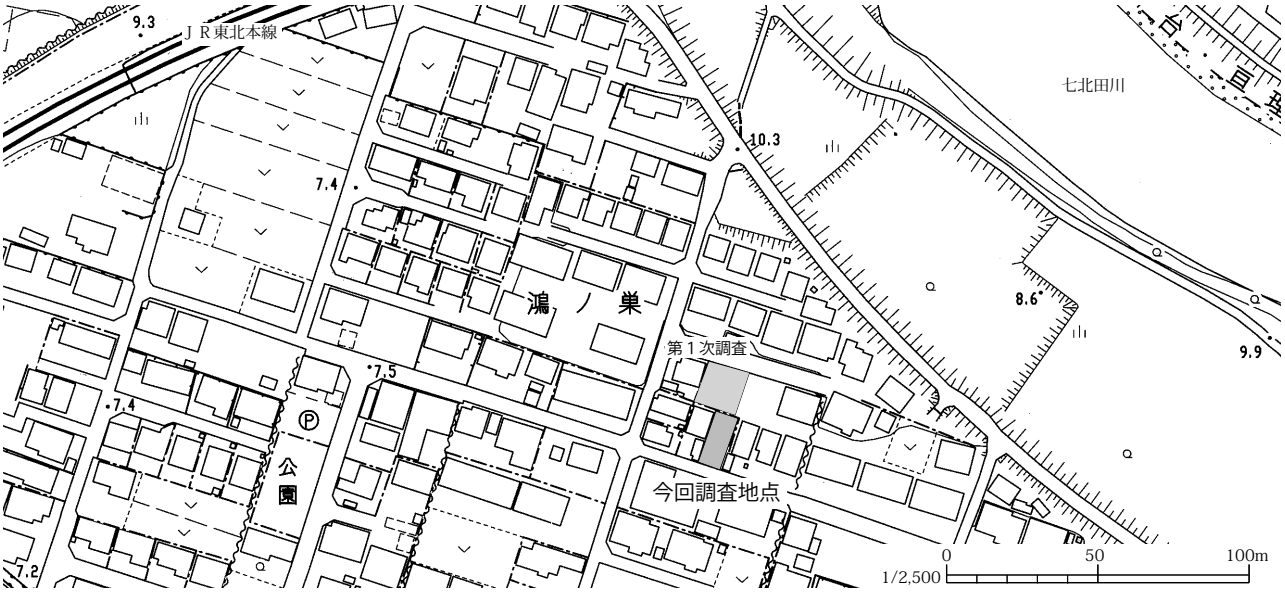
今回の調査は、平成23年５月22日付で、申請者より提出された、「埋蔵文化財発掘の届出について」に対して、文化財保護法第93条（H23教生文第116－46号で回答）基づき実施した。調査は平成23年７月11日に着手し、遺構が検出されたため、引き続き本発掘調査を実施した。住宅建築範囲内に、南北4.0m×東西5.0mの調査区を設定した。重機により盛土・Ⅰ～Ⅱ層を除去後、Ⅲ層上面で遺構検出作業を行い、遺構が検出されなかったため、さらに重機でⅢ層を除去し、Ⅳ層上面で遺構検出作業を行った。Ⅳ層上面では、溝跡２条、土坑２基、ピット４基を検出した。

適宜、平面・断面図を作成し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

3　遺跡の位置と環境

鴻ノ巣遺跡は、仙台市の北東部、ＪＲ岩切駅の南側に位置する。遺跡の北側には、七北田川が東流しその自然堤防上に立地している。遺跡の範囲は、東西約１㎞にわたり、標高は約８ｍである。（３頁第１図参照）

当遺跡は、弥生時代から中世にかけての複合遺跡として知られているが、中でも中世の遺構・遺物が多く確認されている。遺構には、屋敷地をカギ形に区画する溝跡や、その内側に配置された掘立柱建物跡、井戸跡、土坑などが確認されている。遺物は、在地産陶器の他、常滑産や渥美産陶器、中国産青磁、また、舟形木製品などの祭祀にかかわる木製品など、12世紀後半から14世紀のものを中心に、多様な遺物が出土している。



第１図　調査区の位置

4　基本層序

今回の調査で、基本層は５層確認した。

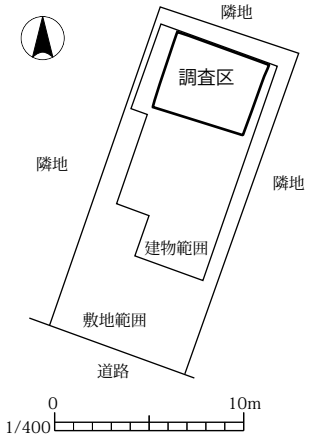
Ⅰ層：黒褐色（10ＹＲ３／２）の砂質シルトである。旧耕作土とみられる。層厚は10～45cm程度である。

Ⅱ層：暗褐色（10ＹＲ３／３）の砂質シルトである。層厚は30～40cm程度である。

Ⅲ層：黒褐色（10ＹＲ２／２）の粘土質シルトで、炭化物を少量含む。層厚は15cm程度である。

Ⅳ層：にぶい黄褐色（10ＹＲ５／４）の粘土質シルトである。今回の調査における遺構検出面である。

Ⅴ層：黒褐色（2.5Ｙ３／２）の粘土である。



第２図　調査区配置図

5　発見遺構と出土遺物

溝跡２条、土坑２基、ピット４基を検出した。遺物は、遺構検出面、遺構堆積土から土師器、須恵器、赤焼土器、陶器、瓦、金属製品などが出土している。

１）溝跡

ＳＤ３溝跡

南北方向の溝跡である。ＳＫ２土坑、Ｐ４と重複し、ＳＫ２土坑よりも古く、Ｐ４よりも新しい。検出長は約2.6mである。規模は上端幅約98cm、下端幅約60cmである。Ⅳ層上面からの深さは約50cmを測り、断面形は逆台形を呈する。堆積土は５層に分層され、黒褐色や暗褐色の粘土質シルト、粘土で、いずれも自然堆積土である。

遺物は出土していない。

ＳＤ４溝跡

南北方向の溝跡である。ＳＫ１土坑と重複し、それよりも古い。検出長は、0.68mである。規模は、上端幅約27cm、下端幅約14cmである。検出面からの深さは約７cmを測り、断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、黒褐色の粘土質シルトである。

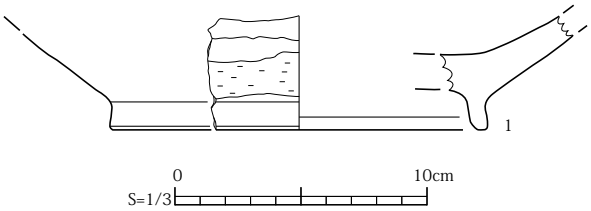
遺物は、１層から土師器が出土している。

２）土坑

ＳＫ１土坑

調査区北西に位置する。ＳＤ４溝跡と重複し、これよりも新しい。規模は、南北1.8m以上、東西1.25m以上である。平面形は、隅丸長方形と推測される。検出面からの深さは約48cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積土は、４層に分層され、黒褐色、黒色の粘土質シルト、砂質シルトである。いずれも自然堆積土と考えられる。

遺物は、１層から須恵器甕、山茶碗系片口鉢（第３図－１）、金属製品（釘か）、３層から在地産擂鉢、４層から土師器が出土している。このうち山茶碗系片口鉢は、13世紀後半のものとみられる。内面が被熱のため器面が剥離し、煤状の付着物が認められる。

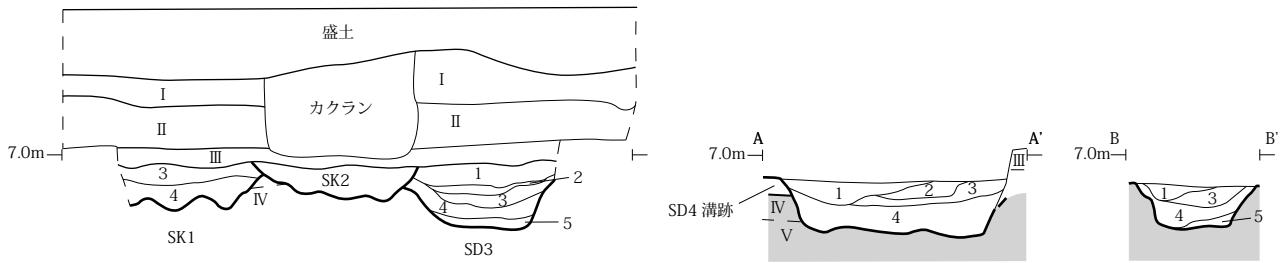


図中番号	登録番号	遺構	層位	種別	器種	法量(cm)			特徴・備考
						器高	口径	底径	
1	Ⅰ－1	ＳＫ1	1	陶器	片口鉢	(3.8)	－	(14.8)	山茶碗系 内面:被熱 煤状付着物

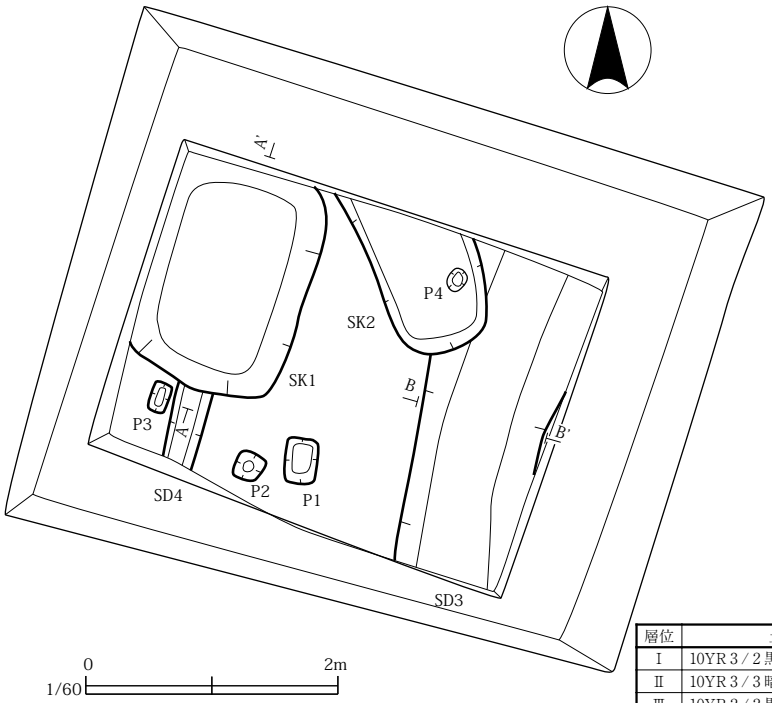
第３図　ＳＫ１出土遺物

ＳＫ２土坑

調査区北に位置する。ＳＤ３溝跡と重複し、これよりも新しい。規模は、長軸1.5m以上、短軸0.8mである。平面



北壁断面図　　ＳＫ１土坑断面図　　ＳＤ３溝跡断面図



層位	土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
Ⅰ	10YR３／２黒褐色砂質シルト	ややあり	ややあり		旧耕作土か
Ⅱ	10YR３／３暗褐色砂質シルト	ややあり	ややあり		
Ⅲ	10YR２／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を少量含む	
Ⅳ	10YR５／４にぶい黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり		遺構検出面
Ⅴ	2.5Y３／２黒褐色粘土	ややあり	あり		粘性強い

遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等
SK１	1	10YR２／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に少量、褐色（10YR４／４）の粘土を粒状に少量、含む
	2	7.5Y２／１黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を多量含む
	3	10YR２／３黒褐色砂質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状にごく少量含む
	4	10YR２／１黒色粘土質シルト	ややあり	あり	にぶい黄褐色（10YR５／３）の粘土をブロック状に多く、炭化物を多く、含む
SK２	1	10YR２／３黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	褐色（10YR４／４）の粘土をブロック状にやや多く含む
SD３	1	10YR２／３黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	褐色（10YR４／４）の粘土を少量、炭化物粒をやや多く、含む
	2	2.5Y３／１黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を主体とする
	3	10YR３／３暗褐色砂質シルト	ややあり	ややあり	
	4	10YR２／１黒色粘土	ややあり	あり	褐色（10YR４／４）の粘土をごく少量含む
	5	10YR４／３にぶい黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色（10YR５／４）の粘土を多量含む
SD４	1	10YR２／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	

遺構	土色・土質	しまり	粘性	混入物等	径	深さ
P１	10YR２／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を少量含む	35×25	28
P２	7.5YR２／１黒色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色（10YR５／４）の粘土をごく少量、炭化物を粒状に少量、含む	22×22	26
P３	10YR２／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり		24×14	9
P４	10YR３／２黒褐色粘土	ややあり	あり		18×16	10

単位：cm

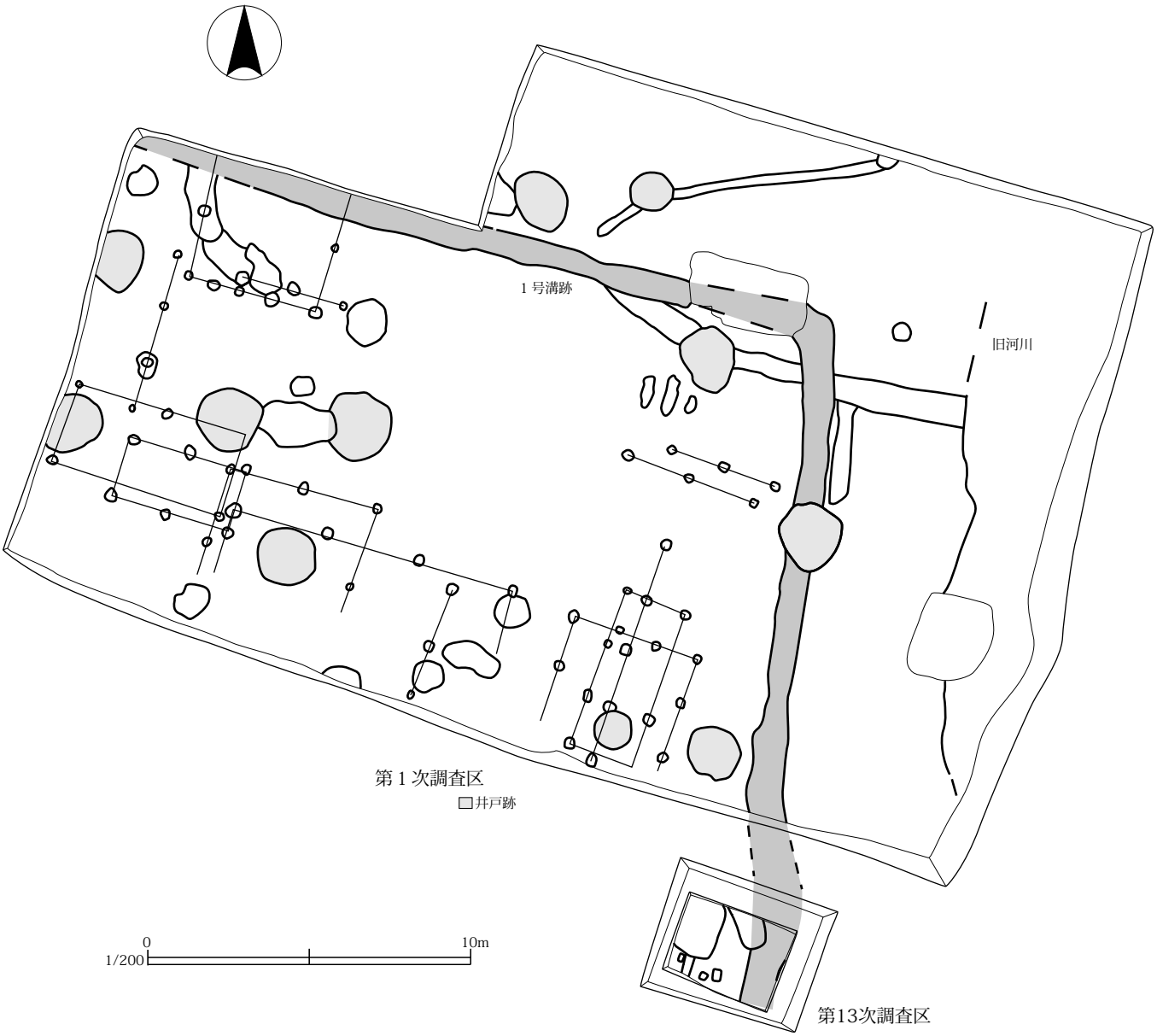
第４図　平面・断面図

形は隅丸長方形と推測される。検出面からの深さは約12cmで、断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、黒褐色の粘土質シルトである。自然堆積土と考えられる。

遺物は出土していない。

3）ピット

計４基検出したが、建物を構成するような有意な配列は認められなかった。



第５図　今回の調査区と第１次調査区

4）その他の出土遺物

遺構検出面から、土師器、須恵器坏、赤焼土器高台付坏、常滑産甕、平瓦が出土している。

6　まとめ

今回の調査地点は、鴻ノ巣遺跡の中央部に位置する。第１次調査区の南側に隣接する。

今回の調査では、溝跡２条、土坑２基、ピット４基を検出した。

第１次調査で検出した１号溝跡は、井戸跡や掘立柱建物跡を取り囲むＬ字形の溝跡であり、中世屋敷ないし中世村落の区画溝と考えられている。今回検出したＳＤ３溝跡は、１号溝跡の延長線上にあたり、同一の溝跡と推測される。なお、今回の調査では、南東コーナーは検出されなかった。

また、ＳＫ１土坑からは、13世紀後半のものとみられる山茶碗系片口鉢が出土しており、中世に属する遺構と考えられる。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（1981）：『鴻ノ巣遺跡―発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第32集

1　遺構検出状況（東から）

2　遺構完掘状況（南東から）

3　北壁断面（西南から）

写真図版１

Ⅳ　沖野城跡第６～11次発掘調査報告

１　調査要項

遺　跡　名　　沖野城跡（宮城県遺跡登録番号01234）

調 査 地 点　　第６次：仙台市若林区沖野７丁目303－21
（平成22年９月27日届出、H22教生文第114号－157回答）
第７次：仙台市若林区沖野７丁目303－19
（平成22年10月１日届出、H22教生文第114号－166回答）
第８次：仙台市若林区沖野７丁目307番
（平成23年５月30日届出、H23教生文第106号－37回答）
第９次：仙台市若林区沖野７丁目304番
（平成23年８月４日届出、H23教生文第106号－117回答）
第10次：仙台市若林区沖野７丁目７－10
（平成23年８月11日届出、H23教生文第106号－127回答）
第11次：仙台市若林区沖野７丁目331の一部
（平成23年11月21日届出、H23教生文第106－256号回答）

調 査 期 間　　第６次：平成22年11月８～９日　　第７次：平成22年11月15～18日
第８次：平成23年７月19日　　第９次：平成23年９月５日
第10次：平成23年９月12日　　第11次：11月29日～12月２日

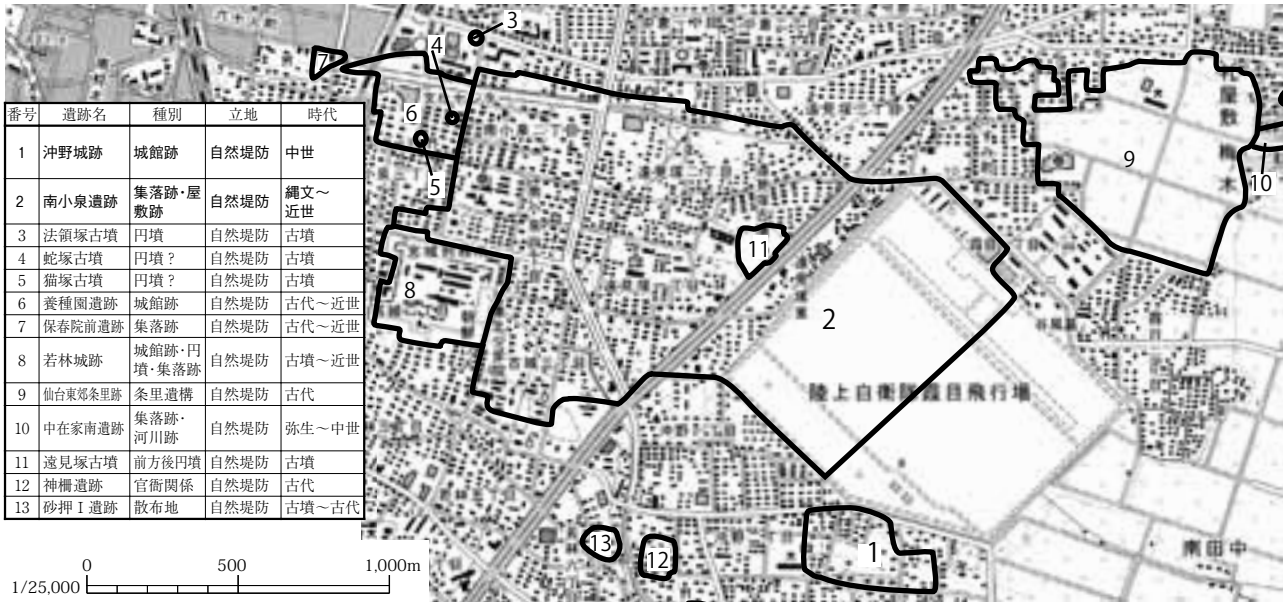
調 査 面 積（調査対象面積）　　第６次：28.8㎡（65.50㎡）　　第７次：31㎡（77.42㎡）
第８次：30.3㎡（111.26㎡）　　第９次：43.2㎡（115.93㎡）
第10次：40.50㎡（104.34㎡）　　第11次：67.8㎡（211.45㎡）

調 査 原 因　　個人住宅建築工事

調 査 主 体　　仙台市教育委員会

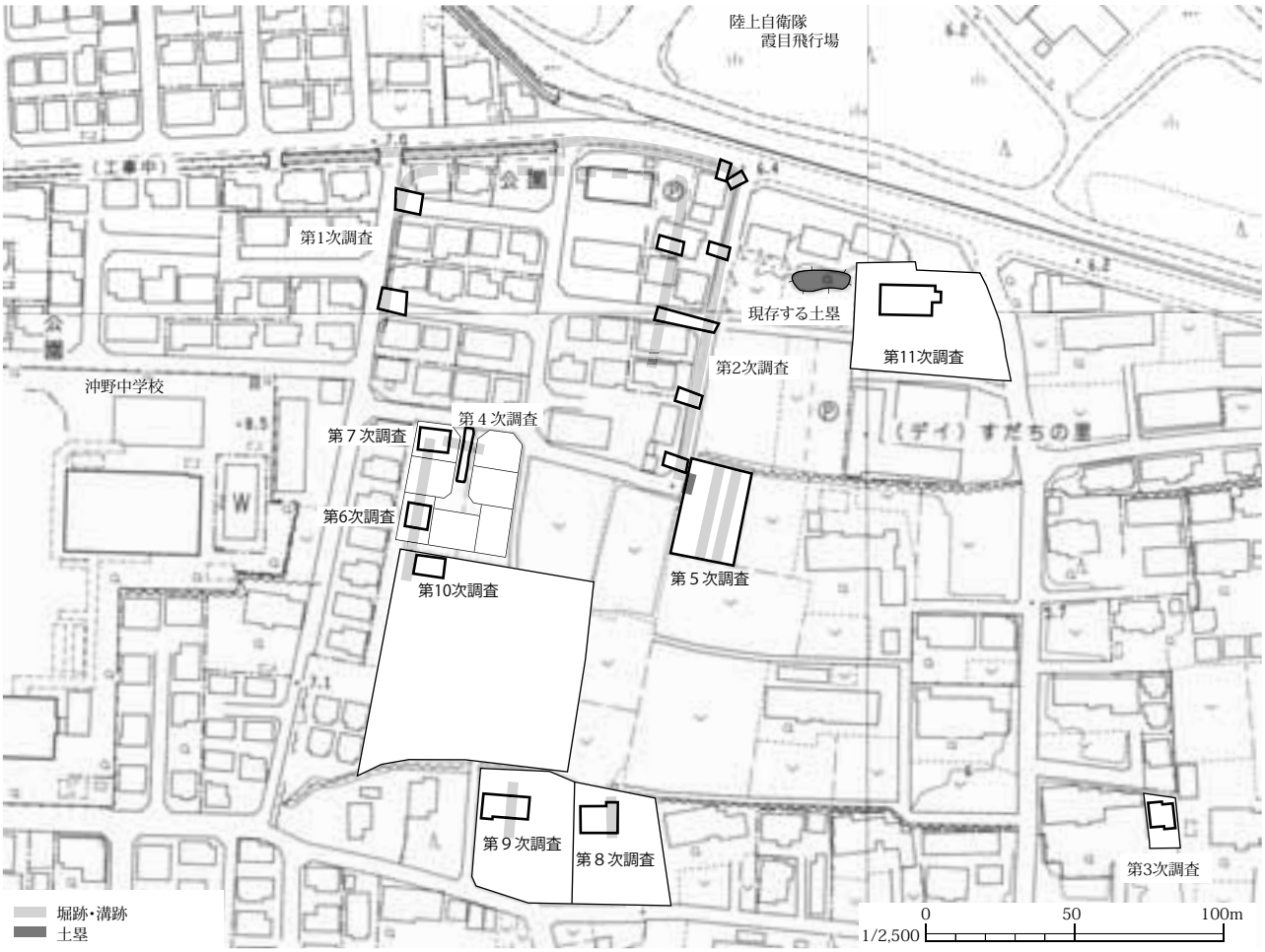
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係

担 当 職 員　　第６次：主事　猪狩俊哉　　文化財教諭　吉野　信
第７次：主事　廣瀬真理子　　文化財教諭　鈴木健弘
第８次：主事　小泉博明　　文化財教諭　吉野　信　　橋本勇人
第９次：主事　小泉博明　　文化財教諭　吉野　信　　佐藤洋平



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世
2	南小泉遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	縄文～近世
3	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
4	蛇塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳
5	猫塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳
6	養種園遺跡	城館跡	自然堤防	古代～近世
7	保春院前遺跡	集落跡	自然堤防	古代～近世
8	若林城跡	城館跡・円墳・集落跡	自然堤防	古墳～近世
9	仙台東郊条里跡	条里遺構	自然堤防	古代
10	中在家南遺跡	集落跡・河川跡	自然堤防	弥生～中世
11	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
12	神柵遺跡	官衙関係	自然堤防	古代
13	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　調査区位置図

第10次：主事　小泉博明　　文化財教諭　吉野　信　　石山智之
第11次：主事　小泉博明　　文化財教諭　吉野　信　　石山智之

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は申請者より提出された、個人住宅建築工事および個人住宅付属倉庫建築工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出について」に対して、文化財保護法第93条に基づき、実施した。確認調査を実施したところ、各調査区で遺構が検出されたため、引き続き本発掘調査を実施した。調査区はいずれの調査区も住宅建築範囲内に設定した。

適宜、平面・断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

3　遺跡の位置と環境

沖野城跡は、仙台市の東部、ＪＲ長町駅から東へ約2.８ｋｍの地点、陸上自衛隊霞目飛行場の南側に隣接する。広瀬川と名取川の合流地点より北東へ2.５ｋｍの場所にあり、広瀬川左岸の自然堤防上に立地する。遺跡の規模は、東西約340m、南北約250mの範囲におよび、標高約６ｍ前後の微高地上にある。

沖野城跡は、『仙台領古城書上』に「沖野城　四方百間　粟野大膳出城ト云」とあり、茂ケ崎城主粟野氏にかかわる城館跡として知られている。また、遺跡北部には、土塁の一部が現存している。発掘調査は、これまで５次にわたり行われ、土塁跡や区画溝などが発見されているが、内部の実態については不明である。

4　第６次調査

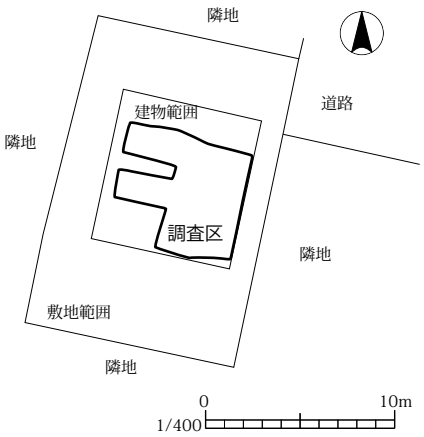
1）基本層序

Ⅰ層：淡黄色（2.5Ｙ８／４）の粘土質シルトと黒褐色（10ＹＲ３／２）の粘土質シルトの互層。層厚は50cm程度である。遺構検出面である。第７次調査のⅡ層に対応する。

Ⅱ層：黒褐色（10ＹＲ３／２）の粘土質シルトである。

2）発見遺構と出土遺物

Ⅰ層上面で溝跡を１条検出した。遺物は出土していない。

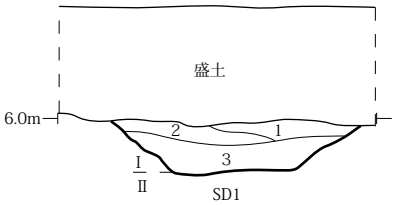


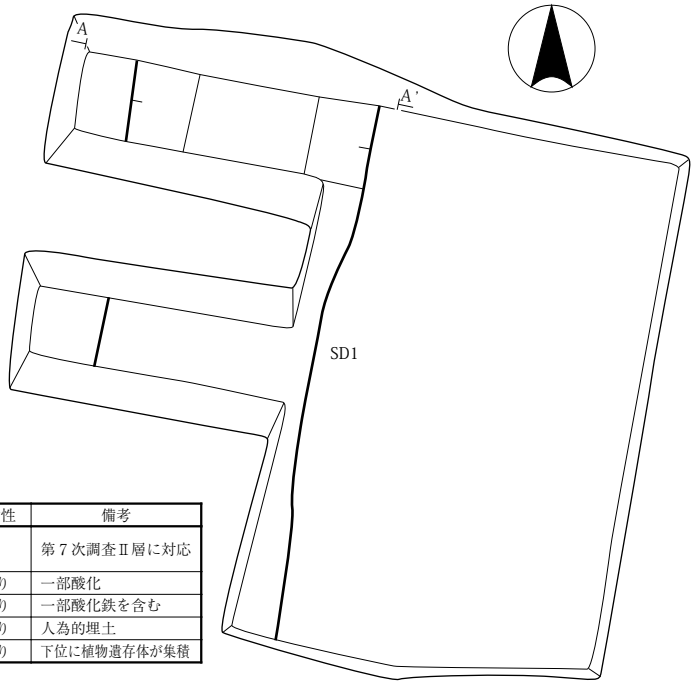
第３図　第６次調査　調査区配置図

ＳＤ１溝跡

盛土直下で検出した、南北方向の溝跡である。検出長は5.8mである。規模は、上端幅約2.7m、下端幅約1.3m、深さは約50cmである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は３層に細分され、黒褐色や褐灰色の粘土である。このうち、２層は、人為的埋土と考えられる。

遺物は出土していない。





遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	備考
Ⅰ		2.5Y８／４淡黄色粘土質シルトと10YR３／２黒褐色粘土質シルトの互層			第７次調査Ⅱ層に対応
Ⅱ		10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	あり	一部酸化
ＳＤ１	1	10YR３／１黒褐色粘土	あり	あり	一部酸化鉄を含む
	2	褐灰色粘土、黒褐色粘土、褐色粘土のブロック状の混合土	あり	あり	人為的埋土
	3	10YR４／１褐灰色粘土	あり	あり	下位に植物遺存体が集積

第４図　第６次調査　平面・断面図

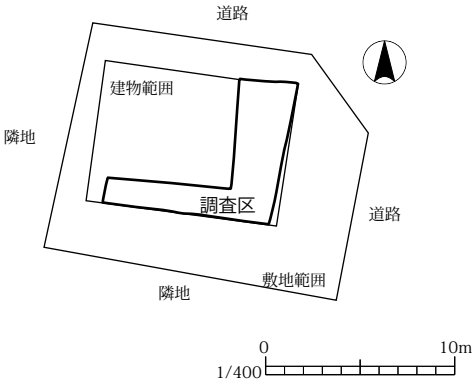
0　2m
1/80

5　第７次調査

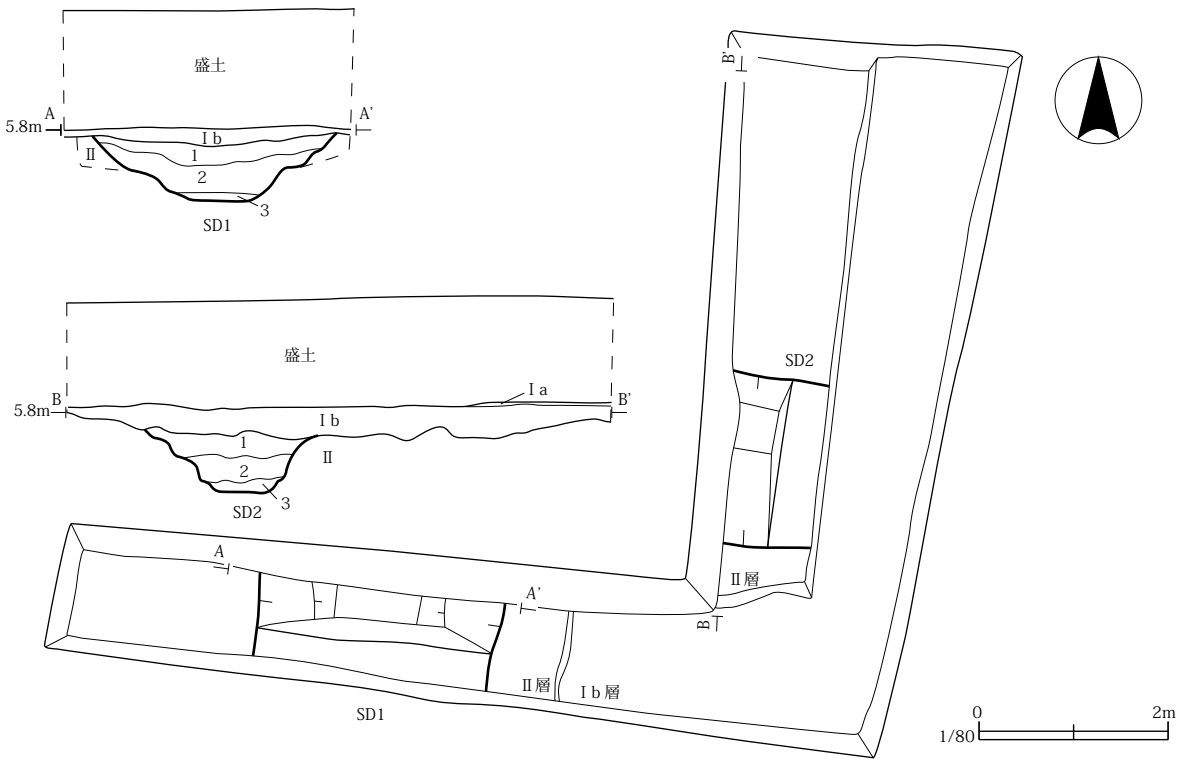
1）基本層序

Ⅰ層：層相から２層に細分される。Ⅰａ層は、均質な黒褐色（2.5Ｙ３／１）の粘土質シルトである。Ⅰｂ層は、ガラスやビニールなどを多量に含む黒褐色（2.5Ｙ３／１）の粘土質シルトである。いずれも盛土以前の旧表土とみられる。

Ⅱ層：浅黄褐色（2.5Ｙ７／４）の粘土質シルトと、黒褐色（2.5Ｙ３／２）の粘土質シルトとの互層。部分的にグライ化しており、酸化鉄を含む。遺構検出面である。第６次調査のⅠ層に対応する。



第５図　第７次調査　調査区配置図



遺構･層位		土色･土質	しまり	粘性	混入物等	備考
Ⅰa		2.5Y３/１黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり		
Ⅰb		2.5Y３/１黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	ガラスやビニールなどを多量に含む	
Ⅱ		2.5Y７/４浅黄褐色粘土質シルト 2.5Y３/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	あり	互層	第６次調査のⅠ層に対応
SD１	１	10YR２/３黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	ガラス瓶を含む	人為的埋土
	２	10YR３/１黒褐色粘土質シルト	ややあり	あり	比較的均質　植物遺存体を多量含む	自然堆積土
	３	2.5Y４/１黄褐色粘土	ややあり	あり	灰黄色粘土をブロック状に含む	
SD２	１	5Y２/２オリーブ黒色粘土質シルト	ややあり	ややあり	黒色シルト､褐色シルトのブロックなどをまだらに含み､ガラスやビニールなどを含む	人為的埋土
	２	5Y３/２オリーブ黒色粘土質シルト	ややあり	ややあり	比較的均質　植物遺存体を多量含む	自然堆積土
	３	5Y３/１オリーブ黒色粘土質シルト	ややあり	あり	暗緑灰色シルトをブロック状に多量､植物遺存体を少量､含む	

第６図　第７次調査　平面・断面図

2）発見遺構と出土遺物

Ⅱ層上面で溝跡を２条検出した。遺物は出土していない。

ＳＤ１溝跡

南北方向の溝跡である。検出長は1.0mである。規模は、上端幅約2.6m、下端幅約1.1m、深さは約65cmである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は３層に分層され、黒褐色～黄褐色の粘土、粘土質シルトである。このうち１層は、ガラス瓶などが含まれており、現代の埋土と判断される。位置関係などから、第６次調査で検出したＳＤ１溝跡と同一の溝跡と考えられる。

遺物は出土していない。

ＳＤ２溝跡

東西方向の溝跡である。検出長は1.0mである。規模は、上端幅約2.0m、下端幅約0.6m、深さは約70cmである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は３層に分層され、オリーブ黒色の粘土質シルトである。そのうち１層は、ガラスやビニールなどが大量に含まれることから、現代の埋土と判断される。位置関係などから、第４次調査で検出したＳＤ３溝跡と同一の溝跡と考えられる。また、調査区の制約から、ＳＤ１溝跡と本溝跡との関係については、不明である。

遺物は出土していない。

6　第８次調査

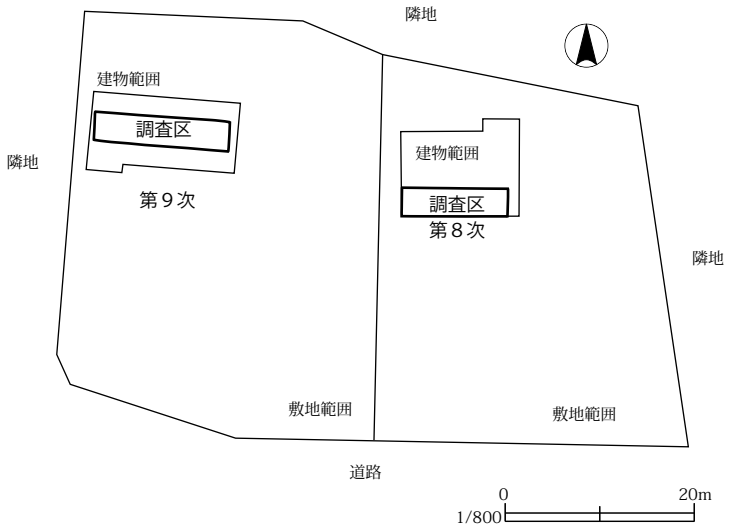
1）　基本層序

Ⅰ層：オリーブ褐色（2.5Ｙ４／３）の粘土質シルトである。現盛土前の宅地造成に伴うものとみられる。層厚は20～40cmである。

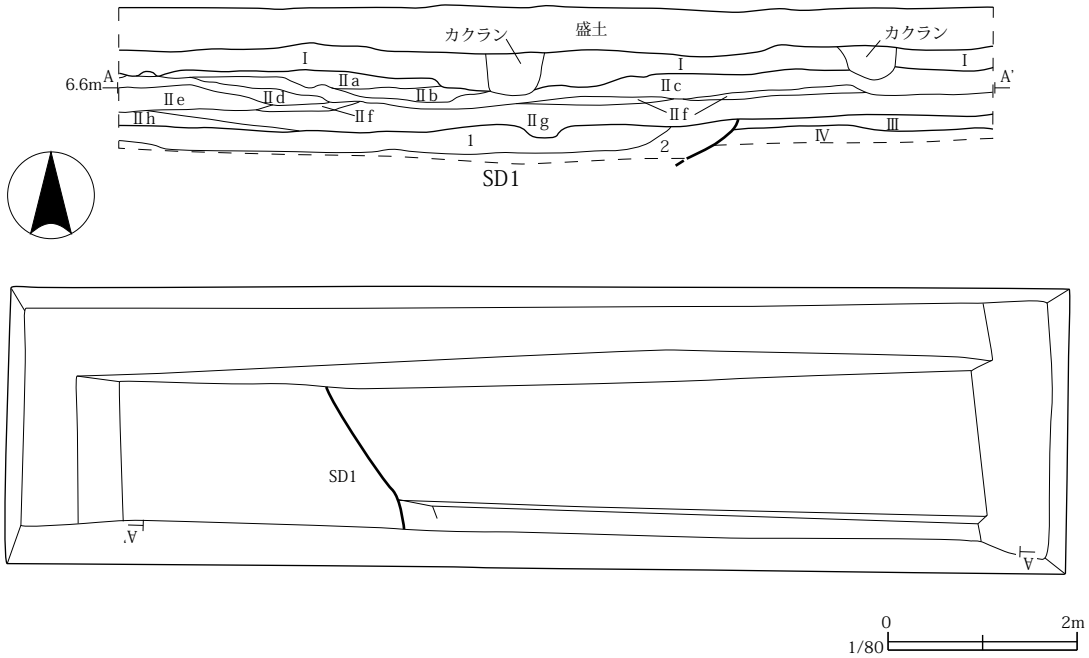
Ⅱ層：人為的な盛土による整地層と整地前の畑地耕作土。８層に細分される。このうち、Ⅱｃ層は近現代のものとみられる瓦片や円礫を含む。層厚は40～60cmである。

Ⅲ層：黒褐色（10ＹＲ３／１）の粘土質シルトである。黄褐色（2.5Ｙ５／３）の砂質シルトを斑状に含む。層厚は10cm程度である。ＳＤ１堀跡の遺構掘り込み面である。

Ⅳ層：黄褐色（2.5Ｙ５／３）の砂質シルトである。粘性がなく、均質である。今回の調査の遺構検出面である。



第７図　第8,9次調査　調査区配置図



遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
Ⅰ		2.5Y４／３オリーブ褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	灰黄褐色(10YR５／２)の粘土を小ブロック状に含む	盛土前の宅地整地層
Ⅱa		2.5Y３／１黒褐色粘土	ややあり	あり	にぶい黄褐色(10YR５／３)の砂質シルトをブロック状に含む	宅地以前の整地層
Ⅱb		2.5Y３／１黒褐色粘土	ややあり	あり	炭化物を粒状に少量含む	
Ⅱc		2.5Y３／３暗オリーブ褐色粘土質シルト	ややあり	あり	にぶい黄褐色(10YR５／３)の砂質シルトを粒状、ブロック状に含む	近現代の瓦類、礫を含む整地層
Ⅱd		2.5Y３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色(10YR５／３)の砂質シルトを小ブロック状に若干含む	宅地以前の整地層
Ⅱe		2.5Y３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色(10YR５／３)の砂質シルトを小ブロック状に少量含む	
Ⅱf		2.5Y５／１黄灰色粘土	ややあり	あり	にぶい黄褐色(10YR５／３)の砂質シルトを斑状に含む	
Ⅱg		10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状にごく少量含む	整地以前の畑地耕作土か
Ⅱh		10YR３／３暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状にごく少量含む	
Ⅲ		10YR３／１黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	黄褐色(2.5Y５／３)の砂質シルトを斑状に含む	遺構掘り込み面
Ⅳ		2.5Y５／３黄褐色砂質シルト	ややあり	ややあり	自然堤防を形成する水成堆積層	遺構検出面
SD 1	1	10YR５／１褐灰色砂質シルト	ややあり	なし	黒色粘土を小ブロック状に、黄褐色砂質シルトをブロック状に含む	人為的埋土
	2	2.5Y３／２黒褐色粘土	なし	あり	黄褐色(2.5Y５／３)の砂質シルトを斑状に含む	自然堆積土

第８図　第８次調査　平面・断面図

2）発見遺構と出土遺物

基本層Ⅳ層上面で堀跡１条を検出した。遺物は基本層、遺構堆積土から陶器、金属製品、銭貨が出土している。

ＳＤ１堀跡

調査区東部で検出した南北方向とみられる堀跡である。部分的な検出で、規模や展開は不明であるが、上端幅6.80ｍ以上の大規模なものである。底面は未検出である。堆積土は２層を確認した。上層は黒色（10ＹＲ２／１）の粘土を小ブロック状に、黄褐色（2.5Ｙ５／３）の砂質シルトをブロック状に含む褐灰色（10ＹＲ５／１）の砂質シルトで、人為的埋土である。下層は黄褐色（2.5Ｙ５／３）の砂質シルトを斑状にごく少量含む黒褐色（2.5Ｙ３／２）を呈するしまりのない粘土で、自然堆積土である。

遺物は上層から大堀相馬碗が出土している。

7　第９次調査

1）　基本層序

Ⅰ層：黒褐色の粘土質シルトなどで、層相から５層に細分される。宅地化前の畑地耕作土である。層厚は30～40cmである。

Ⅱ層：にぶい黄褐色（10ＹＲ４/3, 10ＹＲ５／３）のシルト、砂質シルトである。層相から２層に細分される。畑地耕作に伴う天地返しなどの可能性がある。層厚は10cm程度である。

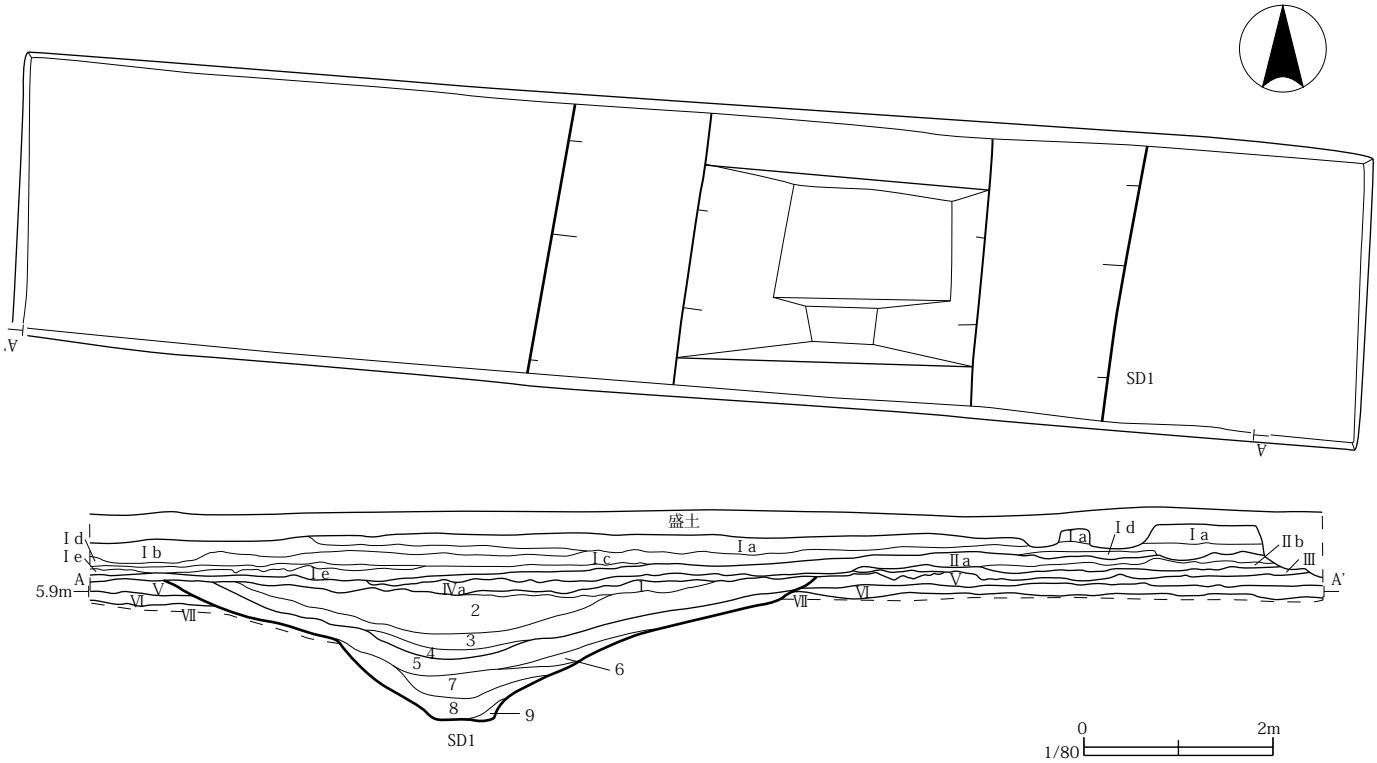
Ⅲ層：しまり、粘性共にあまりない、灰黄褐色（10ＹＲ４／２）の砂質シルトで、砂をブロック状に含む。層厚は５cm程度である。

Ⅳ層：しまりのある黒色（10ＹＲ２／１）の粘土で、にぶい黄褐色の粘土を斑状に含む。底面に凹凸がみられる。層厚は10～20cmである。

Ⅴ層：均質な黄灰色（2.5Ｙ４／１）の粘土である。ＳＤ１溝跡の遺構掘り込み面である。層厚は10cm程度である。

Ⅵ層：黒褐色（10ＹＲ３／２）の粘土である。層下半ににぶい黄褐色の砂質シルトを斑状に含む。層厚は10cm程度である。

Ⅶ層：均質なにぶい黄褐色（10ＹＲ５／４）の砂質シルトである。今回の調査の遺構検出面である。



第９図　第９次調査　平面・断面図

遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
Ⅰa		10YR４／３にぶい黄褐色シルト	ややあり	あまりなし	均質	
Ⅰb		10YR３／２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり		
Ⅰc		10YR３／３暗褐色粘土	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色(10YR５／３)の砂質シルトを斑状に含む	
Ⅰd		2.5Y４／２暗灰黄色粘土	ややあり	ややあり	砂を均質に含む	
Ⅰe		2.5Y４／３オリーブ褐色粘土	ややあり	あり	均質	
Ⅱa		10YR４／３にぶい黄褐色シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色(10YR５／３)の砂質シルトを斑状に含む	
Ⅱb		10YR５／３にぶい黄褐色砂質シルト	ややあり	あまりなし	黒褐色(10YR３／２)の粘土を斑状に含む	
Ⅲ		10YR４／２灰黄褐色砂質シルト	あまりなし	あまりなし	砂をブロック状に含む	
Ⅳ		10YR２／１黒色粘土	あり	あり	にぶい黄褐色(10YR５／３)の粘土を斑状に含む	
Ⅴ		2.5Y４／１黄灰色粘土	ややあり	あり	均質	
Ⅵ		10YR３／２黒褐色粘土	ややあり	あり	下半ににぶい黄褐色(10YR５／４)の砂質シルトを斑状に含む	
Ⅶ		10YR５／４にぶい黄褐色砂質シルト	ややあり	あまりなし	均質	
SD１	1	10YR３／１黒褐色粘土	あり	ややあり	にぶい黄褐色(10YR５／６)の粘土を小ブロック状に含む	人為的埋土
	2	2.5Y４／１黄灰色粘土	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色(10YR５／３)の粘土を互層状に含む	
	3	2.5Y４／２暗灰黄色粘土	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色(10YR５／３)の粘土を粒状にやや多く含む	
	4	10YR５／４にぶい黄褐色粘土	あり	あり	均質	
	5	2.5Y３／１黒褐色粘土	あまりなし	あり	灰黄褐色(10YR５／２)の粘土を斑状に少量含む	自然堆積土
	6	2.5Y３／２黒褐色粘土	なし	あり	灰黄褐色(10YR５／２)の粘土を斑状に若干含む	
	7	10YR２／１黒色粘土	なし	あり	灰黄褐色(10YR５／２)の粘土を斑状に少量含む	
	8	2.5Y４／２暗灰黄色粘土	なし	あり	にぶい黄褐色(10YR５／４)の粘土を斑状に多く含む	
	9	10YR３／２黒褐色粘土	なし	なし	にぶい黄褐色(10YR５／４)の粘土をブロック状(崩落土)に多く含む	

第１表　第９次調査　土層註記表

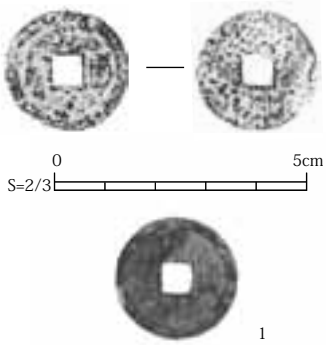
2）発見遺構と出土遺物

Ⅶ層上面で堀跡１条を検出した。遺物は、遺構堆積土から銭貨が出土している。

ＳＤ１堀跡

調査区中央部に位置する南北方向の堀跡である。検出長は約2.90mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約6.85m、下端幅約0.65mで、検出面からの深さは120cmほどである。断面形は、上部が大きく開く逆台形を呈する。堆積土は９層に細分され、上層（１～４層）の人為的埋土と、下層（４～９層）の自然堆積土に大別される。

遺物は、上層から銭貨「寛永通宝」（第10図－１）が１点出土している。



番号	登録番号	遺構名	層位	種別	器種	法量		特徴・備考
						径	重	
1	N－１	SD１	上層	銅製品	銭貨	2.4	2.8	(新)寛永通宝

第10図　第９次調査　出土遺物

8　第10次調査

1）　基本層序

Ⅰ層：しまりのない灰黄褐色（10ＹＲ４／１）などのシルトなどで、層相から２層に細分される。調査区全域に分布する宅地化前の畑地耕作土である。層厚は20cm程度である。

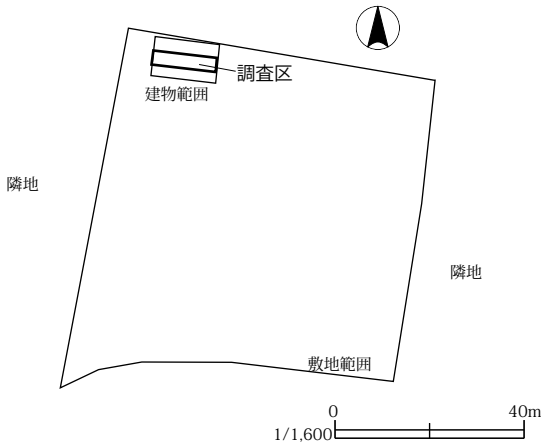
Ⅱ層：黒褐色（2.5Ｙ３／２）の粘土で、暗灰黄色の粘土質シルトを含む。層厚は10cm程度である。

Ⅲ層：暗灰黄色（2.5Ｙ４／２）の粘土質シルトで、黒褐色の粘土を含む。層厚は10～40cmである。

Ⅳ層：しまりのある黒色（10ＹＲ２／１）もしくは黒褐色（10ＹＲ２／２）の粘土で、２層に細分される。Ⅳａ層は層下半に黄褐色の粘土をブロック状に含む。Ⅳｂ層は黄灰色の粘土を斑状に含む。ＳＤ１溝跡の掘り込み面である。層厚は20cm程度である。

Ⅴ層：黄褐色(2.5Ｙ５／３)の粘土をラミナ状に含む黄灰色(2.5Ｙ４／１)の粘土層である。自然堤防を形成する水成堆積層である。層厚は50cm程度である。

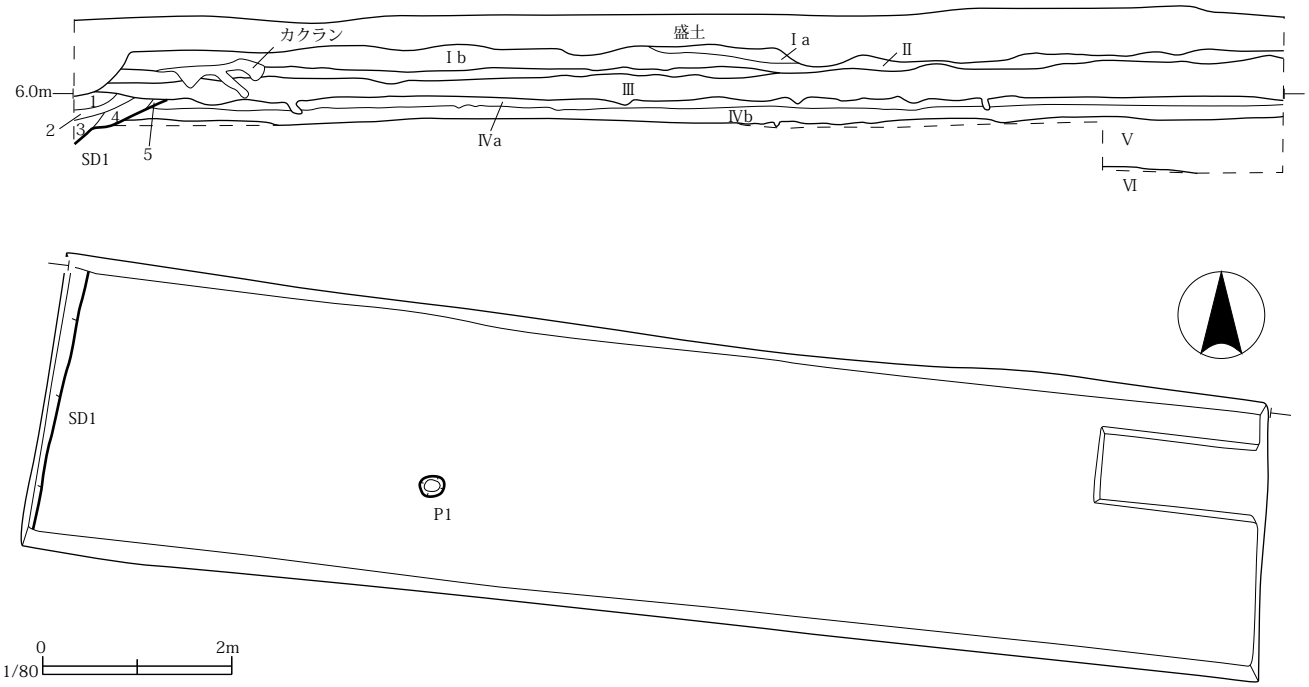
Ⅵ層：均質な黒褐色（2.5Ｙ３／１）の粘土層である。



第11図　第10次調査　調査区配置図

2）　発見遺構と出土遺物

Ⅴ層上面で溝跡１条、ピット１基を検出した。遺物は土師器、須恵器が出土している。



遺構･層位		土色･土質	しまり	粘性	混入物等	備考
Ⅰa		10YR４/１灰黄褐色シルト	あまりなし	あまりなし	炭化物を粒状に少量含む　ビニール片など混入する	畑地耕作土
Ⅰb		2.5Y４/３オリーブ褐色シルト	あまりなし	あまりなし	黒褐色(10YR３/２)の粘土を小ブロック状に少量含む	
Ⅱ		2.5Y３/２黒褐色粘土	ややあり	あり	暗灰黄色(2.5Y４/２)の粘土質シルトを粒状に少量含む	
Ⅲ		2.5Y４/２暗灰黄色粘土質シルト	あまりなし	あまりなし	黒褐色(10YR２/２)の粘土を粒状に少量含む	
Ⅳa		10YR２/２黒褐色粘土	あり	あり	層下半に黄褐色(2.5Y５/３)の粘土をブロック状に多く含む	
Ⅳb		10YR２/１黒色粘土	あり	あり	黄灰色(2.5Y４/１)の粘土を斑状に多く含む	
Ⅴ		2.5Y４/１黄灰色粘土	ややあり	あり	黄褐色(2.5Y５/３)の粘土をラミナ状に含む	
Ⅵ		2.5Y３/１黒褐色粘土	ややあり	あり	均質	
SD 1	1	2.5Y３/２黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	砂を均質に含む	自然堆積
	2	2.5Y４/１黄灰色粘土	ややあり	あり	炭化物を粒状にごく少量含む	
	3	10YR４/１灰黄褐色粘土	ややあり	あり	黄灰色(2.5Y４/１)の粘土を粒状に少量含む	
	4	10YR２/２黒褐色粘土	ややあり	あり	黄灰色(2.5Y４/１)の粘土を斑状に含む	
	5	2.5Y４/３オリーブ褐色シルト	あまりなし	あまりなし	均質	
P１		10YR３/２黒褐色粘土	ややあり	あり	黄褐色(2.5Y５/３)の粘土を粒状に若干含む	

第12図　第10次調査　平面・断面図

（１）溝跡

ＳＤ１溝跡

調査区西端部に位置する南北方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長は約2.80ｍで、さらに調査区外へ延びる。一部の検出であることから、規模は不明である。検出面からの深さは30㎝以上である。断面形は不明であるが、壁は比較的緩やかに立ち上がる。堆積土は５層を確認した。いずれも自然堆積土とみられ、上層にはガラス片などを含む。

遺物は、土師器が出土している。

（２）ピット

調査区中央部に位置する。他の遺構との重複はない。平面形は円形を呈し、径20㎝ほどである。深さ15㎝である。堆積土は単層で、黄褐色の粘土を含む黒褐色の粘土である。柱痕跡は確認されなかった。

遺物は出土していない。

９　第11次調査

１）基本層序

Ⅰ層：しまりのない、比較的均質なにぶい黄褐色（10ＹＲ４/３）などのシルトである。層相から３層に細分される。

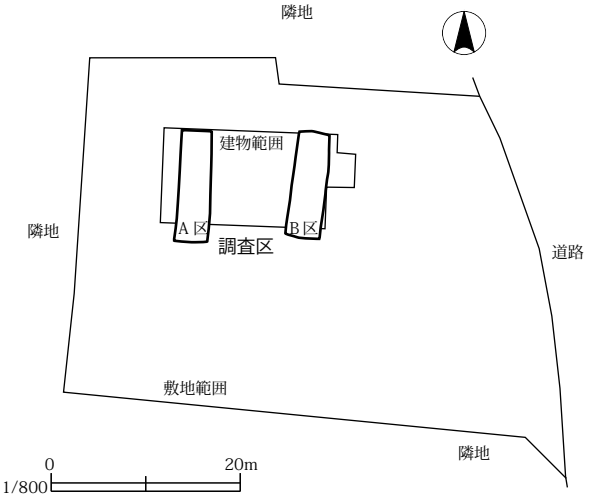
宅地化以前の畑地耕作土である。層厚は、10～30cmである。

Ⅱ層：暗褐色（10ＹＲ３／４）の粘土質シルトで、黒褐色の粘土を含む。層相から２層に細分される。ＳＤ１溝跡の掘り込み面である。層厚は、20～30cmである。

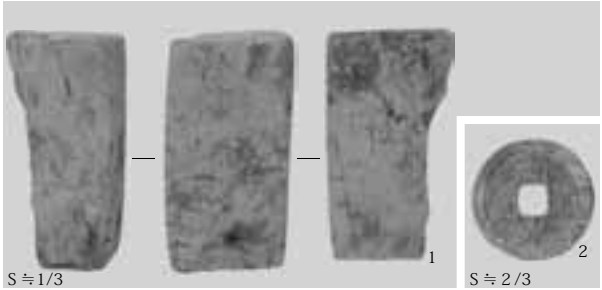
Ⅲ層：黒褐色（10ＹＲ２／２）の粘土ブロックとにぶい黄褐色（10ＹＲ５／４）の粘土ブロックの混合層で、しまりがあり、粘性が強い。Ａ区の南半部に分布する。層厚は、10～20cmである。

Ⅳ層：黒褐色（10ＹＲ２／２、２／３）の粘土で、３層に細分される。いずれもにぶい黄褐色の粘土を含み、Ⅳｂ層は斑状に多く含む。しまりがあり、粘性が強い。層厚は、20cm程度である。

Ⅴ層：灰オリーブ色（7.5Ｙ５／２）を呈するグライ化した均質な粘土である。



第13図　第11次調査　調査区配置図



番号	登録番号	出土層位	種別	器種	法量(cm/g)			備考
					長(径)	幅	厚(重)	
1	K－1	Ⅰ	石製品	砥石	9.1	5.2	4.5	砥面５面　石材:凝灰岩
2	N－1	Ⅰ	銅製品	銭貨	2.4	－	2.7	(古)寛永通宝

写真図版１　第11次調査　出土遺物

2）発見遺構と出土遺物

Ａ区、Ｂ区いずれも調査区北部で、東西方向の堀跡１条を検出した。位置や規模、堆積土の状況から、一連の遺構と考えられる。遺物は基本層Ⅰ層から石製品（砥石）、銭貨「寛永通宝」(写真図版１－１、２)がそれぞれ１点出土している。

ＳＤ１堀跡

調査区北部で検出した東西方向の堀跡である。検出総長は約15mで、さらに調査区外東西へ延びる。部分的な検出で、規模は不明であるが、調査区壁面で確認した上端幅3.90～4.90m以上、深さ130cm以上である。底面は未検出であるが、堀跡南壁は比較的緩やかに立ち上がる。堆積土は13層を確認した。にぶい黄褐色の粘土主体層、黒褐色の粘土ブロックと灰オリーブ色の粘土ブロックの混合土、灰オリーブ色の粘土を含む黒褐色や暗褐色の粘土質シルトおよび粘土などである。層相から、１～９層は人為的埋土、９～13層は自然堆積土と考えられる。

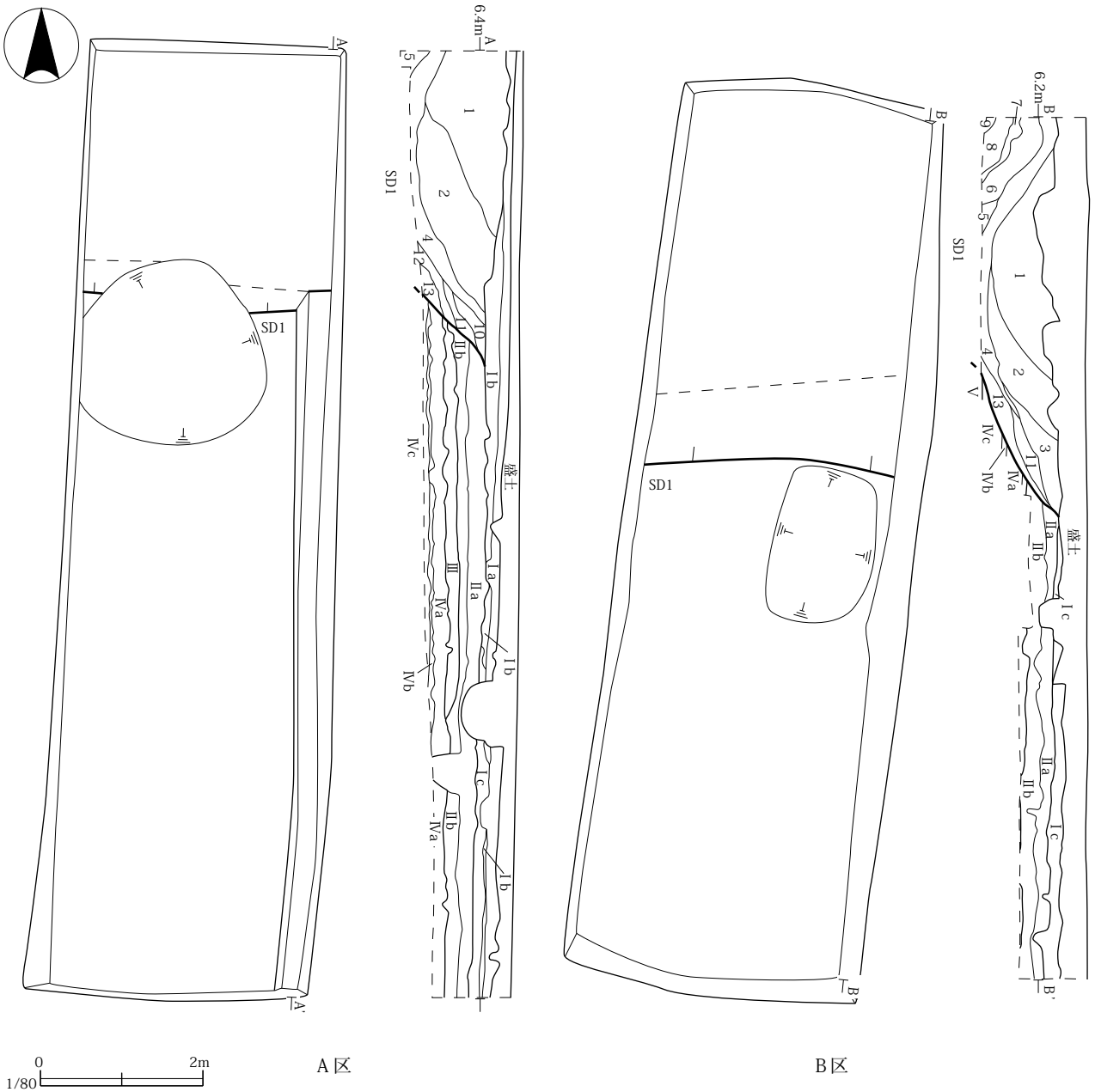
遺物は出土していない。

10　まとめ

第６次から第11次までの６次にわたる本発掘調査の中で、沖野城に関連するとみられる遺構を確認したのは、第８、９、11次調査の計３地点である。いずれも沖野城の区画施設と推定される堀跡を検出した。

第８次調査区と第９次調査区は、遺跡の南西部に位置する。それぞれ南北方向の堀跡を１条検出した。このうち、第８次調査で検出した堀跡は、上端幅6.80m以上の大規模なものである。第５次調査で検出した堀跡の延長線上にあたるが、今回の調査では、一連の遺構であるか確認することはできなかった。また、第９次調査で検出した堀跡は、周辺の調査で確認された沖野城に伴うとされる堀跡と比較すると、やや小規模であるが、方向や堆積土の状況は類似している。このことから、いずれの堀跡も沖野城に関連する堀跡と推定される。

第11次調査区は、遺跡の北東部に位置する。２箇所の調査区で東西方向の堀跡を検出した。位置や規模、堆積土の状況から一連のものと考えられる。この堀跡は、上端幅4.90m以上、深さ130cm以上の規模から、沖野城に関連する区画施設と考えられる。調査区の西側隣接地には、東西方向の土塁状の高まりが地表顕在遺構として確認できる。位置関係をみると、堀跡の延長線上にあたり、方向も類似している。このことから、区画施設が土塁と堀で形成されていた可能性や、区画施設が堀から土塁へ移行したなどの変遷が推測されるが、今回の調査では、明らかにすることはできなかった。



遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
Ⅰa		10YR４／３にぶい黄褐色シルト	あまりなし	あまりなし	黒褐色(10YR２／２)の粘土を粒～小ブロック状にごく少量含む	畑地耕作土
Ⅰb		10YR５／２灰黄褐色シルト	あまりなし	あまりなし	均質	
Ⅰc		10YR４／３にぶい黄褐色シルト	あまりなし	あまりなし	均質	
Ⅱa		10YR３／３暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	黒褐色(10YR２／２)の粘土を小ブロック状にやや多く含む	
Ⅱb		10YR３／４暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色(10YR５／４)の粘土を粒状にやや多く含む	
Ⅲ		10YR２／２黒褐色粘土ブロックと10YR５／４にぶい黄褐色粘土ブロックの混合層	あり	あり		
Ⅳa		10YR２／２黒褐色粘土	あり	あり	にぶい黄褐色(10YR５／４)の粘土を小ブロック状に少量含む	
Ⅳb		10YR２／３黒褐色粘土	あり	あり		
Ⅳc		10YR２／１黒色粘土	あり	あり		
Ⅴ		7.5YR５／２灰オリーブ色粘土	あり	あり		
ＳＤ１	1	10YR５／３にぶい黄褐色粘土	あり	あり	基本層塊主体層	人為的埋土
	2	2.5Y３／３暗オリーブ褐色粘土	あり	あり	にぶい黄褐色(10YR５／２)の粘土をブロック状に多く含む	
	3	2.5Y３／３暗オリーブ褐色粘土	あり	あり	にぶい黄褐色(10YR５／２)の粘土をブロック状に若干含む	
	4	10YR４／１褐灰色粘土	ややあり	あり	にぶい黄褐色(10YR５／２)の粘土を粒状に少量含む　比較的均質	
	5	2.5Y４／１黄灰色粘土	ややあり	あり	灰オリーブ色(7.5Y５／２)の粘土を粒状に若干含む	
	6	10YR３／３暗褐色粘土	あり	あり	にぶい黄褐色(10YR５／３)の粘土をブロック状にやや多く含む	
	7	2.5Y４／３オリーブ褐色粘土	ややあり	あり	黒褐色(10YR２／２)の粘土を粒～小ブロック状にごく少量含む	
	8	10YR２／２黒褐色粘土と7.5Y５／３灰オリーブ色粘土の混合土	あり	あり		
	9	2.5Y３／２黒褐色粘土	ややあり	あり	灰オリーブ色(7.5Y５／３)の粘土を粒状に少量含む	
	10	10YR３／３暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	黒褐色(10YR２／２)の粘土とにぶい黄褐色(10YR５／４)の粘土を粒状に若干含む	自然堆積土
	11	2.5Y３／３暗オリーブ褐色粘土	ややあり	あり	にぶい黄褐色(10YR５／２)の粘土を粒状に少量含む	
	12	2.5Y３／２黒褐色粘土	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色(10YR５／４)の粘土を小ブロック状にやや多く含む	
	13	2.5Y３／１黒褐色粘土	ややあり	あり	にぶい黄褐色(10YR５／２)の粘土をブロック状に少量含む	

第14図　第11次調査　平面・断面図

上記３条の堀跡からは、掘削および主な機能時期を明らかにする資料は得られなかった。一方、埋め戻しについては、すべての堀跡が基本層を主体、もしくは多く含む土で上部を人為的になされており、第５次調査で検出した堀跡と状況が類似する。第８次調査区と第９次調査区では、人為的埋土から、大堀相馬碗と寛永通宝が出土している。このことから、遺跡南西部で検出した堀跡の埋め戻しは、沖野城廃絶後の近世以降に下る可能性が考えられる。

一方、沖野城跡西部に位置する第６、７、10次調査では、比較的小規模な東西および南北方向の溝跡を検出した。南北方向の溝跡は、位置や規模、堆積土の状況から、一連の溝跡と考えられる。沖野城の地割りを踏襲した溝跡と判断されるが、遺物が出土していないことから、掘削の時期については不明である。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（1986）:『年報７　昭和60年度』「沖野城跡」仙台市文化財調査報告書第94集
仙台市教育委員会（2009）:『山口遺跡他』「沖野城跡第４次調査報告書」仙台市文化財調査報告書第345集
仙台市教育委員会（2010）:『上野遺跡他』「沖野城跡第５次調査報告」仙台市文化財調査報告書第372集

1　第６次調査　調査区全景（東から）

2　第７次調査　ＳＤ１溝跡（南東から）

写真図版２

3　第７次調査　ＳＤ２溝跡（北東から）

4　第８次調査　調査区全景（西から）

5　第９次調査　ＳＤ１堀跡（北西から）

写真図版３

6　第10次調査　ＳＤ１溝跡（南東から）

7　第11次調査　A区東壁断面（南西から）

8　第11次調査　B区東壁断面（南西から）

写真図版４

Ⅴ　南小泉遺跡第65～66次発掘調査報告

1　調査要項

遺　跡　名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号登録01021）
調 査 地 点	第65次：仙台市若林区南小泉４丁目58番９、61番３ （平成23年６月15日届出、H23教生文第106－59号回答） 第66次：仙台市若林区南小泉２丁目40－43、40－104 （平成23年７月５日届出、H23教生文第106－82号回答）
調 査 期 間	第65次：平成23年９月26日～29日　　第66次：平成23年８月１日～５日
調 査 面 積 (調査対象面積)	第65次：30㎡（86.95㎡）　　第66次：16.0㎡（51.39㎡）
調 査 原 因	個人住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員	第65次：専門員　結城慎一　　文化財教諭　吉野　信　佐藤洋平 第66次：専門員　結城慎一　　主事　小泉博明　　文化財教諭　吉野信　石山智之

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より提出された、個人住宅建築工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出について」に対して、文化財保護法第93条に基づき実施した。確認調査を実施したところ、各調査区で遺構が検出されたため、引き続き本発掘調査を実施した。調査区はいずれの調査も住宅建築範囲内に設定した。

適宜、平面・断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

第１図　調査区の位置

3　遺跡の位置と環境

南小泉遺跡は、仙台市の東部、ＪＲ仙台駅から東南へ約3.5㎞の地点に位置する。広瀬川と名取川の合流地点から北へ約３㎞の場所にあり、その自然堤防上に立地する。標高は遺跡西側で約13m、東側で約7.5mと、西高東低の地形となっている。(42頁第１図参照)

本遺跡は、東西約２㎞、南北約１㎞の範囲におよび、市内でも最大級の規模を持つ。遺跡内部には遠見塚古墳を含み、周辺には、若林城跡、養種園遺跡、法領塚古墳、猫塚古墳、蛇塚古墳などが分布する。

発掘調査は、これまで64次にわたり行われ、縄文時代から近世にかけての複合遺跡として理解されている。特に、周辺の古墳との関連性から古墳時代の集落として、本遺跡約１㎞北西の陸奥国分寺、国分尼寺との関連性から古代における集落として、本遺跡は重要といえる。

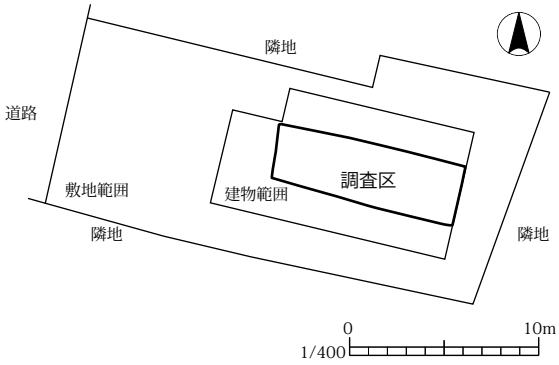
4　第65次調査

1）基本層序

Ⅰ層：均質なにぶい黄褐色（10ＹＲ４/３）のシルトで、旧畑地耕作土である。層厚は、20～30㎝である。

Ⅱ層：均質な灰黄褐色（10ＹＲ５/２）のシルトで、旧畑地耕作土である。層厚は、20㎝程度である。

Ⅲ層：層相から３層に細分される。Ⅲａ層は、橙色（7.5ＹＲ６/６）のシルトで、灰黄褐色シルトをブロック状に含む。調査区中央で確認した。Ⅲｂ層は、均質な浅黄橙色（7.5ＹＲ８/４）のシルトである。調査区西半部で確認した。Ⅲｃ層は、しまり、粘性ともにない、灰褐色（7.5ＹＲ６/２）の砂質シルトである。調査区東部で確認した。Ⅲａ層上面が遺構掘り込み面である。



第２図　第65次　調査区配置図

2）発見遺構と出土遺物

Ⅲ層上面で、土坑３基が検出された。遺物は、遺構検出面や遺構堆積土などから土師器、須恵器、陶器、石製品が出土している。

（１）土坑

ＳＫ１土坑

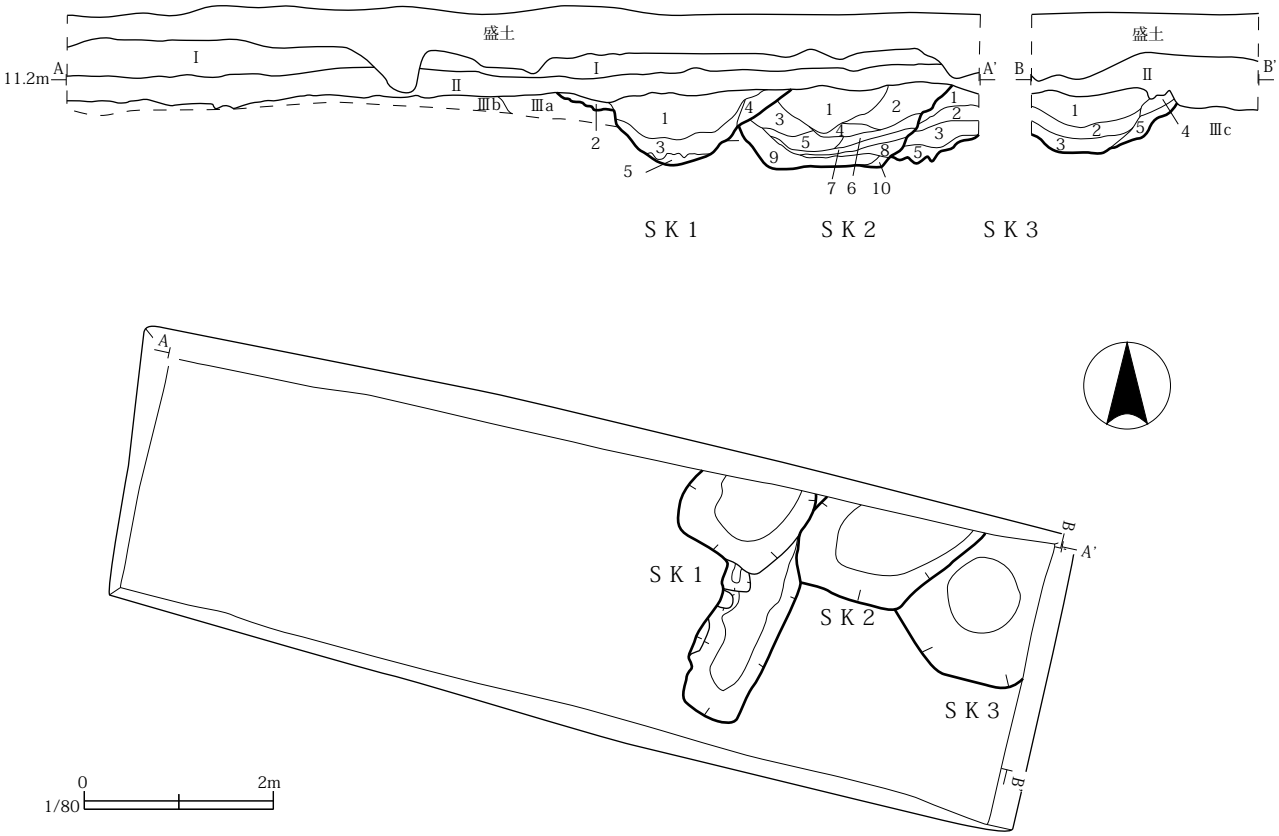
調査区東部に位置する。ＳＫ２土坑と重複し、これよりも新しい。一部の検出に留まることから平面形は不明であるが、規模は東西1.20m、南北0.90m以上で、長軸は南北方向を示す。深さは、調査区北壁断面で約80㎝である。断面形はＵ字形を呈する。堆積土は５層に細分され、黄褐色のシルトを含む黒褐色や灰黄褐色などのシルトで、いずれも自然堆積土である。また、南側に深さ約20㎝、東西約80㎝×南北約200㎝の隅丸長方形の平面形を呈する部分が付属する。堆積土からＳＫ１土坑と同一の遺構と考えられる。

遺物は、土師器甕、須恵器坏（第４図－２）が出土している。

ＳＫ２土坑

調査区東に位置する。ＳＫ１土坑、ＳＫ３土坑と重複する。ＳＫ１土坑よりも古く、ＳＫ３土坑よりも新しい。一部の検出に留まることから平面形は不明であるが、規模は東西約1.30m、南北1.00m以上の楕円形を基調とするものと考えられる。深さは、調査区北壁断面で約80㎝である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は10層に細分され、黄褐色などのシルトを含む灰黄褐色などのシルト、砂質シルトなどで、いずれも自然堆積土である。

遺物は、在地産壺（第４図－３）、茶臼（第４図－１）が出土している



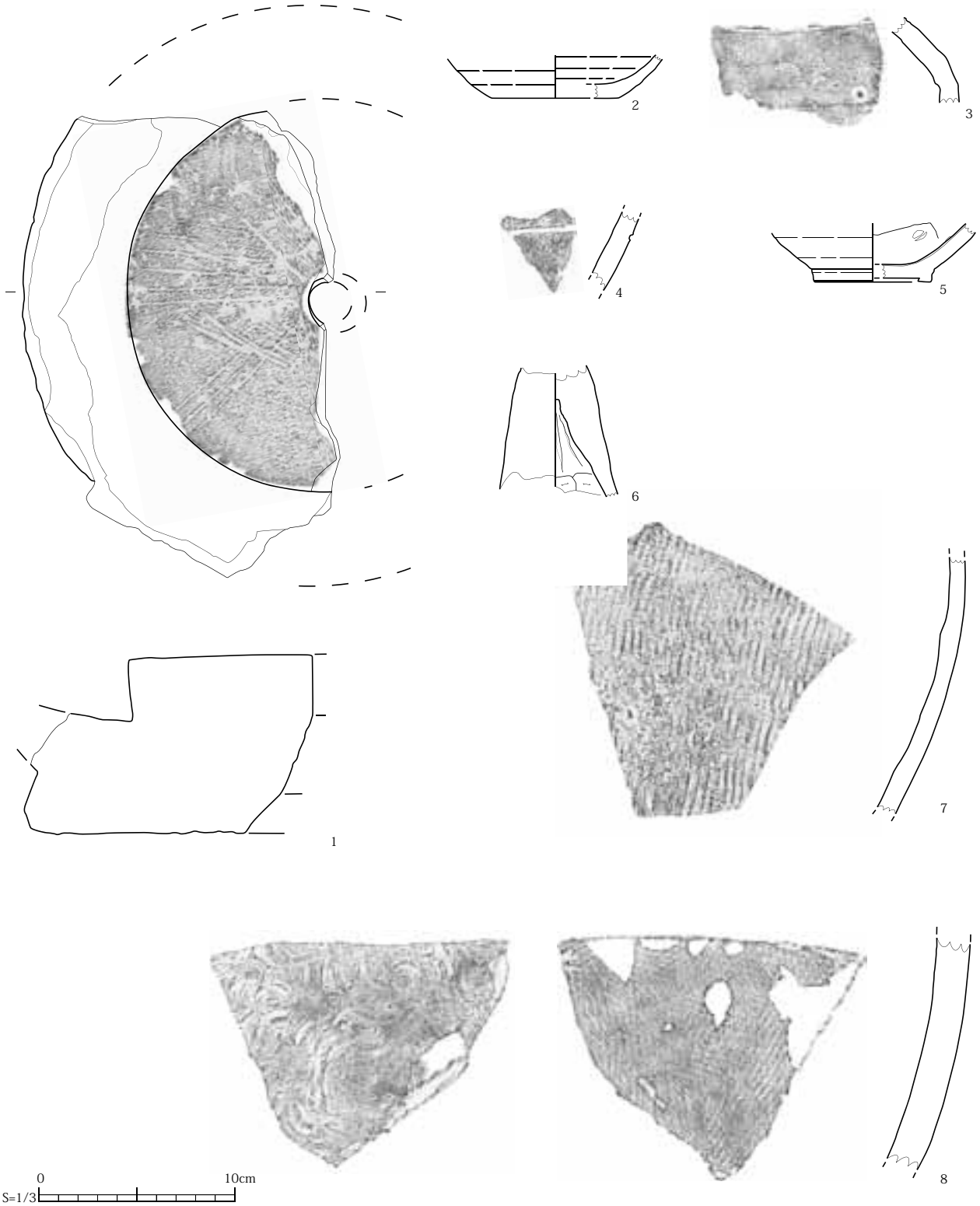
遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等
Ⅰ		10YR４／３にぶい黄褐色シルト	なし	なし	均質　　畑地耕作土
Ⅱ		10YR５／２灰黄褐色シルト	なし	なし	均質　　畑地耕作土
Ⅲa		7.5YR６／６橙色シルト	ややあり	あり	灰黄褐色のシルトをブロック状に含む
Ⅲb		7.5YR８／４浅黄橙色シルト	なし	あまりなし	均質　酸化鉄混入
Ⅲc		7.5YR６／２灰褐色砂質シルト	なし	なし	上面にやや粘性あり
SK１	1	10YR４／２灰黄褐色シルト	なし	なし	黄褐色のシルトを粒状に含む
	2	10YR３／２黒褐色シルト	なし	なし	黄褐色のシルトを若干含む
	3	10YR４／２灰黄褐色シルト	なし	なし	
	4	10YR６／１褐灰色粘土質シルト	あり	あり	酸化鉄粒を若干含む
	5	10YR５／１褐灰色シルト	なし	なし	浅黄橙色のシルトをブロック状に含む
SK２	1	10YR６／４にぶい黄褐色シルト	なし	なし	黄褐色のシルトをブロック状に含む　炭化物を粒状に若干含む
	2	10YR５／４にぶい黄褐色シルト	なし	なし	黄褐色のシルトをブロック状に含む
	3	10YR４／２灰黄褐色シルト	なし	なし	浅黄橙色のシルトをブロック状に含む
	4	10YR６／３にぶい黄橙色砂質シルト	なし	なし	
	5	10YR５／１褐灰色シルト	なし	なし	
	6	10YR５／２灰黄褐色砂質シルト	あり	あり	やや酸化鉄を含む
	7	10YR６／２灰黄褐色粘土質シルト	あり	あり	酸化鉄を若干含む
	8	10YR６／２灰黄褐色シルト質砂	なし	なし	酸化鉄を若干含む
	9	10YR５／２灰黄褐色シルト	ややあり	ややあり	酸化鉄を若干含む
	10	10YR８／３浅黄橙色シルト質砂	なし	なし	
SK３	1	10YR７／２にぶい黄橙色砂質シルト	なし	なし	酸化鉄、炭化物を粒状に若干、含む
	2	10YR７／２にぶい黄橙色砂質シルト	なし	なし	黒色の粘土質シルトを帯状に、酸化鉄粒を若干、含む
	3	10YR４／１褐灰色粘土質シルト	あり	ややあり	にぶい黄橙色のシルトを縞状に、炭化物を粒状に、含む
	4	10YR1.7/１黒色シルト	なし	なし	炭化物を多く、黄褐色のシルトをブロック状に、含む
	5	10YR５／２灰黄褐色粘土質シルト	あり	ややあり	酸化鉄粒を若干含む

第３図　第65次調査　平面・断面図

ＳＫ３土坑

調査区東端に位置する。ＳＫ２土坑と重複し、これよりも古い。一部の検出に留まることから平面形は不明であるが、規模は、東西1.50m以上、南北1.10m以上の楕円形を基調とするものと考えられる。断面形は不明であるが、逆台形状を呈するものと推察され、東壁断面で深さは約80cmである。堆積土は５層に細別され、にぶい黄橙色や黒色などの砂質シルトやシルト、粘土質シルトである。

遺物は、土師器、土師器坏・高坏（第４図－６）・甕、瀬戸美濃産灰釉陶器碗（第４図－５）、常滑産とみられる壺（第４図－４）、在地産鉢（写真図版３－５）・壺（写真図版３－４）が出土している。



図中番号	登録番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴・備考	写真図版
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)		
1	K－1	SK2	石製品	茶臼	臼面径(20.0)	(30.6)	9.1	下臼　　石材:安山岩	3－1
2	E－2	SK1	須恵器	坏	－	(6.4)	(2.2)	外面:ロクロナデ　底部ヘラ切り　内面:ロクロナデ	－
3	I－1	SK2	陶器	壺か	－	－	－	在地(白石窯)　沈線1条	3－2
4	I－3	SK3	陶器	壺	－	－	－	常滑か　沈線1条　13Cか	3－3
－	I－5	SK3	陶器	壺	－	－	－	在地	3－4
－	I－4	SK3	陶器	鉢	－	－	－	在地　内面被熱・煤状付着物　13c前半～14c後半	3－5
5	I－2	SK3	施釉陶器	碗	－	5.9	(2.5)	瀬戸美濃　灰釉　16c	－
6	C－1	SK3	土師器	高坏	－	－	－	外面:摩滅　内面:ヘラケズリ	3－6
7	E－3	SK3	須恵器	甕	－	－	－	外面:平行タタキ　内面:無文オサエ	3－7
8	E－1	Ⅲ層上面	須恵器	甕	－	－	－	外面:平行タタキ　内面:同心円状オサエ	3－8

第4図　第65次調査　出土遺物

（２）出土遺物

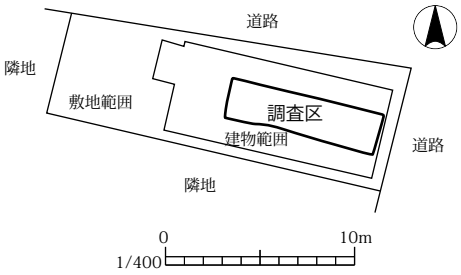
遺物は、土師器、須恵器、陶器、石製品が出土している。ほとんどが遺構の廃絶後の流入もしくは遺棄・廃棄されたものとみられる。

土器類は、小破片が主体で、全体の形状を把握できるものはない。

陶器には、瀬戸美濃産灰釉碗、常滑産甕、在地産鉢・壺がある。このうち、ＳＫ３土坑出土の瀬戸美濃産灰釉碗（第４図－５）は16世紀代、在地産鉢（写真図版３―５）は13世紀前半から14世紀前半の年代が与えられる。

石製品には茶臼の下臼がある。安山岩製で、受け皿端部を欠損する。

今回の調査では、遺物の出土量が乏しく破片資料が主体ではあるが、茶臼のような嗜好的な遺物の存在は留意しておきたい。



第５図　第66次　調査区配置図

5　第66次調査

1）基本層序

Ⅰ層：砂を含む黒褐色（10ＹＲ３／４）のシルトで、調査区東半部に分布する宅地化前の畑地耕作土である。層厚は最大で10cm程度である。

Ⅱ層：褐色（10ＹＲ４／６）のシルトで、調査区東半部に分布する比較的均質な宅地化前の畑地耕作土である。層厚は10cm程度である。

Ⅲ層：褐色（10ＹＲ４／４）の均質なシルトで、調査区東半部に分布する畑地耕作土である。ＳＩ１竪穴住居跡、ＳＤ２溝跡を覆う。層厚は10cm程度である。

Ⅳ層：にぶい黄褐色（10ＹＲ５／４）の砂質シルトである。今回の調査における遺構検出面である。

2）発見遺構と出土遺物

竪穴住居跡１軒、溝跡１条を検出した。遺物は基本層、遺構堆積土から土師器、須恵器、金属製品が出土している。

（１）竪穴住居跡

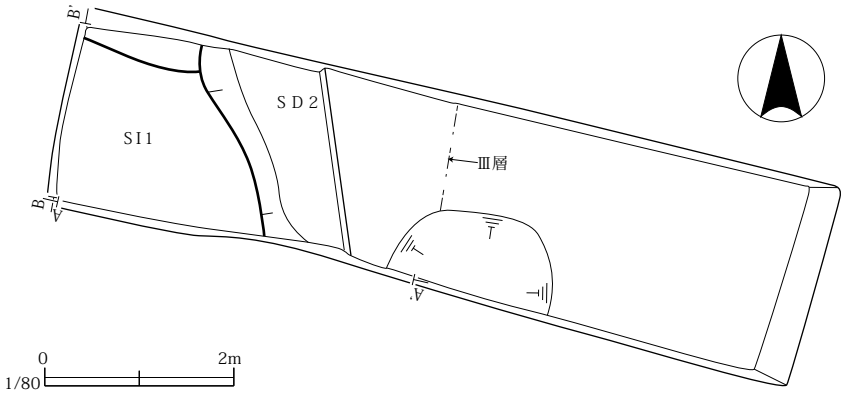
ＳＩ１竪穴住居跡

調査区西半部に位置する。ＳＤ２溝跡と重複し、これよりも古い。一部の検出に留まることから、平面形は不明である。規模は東西7.3m以上、南北1.7m以上である。床面からⅣ層上面までの壁高は、調査区南壁断面で24cmほどである。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。掘方埋土を床面としている。

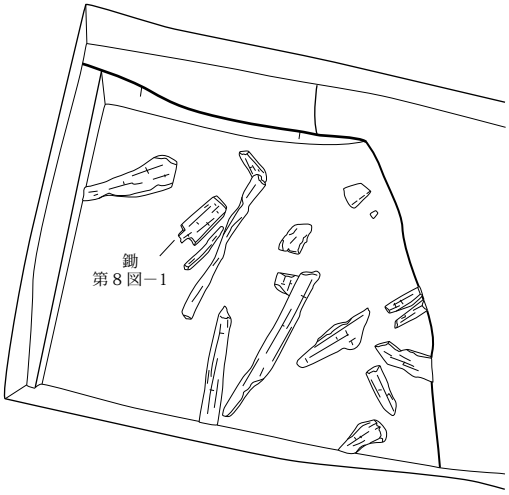
住居内堆積土は６層に細分され、焼土、炭化物を含む暗褐色の粘土質シルトなどで、いずれも自然堆積土である。

柱穴、カマド、周溝などは検出されなかったが、床面で４基の土坑を検出した。いずれも堆積土に焼土や炭化物を含む。なお、床面上から建築部材と木製鋤（第８図－１）が炭化した状態で出土したことから、焼失住居と考えられる。

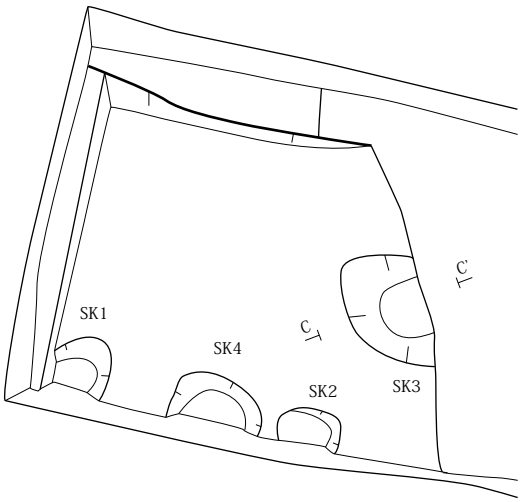
遺物は、検出面から土師器甕、須恵器瓶類（写真図版３－11）、堆積土から土師器坏・甕（第８図－２、３）、不明金属製品、床面直上から土師器甕が出土している。また、ＳＫ１土坑堆積土から土師器坏、ＳＫ３土坑堆積土から土師器甕、住居掘方埋土からは土師器甕がそれぞれ出土している。



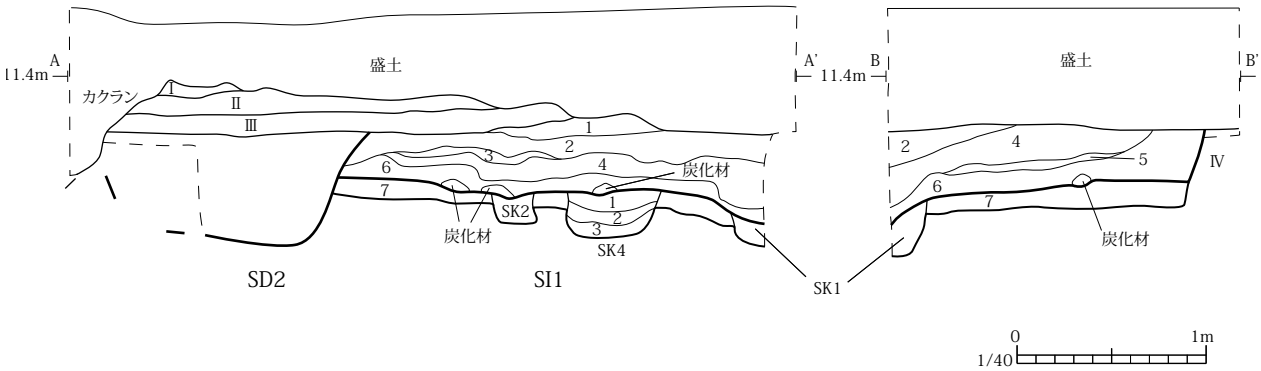
第６図　遺構配置図

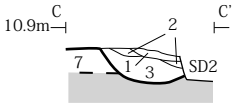


床面上建築部材検出状況



床面検出状況





遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
Ⅰ		10YR３／４黒褐色知ると	ややあり	ややあり	砂粒を含む	耕作土
Ⅱ		10YR４／６褐色シルト	あり	ややあり	炭化物を少量含む　比較的均質	耕作土
Ⅲ		10YR４／４褐色シルト	あり	ややあり	均質	
Ⅳ		10YR５／４にぶい黄褐色砂質シルト	ややあり	なし	均質	
SI１	１	10YR４／２灰黄褐色シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に少量含む　灰黄褐色(10YR５／２)のシルトを小ブロック状に若干含む	住居内堆積土
	２	10YR４／６褐色粘土質シルト	ややあり	あり	炭化物をブロック状に若干含む　暗褐色(10YR３／４)の粘土をブロック状に含む	
	３	10YR２／２黒褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	炭化物と焼土を小ブロック状に含む	
	４	10YR３／４暗褐色粘土	あり	ややあり	炭化物をブロック状に若干含む	
	５	10YR３／３暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物、粘土を含む	
	６	10YR３／４暗褐色粘土	あり	あり	炭化物をブロック状に多く含み、焼土粒を若干含む	
	７	10YR５／４にぶい黄褐色シルト	あり	ややあり	灰黄褐色(10YR５／２)のシルトをブロック状に含む	掘方埋土
	SK１	10YR４／２灰黄褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	炭化物を粒状に、にぶい黄褐色(10YR５／４)の砂質シルトをブロック状に少量含む	
	SK２	7.5Y３／２暗赤褐色粘土	あまりなし	ややあり	焼土粒を多く含み、にぶい黄褐色(10YR５／４)の砂質シルトを粒状にやや多く含む	
	SK３－１	５YR４／４にぶい赤褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	暗褐色(10YR３／３)の粘土をブロック状に含む	
	SK３－２	7.5YR３／４暗褐色粘土質シルト	ややあり	あり	暗褐色(10YR３／４)の粘土をブロック状に含む	
	SK３－３	10YR４／６褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	１層(５YR４／４にぶい赤褐色粘土質シルト)土を含む	
	SK４－１	10YR５／３にぶい黄褐色砂質シルト	ややあり	あまりなし	炭化物を粒状にごく少量含む	
	SK４－２	7.5Y３／２暗赤褐色粘土	あまりなし	ややあり	焼土小ブロック、にぶい黄褐色(10YR５／４)の砂質シルトをブロック状に含む	
	SK４－３	10YR５／３にぶい黄褐色砂質シルト	あまりなし	あまりなし	炭化物を粒状にごく少量含む	
SD２		10YR４／１褐灰色シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状にごく少量含む　比較的均一	

第７図　ＳＩ１竪穴住居跡　平面・断面図

（２）溝跡

ＳＤ２溝跡

調査区西半部に位置する南北方向の溝跡である。ＳＩ１竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。検出長は約2.00ｍで、さらに調査区外南北へ延びる。一部の検出に留まることから、規模は不明であるが、調査区南壁の観察から上端幅1.50ｍほどとみられ、下端幅は0.50ｍ以上である。深さ約60㎝である。断面形は逆台形を呈するものとみられる。堆積土は炭化物を含む比較的均質な褐灰色のシルトである。

遺物は土師器坏・甕、須恵器坏、不明金属製品が出土している。

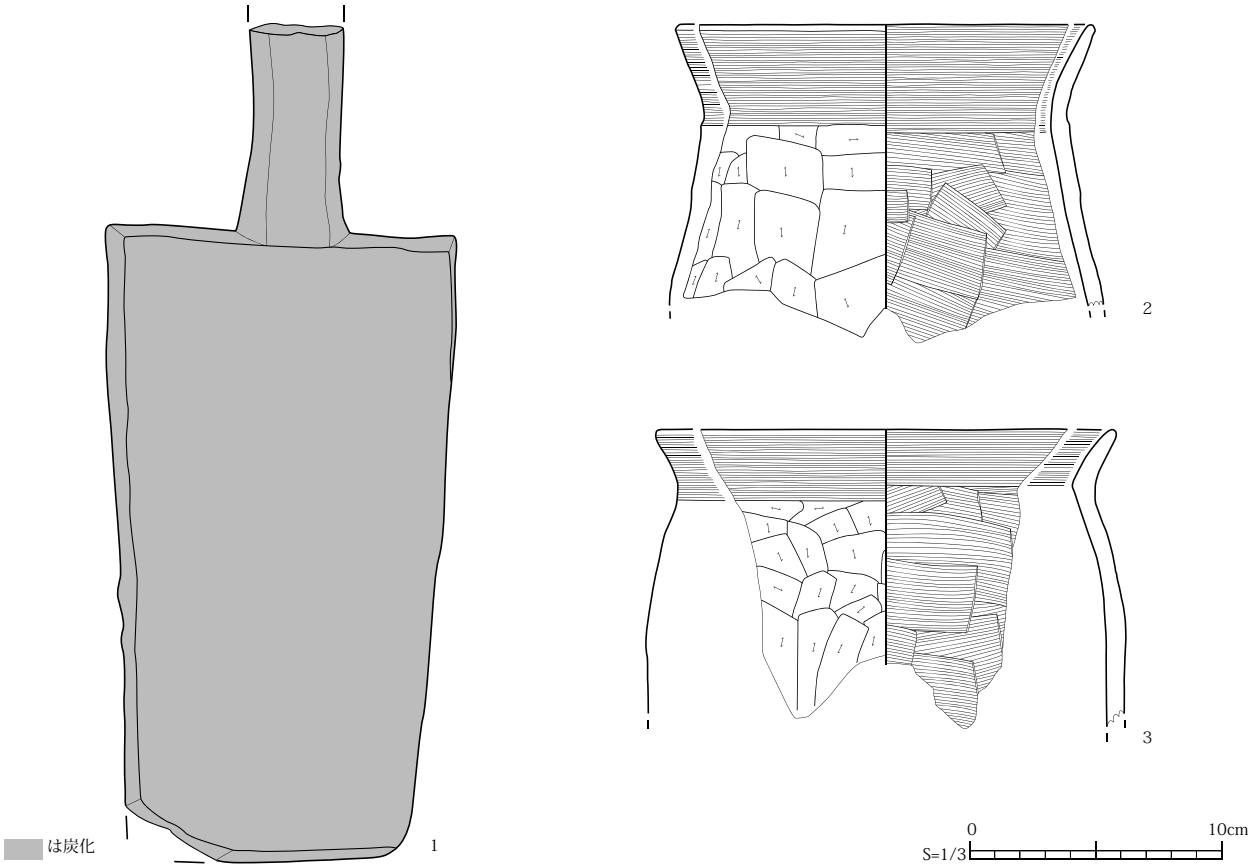
（３）出土遺物

ＳＩ１竪穴住居跡の出土遺物には、土師器坏・甕、須恵器瓶類、木製品がある。

土器類の主体は土師器が占め、製作にロクロは用いられていない。そのうち、土師器甕２点を図示した。いずれも長胴を呈し、胴部の最大径が上半部にあたるとみられる。器形には、頸部に軽い段がつくもの（第８図－２）とつかないもの（第８図－３）がある。外面調整はいずれも縦もしくは斜め方向のヘラケズリで、内面調整はヘラナデを基調とする。これらの特徴から、７世紀後葉から８世紀代の年代が考えられる。このことから、ＳＩ１竪穴住居跡は、この時期の範疇に収まるとみられる。

木製品には、鋤がある。柄と鋤身を一体に作った一木鋤で、平鋤である。柄は欠損している。全体的に炭化し、鋤先に刃先装着の加工や痕跡を確認することはできない。

遺構外出土の遺物には、基本層Ⅲ層出土の土師器坏・甕、須恵器甕がある。



図中番号	登録番号	遺構名	出土層位	種別	器種	法量(cm) 口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	特徴・備考	写真図版
1	－	SI１	床面	木製品	鋤	(33.2)	13.8	－	一木鋤　炭化	－
2	C－１	SI１	3	土師器	甕	(16.4)	－	(12.6)	外面:口縁部ヨコナデ　体部ケズリ　内面:口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	３－９
3	C－２	SI１	1	土師器	甕	(18.1)	－	(11.8)	外面:口縁部ヨコナデ　体部ケズリ　内面:口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	３－10
－	E－１	SI１	検出面	須恵器	瓶類	－	－	－	外面:体部回転ヘラケズリ　内面:体部ロクロナデ	３－11

第８図　第66次調査　出土遺物

6　まとめ

第65次調査地点は、南小泉遺跡の中央部に位置する。土坑３基を検出した。ほぼ同じ場所で掘り直されていることから、使用目的は不明ながら、同じ性格を有する土坑と考えられる。また、遺構の年代は、出土遺物が断片的ではあるが、概ね中世もしくはそれ以降と推定される。

第66次調査地点は、南小泉遺跡の北西部に位置する。竪穴住居跡１軒、溝跡１条を検出した。

ＳＩ１竪穴住居跡は、調査区の制約から全体を把握することはできなかったが、床面を炭化材が覆うことから焼失住居と考えられる。出土土器は、前述した特徴から７世紀後葉から８世紀の年代が考えられる。本竪穴住居跡も概ねこの時期とみられる。

ＳＤ２溝跡は、調査区の制約から規模などを把握することができず、出土遺物も断片的な破片資料であることから、時期や性格について、明らかにすることはできない。

1　第65次調査　完掘全景（西から）

2　第66次調査　SI１検出状況（東から）

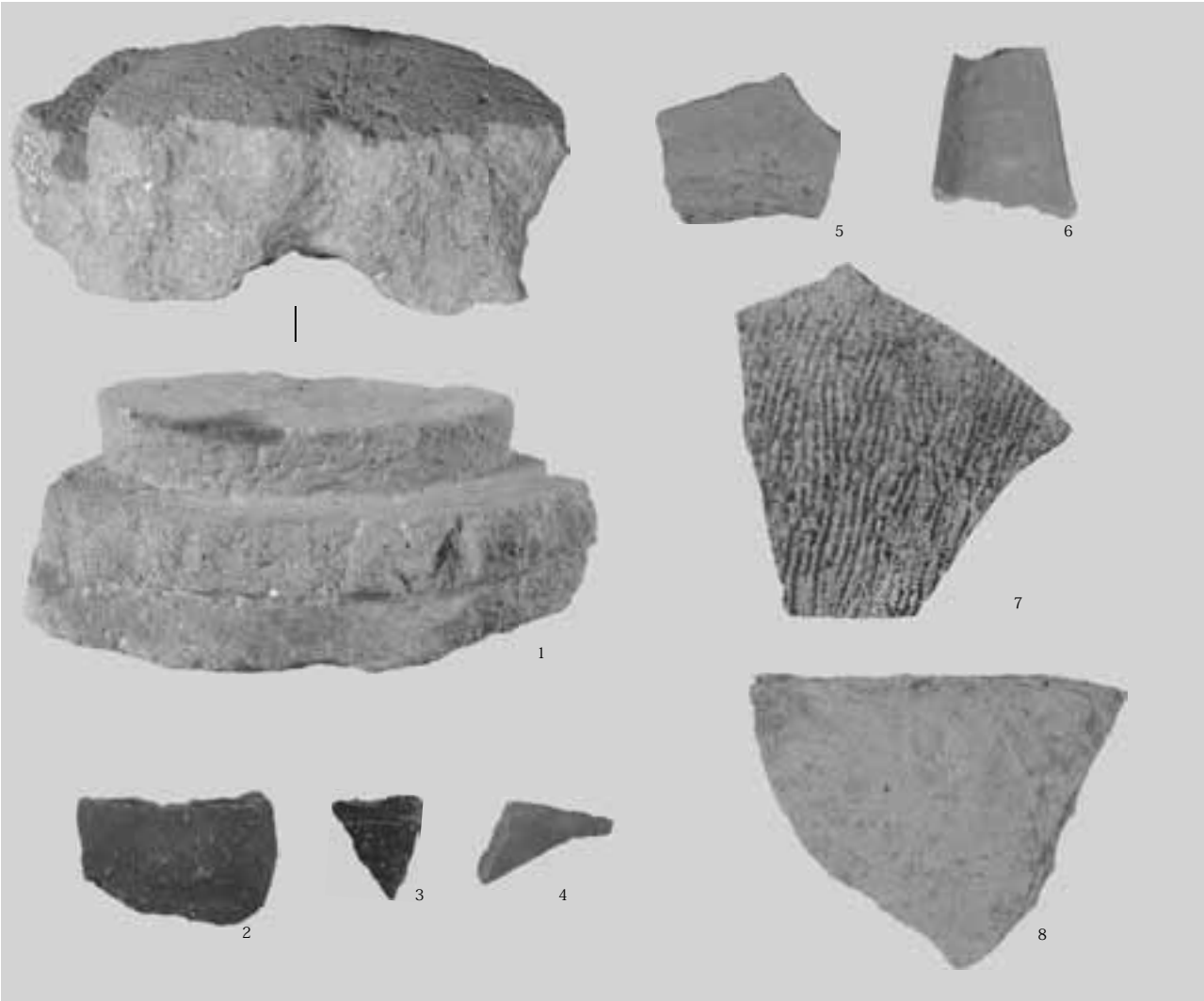
写真図版１

3　SI１炭化材検出状況（東から）

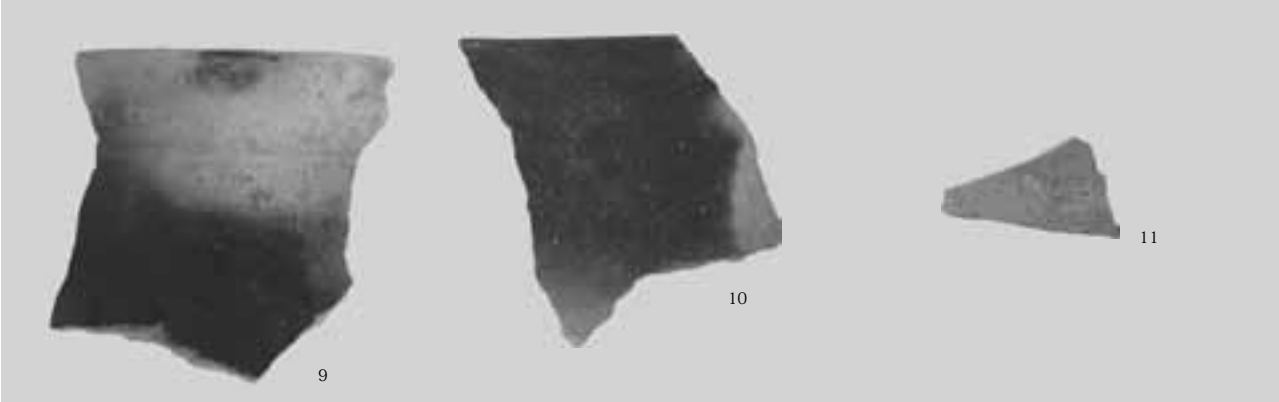
4　SI１床面遺構検出状況（東から）

5　SI１南壁断面（東北から）

写真図版２



第65次調査　出土遺物



第66次調査　出土遺物

写真図版 3

Ⅵ　小鶴城跡第６～７次発掘調査報告

１　調査要項

遺　跡　名　小鶴城跡（宮城県遺跡登録番号01194）

調 査 地 点　第６次：仙台市宮城野区新田３丁目194－3，102－2，100－２の各一部
（平成23年５月10日届出、H23教生文第106－20号回答）
第７次：仙台市宮城野区新田３丁目37－14
（平成23年８月２日届出、H23教生文第106－119号回答）

調 査 期 間　第６次：平成23年６月29日　　第７次：平成23年８月29日

調 査 面 積（調査対象面積）　第６次：27㎡（105.21㎡）　第７次：22.2㎡（76.18㎡）

調 査 原 因　個人住宅建築工事

調 査 主 体　仙台市教育委員会

調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係

担 当 職 員　第６次：主事　廣瀬真理子　文化財教諭　佐藤洋平
第７次：主事　廣瀬真理子　文化財教諭　吉野　信　佐藤洋平

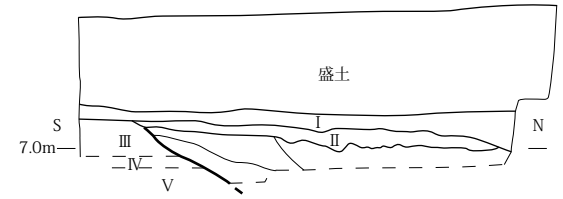
２　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より提出された、個人住宅建築工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出について」に対して、文化財保護法第93条に基づき実施した。確認調査を実施したところ、各調査区で遺構が検出されたため、引き続き本発掘調査を実施した。調査区はいずれの調査も住宅建築範囲内に設定した。

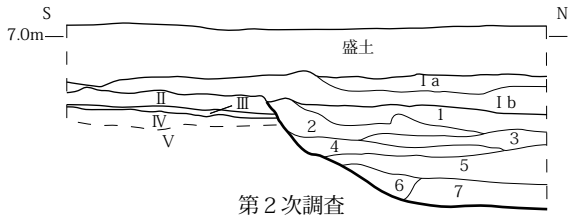
適宜、平面・断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

№.	遺跡名	種別	立地	時代
1	**小鶴城跡**	**城館跡**	**丘陵**	**中世**
2	小鶴遺跡	散布地	自然堤防	平安
3	善応寺東横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
4	善応寺横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
5	燕沢公園窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳･奈良
6	大蓮寺窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳･奈良
7	土手前瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	古代
8	安養寺下瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	古代
9	安養寺下囲瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	平安
10	安養寺中囲瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	古代
11	安養寺囲瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	平安
12	安養寺配水場前窯跡	窯跡	丘陵斜面	古代
13	小田原前田窯跡	窯跡	丘陵斜面	奈良
14	神明社窯跡	窯跡	丘陵斜面	古代
15	神明社裏遺跡	散布地	丘陵	古代
16	神明社東南麓南瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	古代
17	枡江遺跡	窯跡	丘陵斜面	古代
18	二の森窯跡	窯跡	丘陵斜面	平安
19	二の森遺跡	散布地	丘陵斜面	平安
20	与兵衛沼窯跡	窯跡	丘陵斜面	古代･近世
21	庚申前窯跡	窯跡	丘陵斜面	奈良

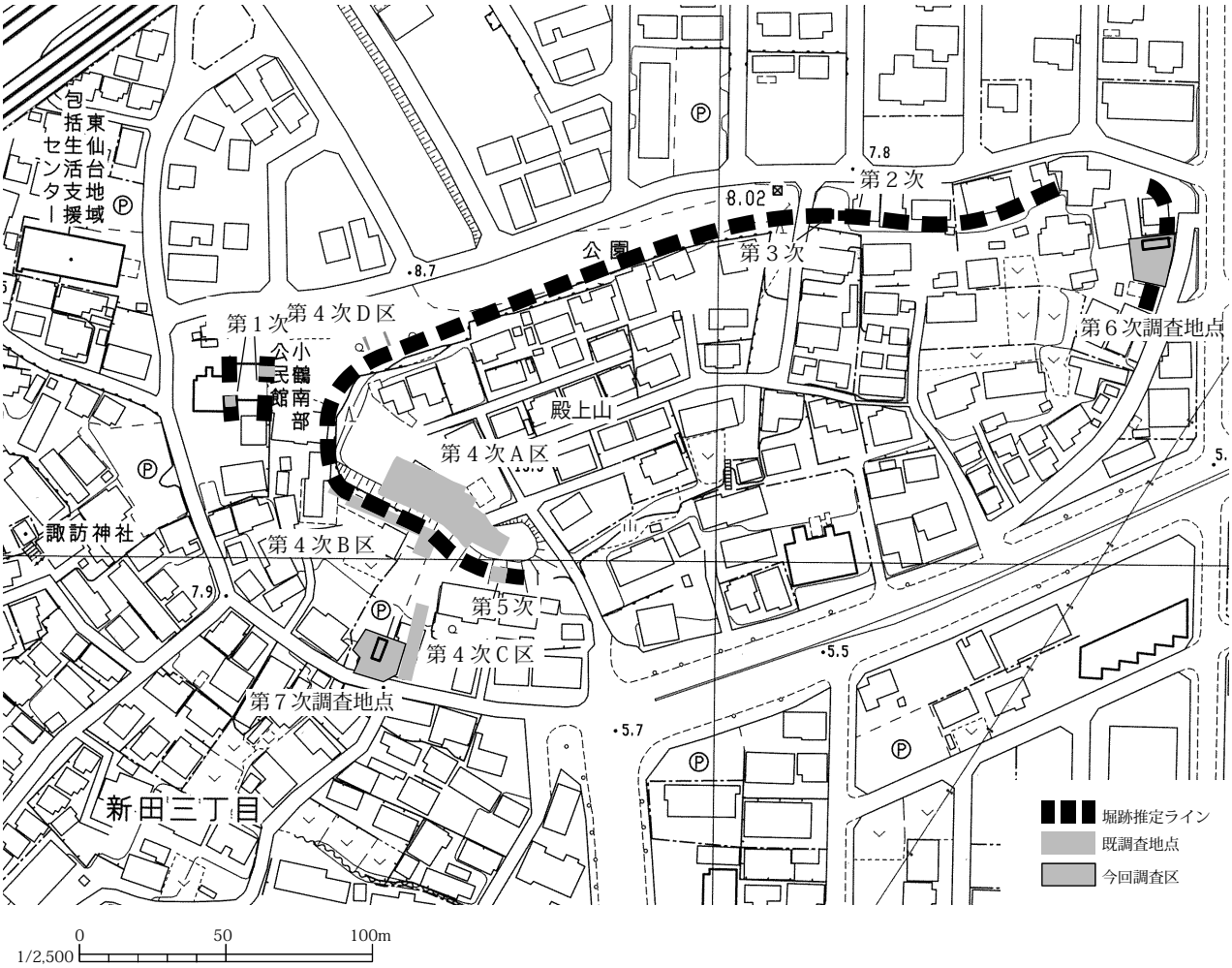
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

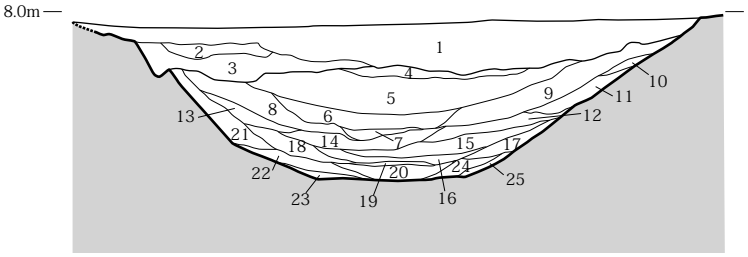


第３次調査

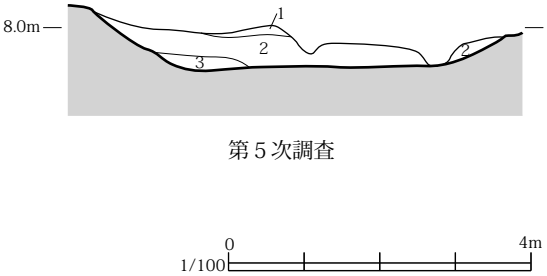


第２次調査





第４次Ｂ区



第５次調査

第２図　調査地点の位置と既調査区位置図

３　遺跡の位置と環境

小鶴城跡は、仙台市の東部、ＪＲ仙台駅の北東約4.3kmの地点に位置する。七北田川によって形成された後背湿地と、そこに突き出た舌状丘陵に立地する。現況における標高は、「殿上山」と呼ばれる丘陵頂部で約16mを測り、丘陵裾部は、遺跡西側で約８m、東側で約６mとなっている。

本遺跡では、これまで５次の発掘調査が行われている。第１次調査では、丘陵西側に確認できる地表顕在遺構のさらに外側で大規模な溝跡が２条検出し、堀跡が３重にめぐる可能性が指摘されている。また、第２、３次調査では丘陵北側で、第４、５次調査では丘陵南側でそれぞれ堀跡が検出され、舌状丘陵を巡る配置で堀跡が確認されている。また、城館跡主体部とみられる丘陵上でも発掘調査が行われ（第４次）、３回の整地事業と掘立柱建物跡群が検出されている。

４　第６次調査

１）基本層序

Ⅰ層：灰オリーブ色（7.5Y５／２）の粘土である。均質で、全体的にグライ化する。しまり、粘性ともに強い。

２）発見遺構と出土遺物

盛土直下で堀跡を１条検出した。遺物は出土していない。

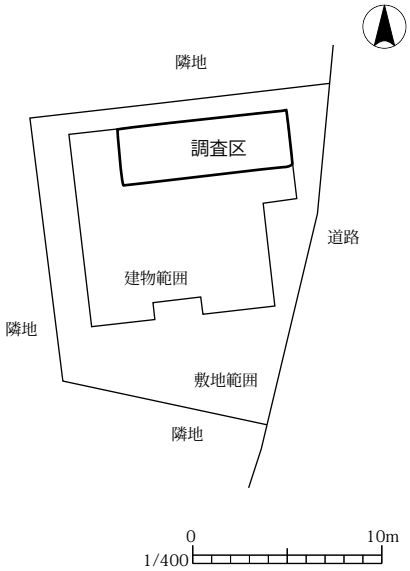
（１）ＳＤ１堀跡

盛土直下で検出された、南北方向の堀跡である。東上端は調査区外で、西上端のみを検出した。検出長は2.2mである。規模は、上幅約6.7m以上、下端幅は不明である。深さは、南壁断面によると１m以上である。断面形は不明であるが、壁はやや急に立ち上がる。

堀跡上端に平行するように、Ⅰ層を掘り残した障壁１条を検出した。検出した上端幅は約34～50cmで、高さは22cm以上である。

堀跡の堆積土は11層に細分され、いずれも自然堆積土である。

遺物は出土していない。



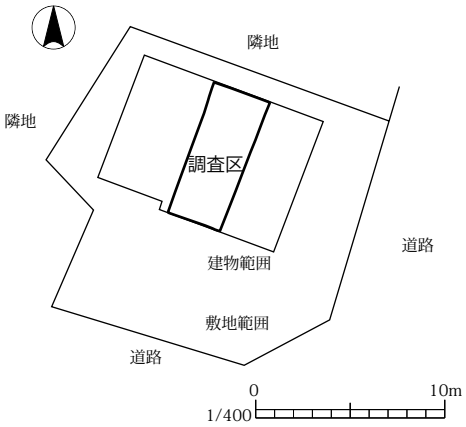
第３図　第６次調査　調査区配置図

５　第７次調査

１）基本層序

Ⅰ層：層相から２層に細分される。Ⅰａ層は、灰黄褐色（10ＹＲ４／２）の砂質シルトで、黒褐色（10ＹＲ３／２）の粘土ブロックを含む。Ⅰｂ層は、暗灰黄色（2.5Ｙ４／２）の砂質シルトで、黒褐色（10ＹＲ３／２）の粘土ブロックを含む。厚さ約50cmである。

Ⅱ層：黒褐色（2.5Ｙ３／２）の砂である。層厚は20cm以上で、遺構検出面である。



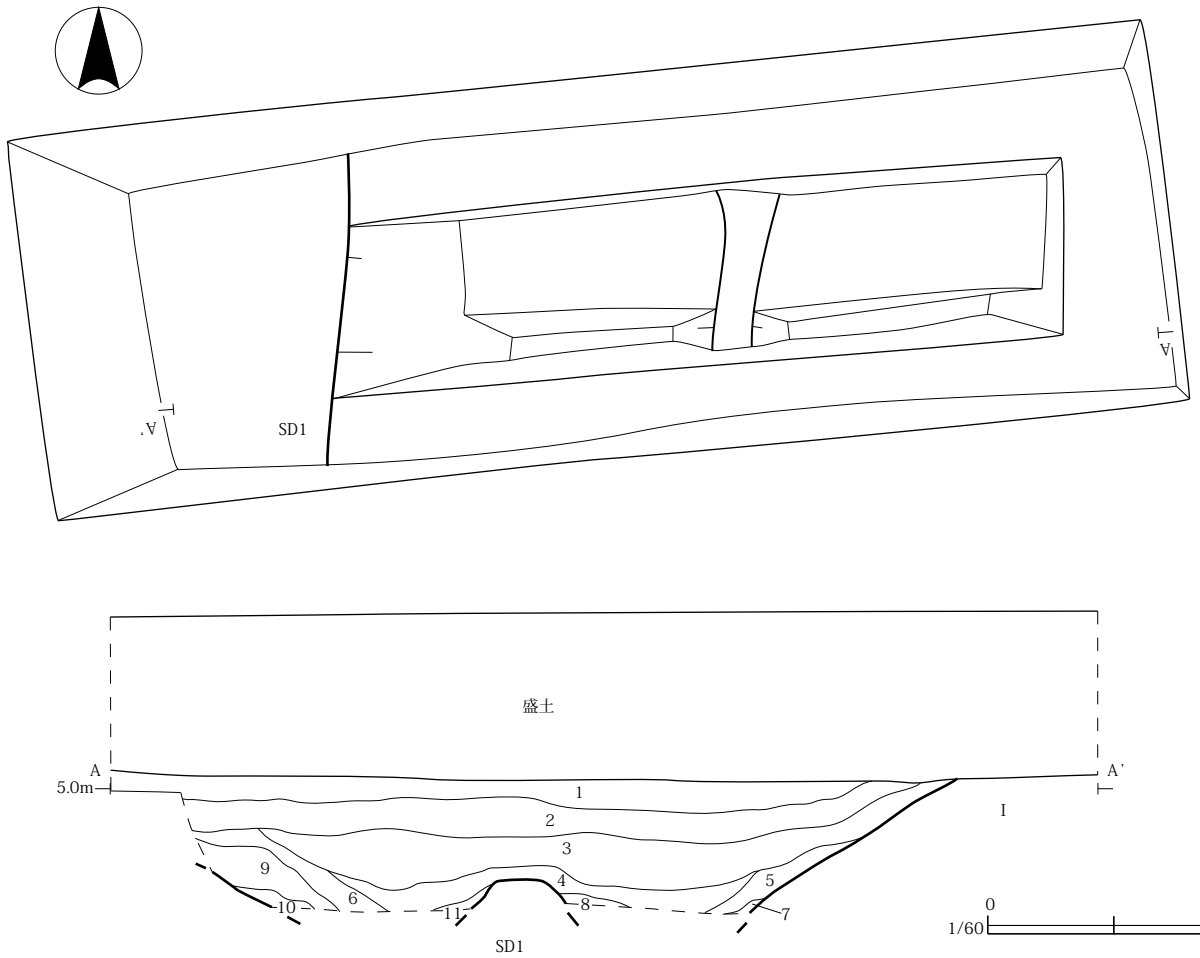
第４図　第７次調査　調査区配置図

２）発見遺構と出土遺物

基本層Ⅱ層上面で、溝跡１条を発見した。遺物は出土していない。

（１）ＳＤ１溝跡

基本層Ⅱ層上面で検出された、東西方向の溝跡である。南側上端は調査区外で、北側上端のみを検出した。検出長は1.4mである。規模は、上端幅約4.95m以上である。現地表面から検出面まで深く、安全管理の面から遺構の掘り込みをしていないため、下端幅、深さ、断面形等については不明である。



遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等
I		7.5Y 5／2 灰オリーブ色粘土	あり	あり	均質　全体的にグライ化する
SD 1	1	10YR 3／2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	細砂を均質に含む
	2	2.5Y 3／3 暗オリーブ褐色粘土	あまりなし	あり	均質な粘土層
	3	5Y 3／2 オリーブ黒色粘土	あまりなし	あり	灰オリーブ色(7.5Y 5／2)の粘土を粒状にごく少量含み、黄灰色(2.5Y 5／1)の粘土を粒状にごく少量含む
	4	2.5Y 3／2 黒褐色粘土	あまりなし	あり	炭化物を粒状にごく少量含む
	5	5Y 4／2 灰オリーブ色粘土	あまりなし	あり	砂を多く含み、灰オリーブ色(7.5Y 5／2)の粘土をブロック状にやや多く含む
	6	2.5Y 3／1 黒褐色粘土	なし	あり	砂を含み、黄灰色(2.5Y 5／1)の粘土を粒状に少量含む
	7	2.5Y 3／1 黒褐色粘土	なし	あり	砂を少量含む
	8	5Y 3／1 オリーブ黒色粘土	なし	あり	灰オリーブ色(7.5Y 5／2)の粘土を粒状、小ブロック状に若干含む
	9	10YR 3／3 暗褐色粘土	ややあり	あり	砂を多く含む
	10	2.5Y 4／1 黄灰色粘土	あまりなし	あり	砂を含み、灰オリーブ色(7.5Y 5／2)の粘土を粒状、小ブロック状に少量含む
	11	5Y 3／1 オリーブ黒色粘土	なし	あり	灰オリーブ色(7.5Y 5／2)の粘土を粒状、小ブロック状に少量含む

第５図　第６次調査　平面・断面図

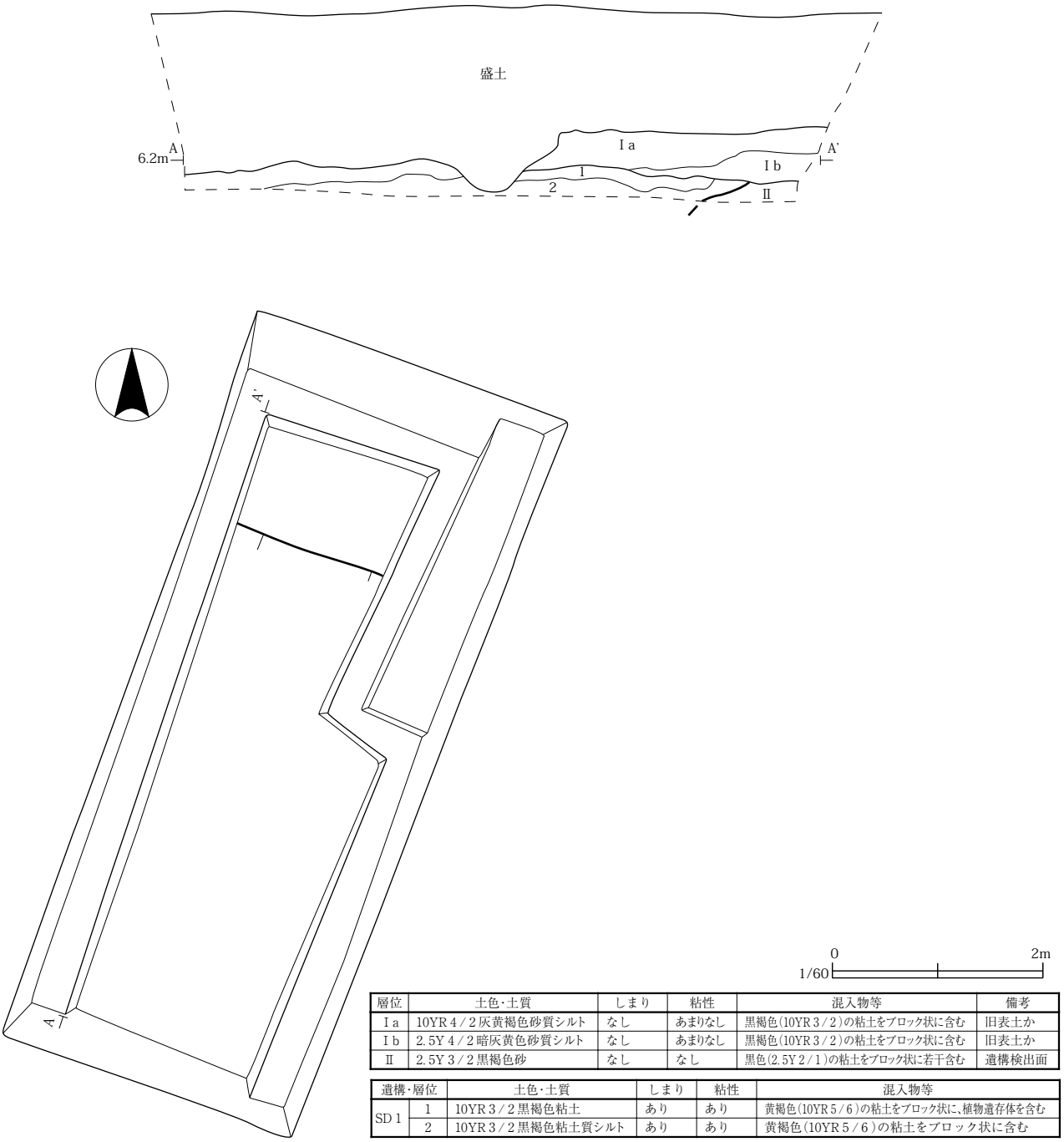
遺物は出土していない。

6　まとめ

第６次調査地点は、小鶴城跡の東端部に位置し、丘陵東側にあたる。南北方向の堀跡を１条検出した。これまで検出された小鶴城に関わる堀跡は、上端幅7.3m、深さ2.2m程度の規模を持ち（第４次調査Ｂ区）、丘陵に沿って配置されている。今回の堀跡は、位置や規模などから小鶴城に関わる堀跡の可能性が高い。

この堀跡は、底面に障壁１条を伴う。小鶴城跡では、障子堀はこれまで確認されたことは無いが、類例は、北目城跡や沖野城跡などがある。特に、北目城跡第１次調査では出土遺物から、築造年代を16世紀後半から17世紀初頭に位置づけている（仙台市史編さん委員会2006）。小鶴城での堀掘削年代についても同様の年代を与えられるのかについては、今後の課題としたい。

第７次調査地点は、小鶴城跡の南端部に位置する。この調査では、溝跡１条を検出した。検出位置や規模、方向な



層位	土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
Ⅰa	10YR４／２灰黄褐色砂質シルト	なし	あまりなし	黒褐色(10YR３／２)の粘土をブロック状に含む	旧表土か
Ⅰb	2.5Y４／２暗灰黄色砂質シルト	なし	あまりなし	黒褐色(10YR３／２)の粘土をブロック状に含む	旧表土か
Ⅱ	2.5Y３／２黒褐色砂	なし	なし	黒色(2.5Y２／１)の粘土をブロック状に若干含む	遺構検出面

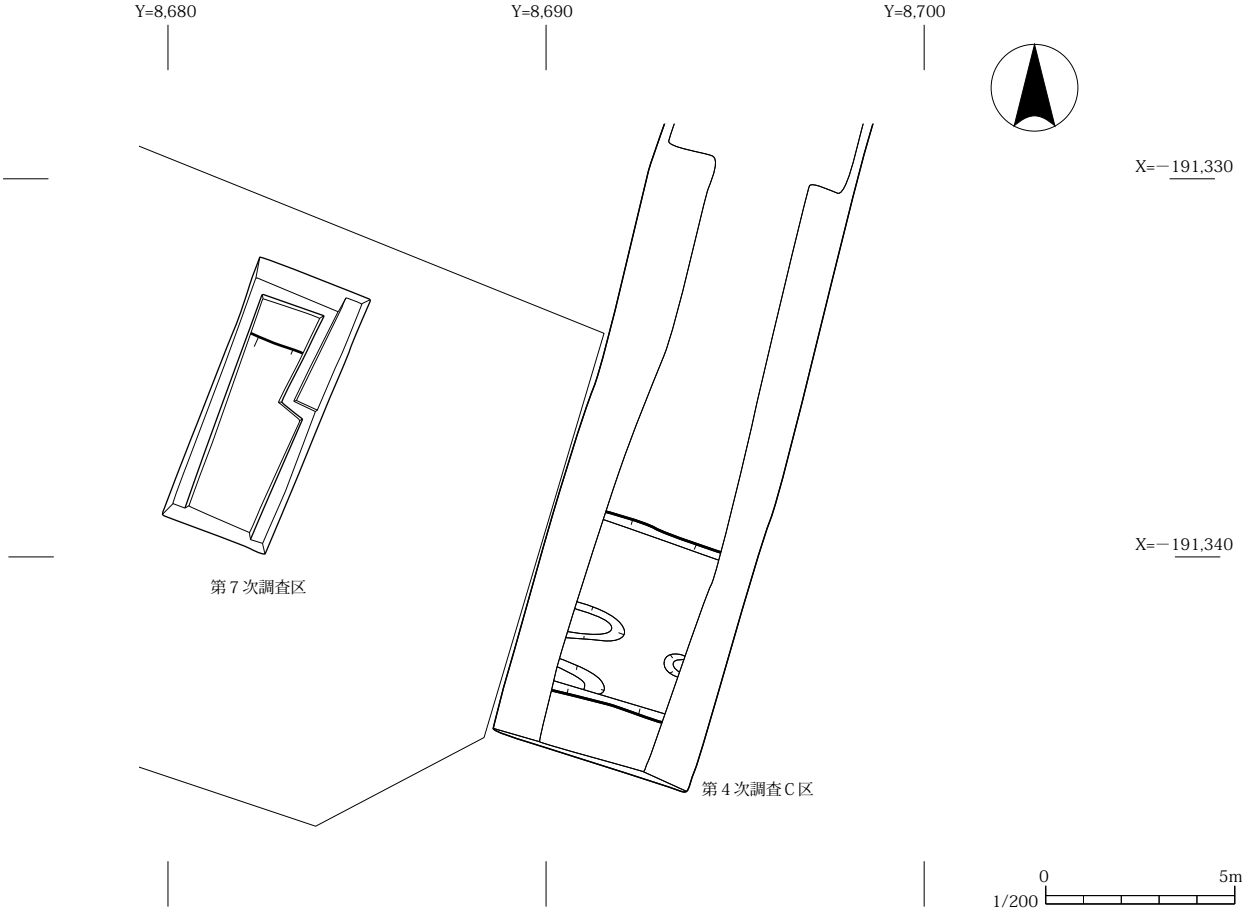
遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等
SD１	1	10YR３／２黒褐色粘土	あり	あり	黄褐色(10YR５／６)の粘土をブロック状に、植物遺存体を含む
	2	10YR３／２黒褐色粘土質シルト	あり	あり	黄褐色(10YR５／６)の粘土をブロック状に含む

第６図　第７次調査　平面・断面図

どから、第４次調査で検出された溝跡と同一の溝跡であると考えられる。第４次調査では、盛土直下で検出しており、掘り込み面が不明であること、また、遺物の出土がなく遺構の年代を明らかにすることができなかったこと、などから、小鶴城に関わる遺構であるかについては断定できなかった。今回の調査でも、遺構の掘り込みを行っていないため、遺構の年代や小鶴城との関連性などは不明であり、今後の課題である。

＜参考文献＞

仙台市史編さん委員会（2006）:「北目城跡」『仙台市史　特別編７　城館』



※仙台市文化財調査報告書第 393 集を元に、今回の調査区を隣地境界線等を基準に合成

第７図　第４次調査Ｃ区と今回調査区

1　第６次調査　全景（北東から）

写真図版１

2　第６次調査　堀跡断面（北西から）

3　第７次調査　遺構検出状況（北東から）

4　第７次調査　ＳＤ１溝跡断面（北東から）

写真図版２

Ⅶ　今泉遺跡第９次発掘調査報告

１　調査要項

遺　跡　名　　今泉遺跡（宮城県遺跡登録番号01235）
調 査 地 点　　仙台市若林区今泉２丁目50－３、50－４、50－５
調 査 期 間　　平成23年２月21日～22日
調査対象面積　　116.34㎡
調 査 面 積　　30㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員　　主事　猪狩俊哉　　文化財教諭　鈴木健弘

２　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成22年12月27日付で、申請者より提出された、個人住宅建築工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出について」に対して、文化財保護法第93条（Ｈ22教生文第114－245号で回答）に基づき実施した。調査は平成23年２月21日に着手し、遺構が検出されたため、引き続き本発掘調査を実施した。住宅建築範囲内に、南北３ｍ×東西10ｍの調査区を設定した。重機により表土およびⅠ～Ⅳ層を除去後、Ⅴ層上面において遺構検出作業を行い、溝跡３条、性格不明遺構１基を検出した。

適宜、平面・断面図（Ｓ＝１/20、１/40）を作成し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

３　遺跡の位置と環境

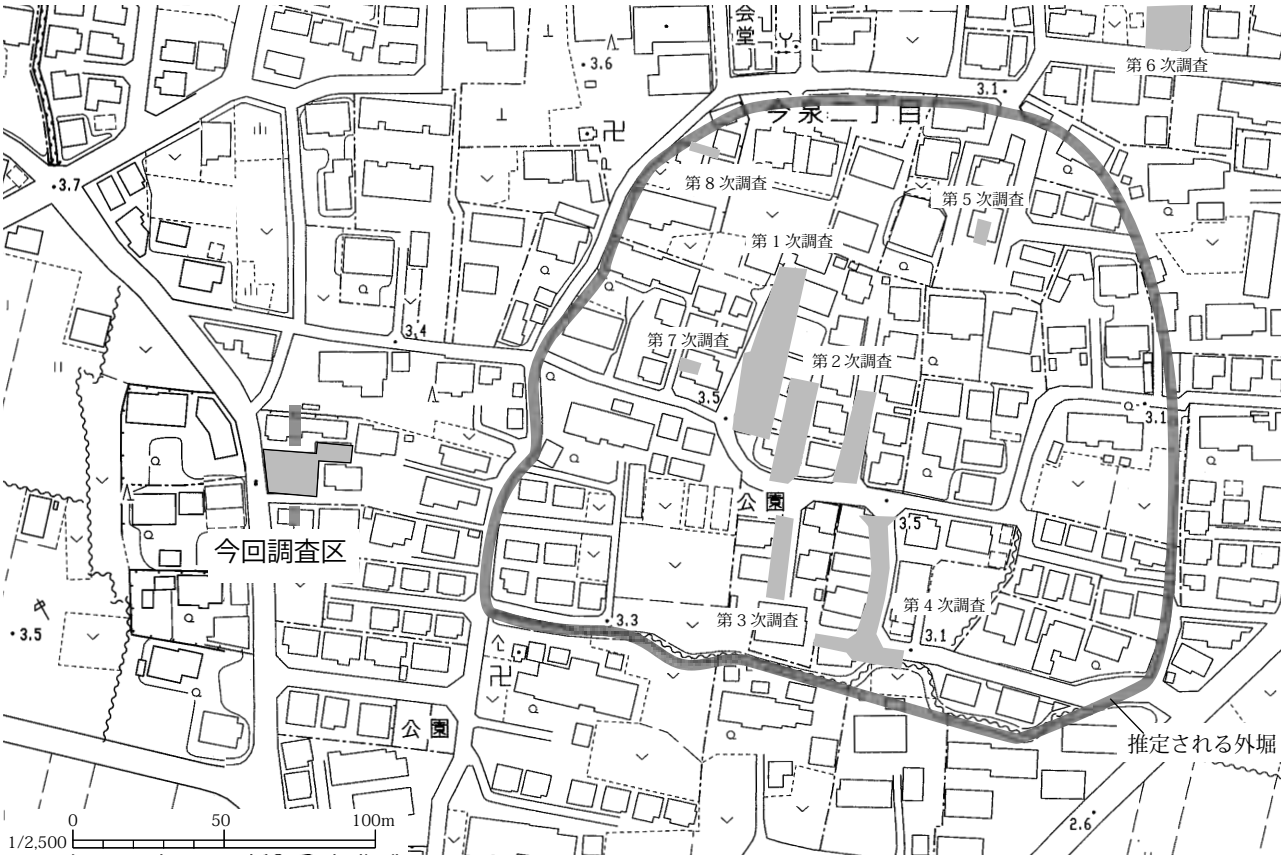
今泉遺跡は、仙台市の南東部、JR仙台駅から南東約6.5㎞の若林区今泉に所在する。地理的には、遺跡の南側を名取川が東流し、その沖積作用によって形成された標高約２～４ｍの自然堤防上に立地する。

文献等から「須田玄蕃」が居住した中世の城館として古くから知られていたが、第１～４次調査の成果から、縄文時代後期から江戸時代にかけての複合遺跡であることが判明している。

これまで、８次にわたる調査が実施されており、近世については大きく２時期の変遷が確認されている。１時期目は、16世紀末頃から17世紀前半頃である。掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡などが発見されている。出土遺物は美濃焼きを主体としている。2時期目は17世紀後半から19世紀頃で、掘立柱建物跡、素掘りや石積みの井戸跡、土坑などが発見されている。出土遺物は、陶磁器の供給地が大堀相馬などとなり、種類も茶臼や漆器等の出土量が減少し、茶器はなくなる。近世の今泉遺跡は、武士から農民の居住地へと変化し、陶磁器の流通などにも変化があったと考えら

番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	**今泉遺跡**	**集落跡、城館跡、包含地**	**自然堤防**	**縄文～近世**
2	河原越遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
3	上屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
4	日辺遺跡	散布地	河川敷	古墳
5	日辺館跡	城館跡	自然堤防	中世
6	高田A遺跡	散布地	自然堤防	古代
7	高田B遺跡	集落跡、建物跡、水田跡、河川跡	自然堤防、後背湿地	縄文～近世
8	藤田新田遺跡	集落跡、方形周溝墓、水田跡	浜堤	弥生、古墳、平安
9	屋敷東遺跡	散布地	浜堤	古墳～古代

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　既調査区の位置と今回の調査区

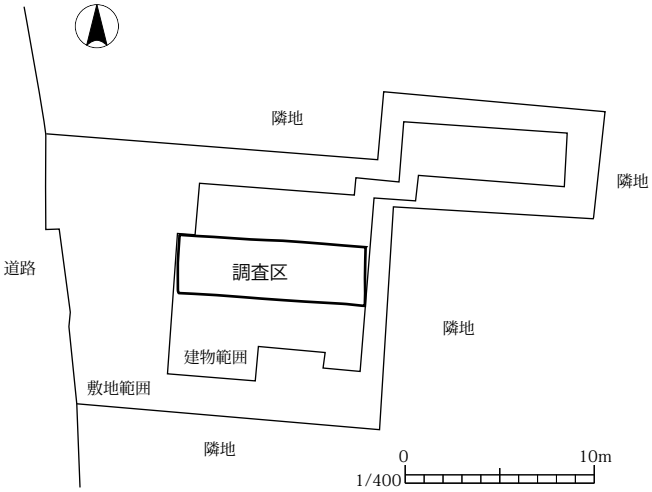
れている。

4　基本層序

Ⅰ層：層相から２層に細分される。Ⅰａ層は褐色(7.5ＹＲ４/３）のシルトで、層厚は10～18cm程度である。Ⅰｂ層は褐色(7.5ＹＲ４/４)のシルトで、いずれも旧耕作土である。層厚は10～22cm程度である。

Ⅱ層：褐色（7.5ＹＲ４/３）の粘土質シルトで、自然堤防を形成する水成堆積層である。層厚は20～30cm程度である。溝跡２条の検出面である。

Ⅲ層：黒褐色（7.5ＹＲ３/２）の砂質シルトである。層厚は８cm程度である。溝跡１条、性格不明遺構１基の検出面である。



第３図　調査区配置図

Ⅳ層：明黄褐色（10ＹＲ６/８）のシルト質粘土で、自然堤防を形成する水成堆積層である。層厚は30cm程度である。

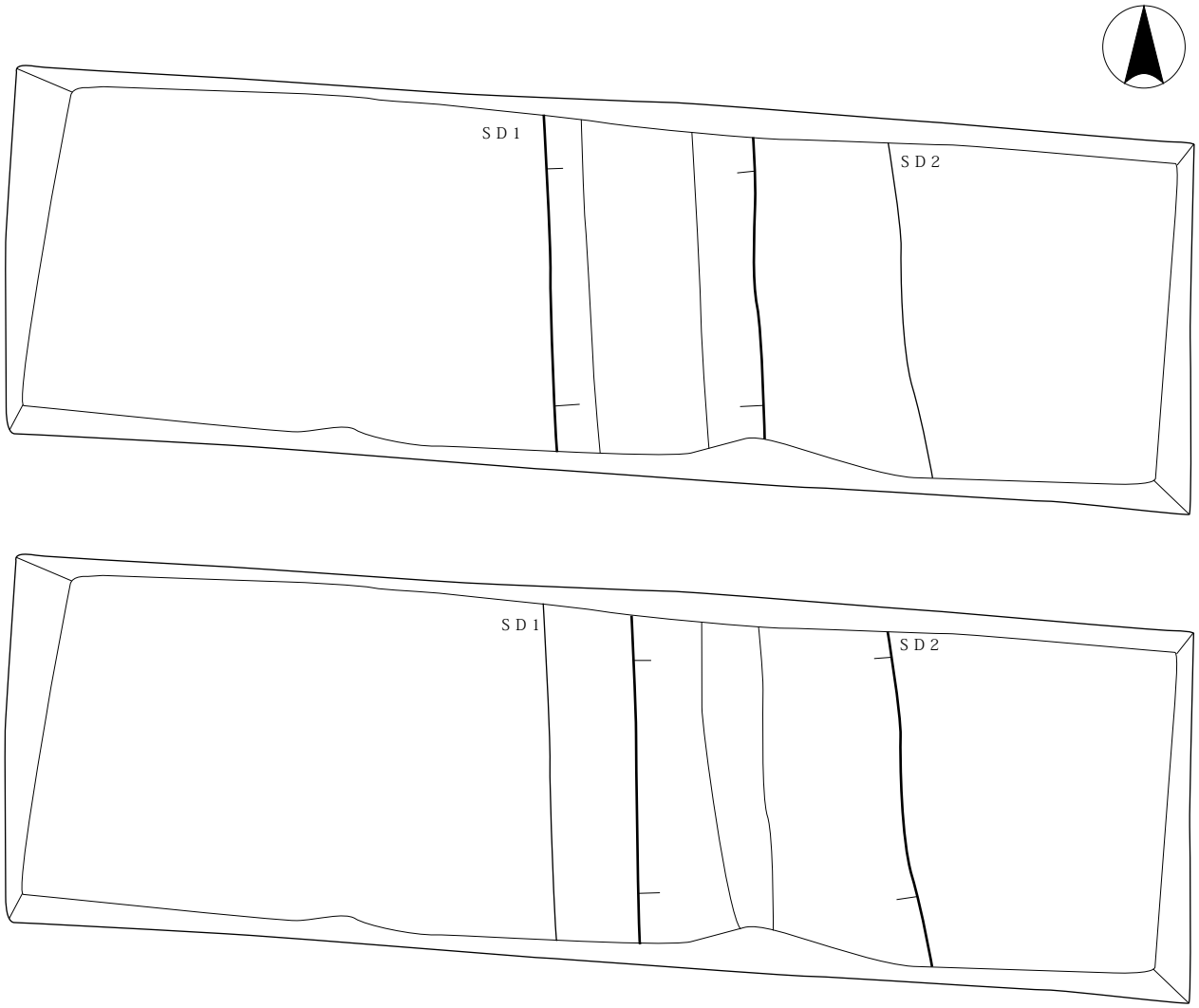
Ⅴ層：灰黄色（2.5Ｙ６/２）のシルト質粘土で、自然堤防を形成する水成堆積層である。

Ⅵ層：橙色（7.5ＹＲ６/６）の砂と灰褐色（7.5ＹＲ６/２）のシルトの互層で、自然堤防を形成する水成堆積層である。

5　発見遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構には、溝跡3条、性格不明遺構1基がある。いずれもⅣ層上面で検出したが、調査区北壁断面の観察により、各遺構の掘り込み面がⅡ層上面とⅢ層上面であることを確認している。

遺物は、遺構堆積土から、弥生土器、土師器、陶器が出土している。



第４図　Ⅱ層上面平面図

1）Ⅱ層上面検出遺構

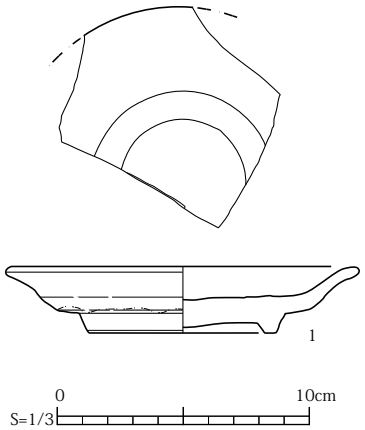
Ⅱ層上面では、溝跡２条を検出している。

（1）溝跡

ＳＤ１溝跡

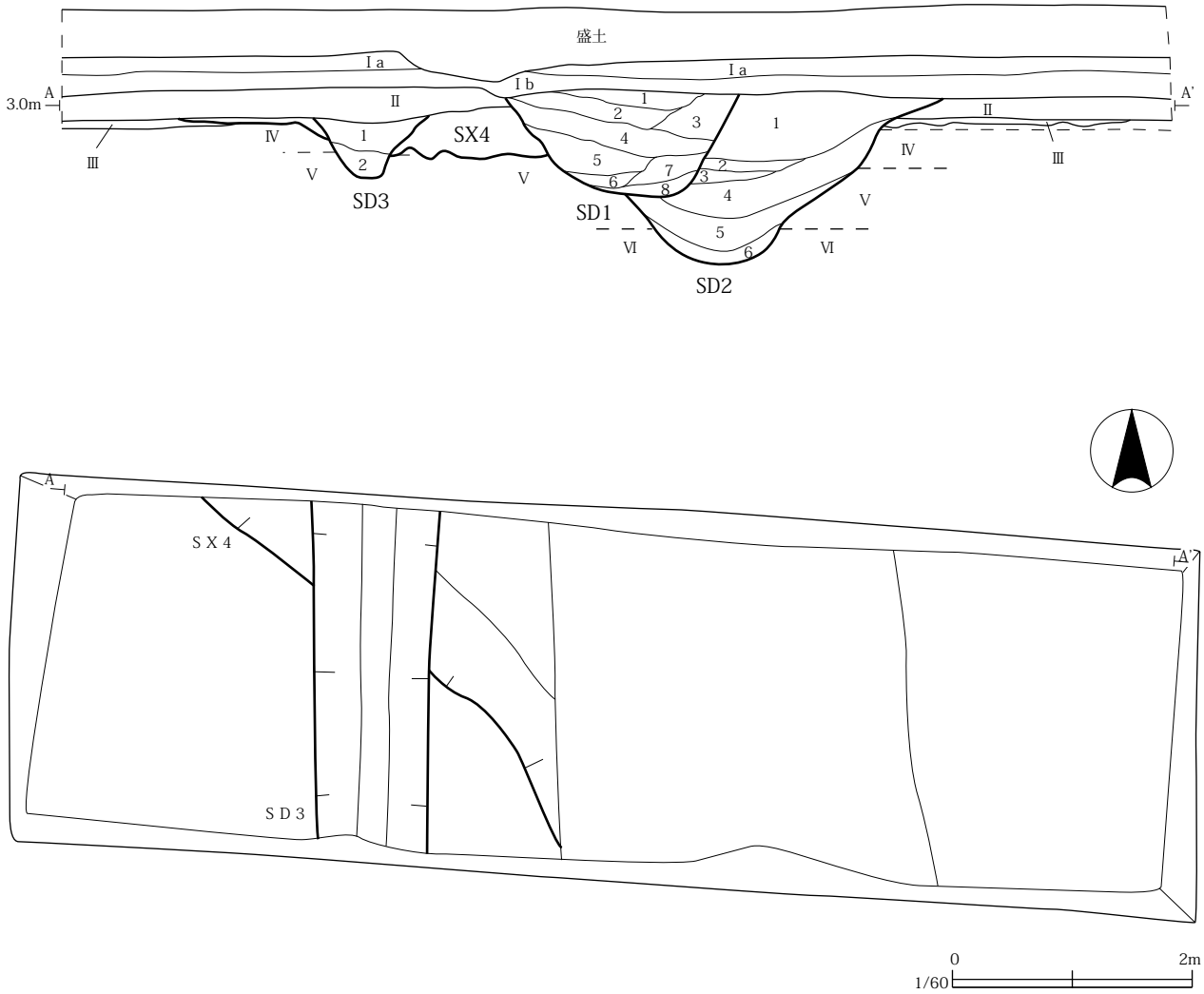
調査区中央部で検出した、南北方向の溝跡である。ＳＤ２溝跡と重複し、これよりも新しい。検出長は約2.9mである。規模は、上端幅約2.0m、下端幅約0.9mで、深さ約90cmである。断面形は上部が開くＵ字状を呈する。堆積土は８層に細分される。１～５層は、灰黄褐色や褐色の粘土質シルト、シルト質粘土で、自然堆積土である。６～８層は、灰オリーブ色や灰黄褐色の砂質シルト、砂である。これらはラミナ状に堆積することから機能時の堆積土と考えられる。

遺物は、６層から土師器、美濃産陶器皿（第５図－１）が出土している。美濃産陶器皿は、特徴から17世紀中頃の年代が考えられる。



図中番号	登録番号	種別	器種	法量(cm)			特徴・備考	写真図版
				器高	口径	底径		
1	I－1	陶器	皿	(2.5)	13.6	(7.4)	瀬戸美濃 見込み：蛇の目釉はぎ	1－1

第５図　ＳＤ１溝跡出土遺物



層位・遺構		土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
Ⅰa		7.5YR４/３褐色シルト	ややあり	弱	一部グライ化する	旧耕作土
Ⅰb		7.5YR４/４褐色シルト	あり	ややあり	炭化物を粒状に含む	
Ⅱ		7.5YR４/３褐色粘土質シルト	あり	あり		
Ⅲ		7.5YR３/２黒褐色砂質シルト	あり	ややあり	底面に凹凸あり	
Ⅳ		10YR６/８明黄褐色シルト質粘土	あり	あり	マンガンを粒状に含む	
Ⅴ		2.5Y６/２灰黄色シルト質粘土	ややあり	ややあり		
Ⅵ		橙色(7.5YR６/６)砂と灰褐色(7.5YR６/２)シルトの互層状堆積				
SD１	1	7.5YR４/３褐色粘土質シルト	あり	ややあり		
	2	7.5YR４/３褐色シルト質粘土	あり	ややあり		
	3	7.5YR５/２灰褐色シルト質粘土	あり	あり		
	4	10YR４/２灰黄褐色粘土質シルト	あり	ややあり		
	5	10YR４/２灰黄褐色シルト質粘土	あり	あり	明黄褐色(10YR６/８)のシルトをブロック状に含む	
	6	7.5Y５/２灰オリーブ砂質シルト	ややあり	弱	灰黄色(2.5Y６/２)の砂を含む	
	7	10YR５/６黄褐色砂	弱	なし		機能時堆積
	8	10YR５/２灰黄褐色砂	弱	なし		
SD２	1	2.5Y５/２暗灰黄色粘土質シルト	あり	ややあり		
	2	7.5Y５/２灰オリーブ粘土質シルト	弱	ややあり		
	3	7.5YR５/２灰褐色砂質シルト	弱	なし		
	4	10YR４/２灰黄褐色粘土質シルト	弱	ややあり		
	5	５Y４/１灰色粘土質シルト	弱	ややあり	植物遺存体を含む層が互層状に堆積する	
	6	オリーブ灰色(2.5GY６/１)砂と暗オリーブ灰色(2.5GY６/１)粘土質シルトとのラミナ状堆積。				
SD３	1	10YR５/２灰黄褐色シルト	あり	弱	下位に灰白色シルトが層状に堆積する	
	2	7.5YR４/２灰褐色シルト質粘土	あり	あり		
SX４	1	7.5YR５/２灰褐色シルト質粘土	あり	あり	底面に凹凸あり	

第６図　Ⅲ層上面平面図・北壁断面図

ＳＤ２溝跡

調査区中央部で検出した、南北方向の溝跡である。ＳＤ１溝跡と重複し、これよりも古い。検出長は約2.9mである。規模は、上端幅2.4m以上、下端幅は0.4～0.5mで、深さ約140cmである。断面形は上部が大きく開くＶ字状を呈する。堆積土は６層に分層される。いずれも自然堆積と考えられる。１～４層は暗黄褐色や灰黄褐色の粘土質シルト、砂質シルトである。５層は植物遺存体を互層状に含む粘土質シルト、６層はオリーブ灰色の砂と粘土質シルトがラミナ状に堆積しており、機能時の堆積土と考えられる。

遺物は出土していない。

2）Ⅲ層上面

Ⅲ層上面では、溝跡１条、性格不明遺構を１基検出している。

（1）溝跡

ＳＤ３溝跡

調査区西部で検出した、南北方向の溝跡である。ＳＸ４性格不明遺構と重複し、これよりも新しい。検出長は約2.9mである。規模は、上端幅約1.0m、下端幅約0.2mで、深さは約50cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は２層に分層される。１層は灰黄褐色のシルトで、下位に灰白色シルトが層状に堆積し、灰白色火山灰の可能性がある。２層は灰褐色のシルト質粘土である。いずれも自然堆積土である。

遺物は、１層から弥生土器が出土している。

（2）性格不明遺構

ＳＸ４性格不明遺構

調査区中央部から西側で検出した、性格不明の遺構である。ＳＤ３溝跡と重複し、これよりも古い。検出長は約4.2mである。規模は、上端幅1.5m以上、下端幅約1.0m以上で、深さは約40cmである。一部の検出であることから、平面形は不明である。断面形は呈し、底面に凹凸が認められる。堆積土は単層で、灰褐色シルト質粘土である。

遺物は、弥生土器が出土している。

6　まとめ

今回調査地点は、今泉遺跡の南西部外縁にあたる。

今回の調査では、Ⅱ層上面で溝跡２条、Ⅲ層上面で溝跡１条、性格不明遺構１基を検出した。

ＳＤ１溝跡からは、17世紀中頃の美濃産陶器皿が出土した。６層の機能時堆積土から出土しており、本溝跡の年代が17世紀中頃まで遡る可能性がある。

ＳＤ３溝跡は、堆積層１層下位に灰白色のシルトが層状に堆積する。視覚的観察ではあるが、灰白色火山灰の可能性がある。そのことからⅢ層上面検出遺構は、10世紀初頭の灰白色火山灰降下以前には廃絶していた可能性がある。

1　遺構検出状況（南東から）

2　遺構完掘状況（南東から）

3　調査区北壁断面（南西から）

写真図版１

Ⅷ　中在家南遺跡第５次発掘調査報告

１　調査要項

遺　跡　名　　中在家南遺跡（宮城県遺跡登録番号01427）
調 査 地 点　　仙台市若林区荒井字中在家29
調 査 期 間　　平成23年８月29～30日
調査対象面積　　186.92㎡
調 査 面 積　　33㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員　　主事　小泉博明　　文化財教諭　吉野　信　佐藤洋平　橋本勇人

２　調査に至る経過と調査方法

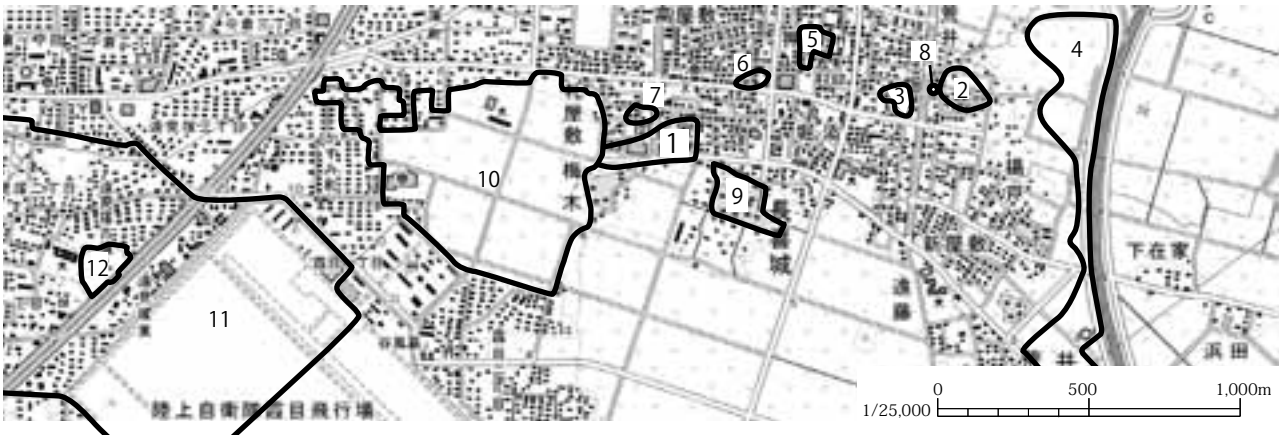
今回の調査は、平成23年６月27日付で、申請者より提出された、「埋蔵文化財発掘の届出について」に対して、文化財保護法第93条（Ｈ23教生文第106－69号で回答）に基づき実施した。調査は平成23年８月29日に着手し、遺構が検出されたため、引き続き本発掘調査を実施した。住宅建築範囲内に、南北11.0ｍ×東西3.0ｍの調査区を設定した。重機により盛土および基本層Ⅰ・Ⅱ層を除去後、基本層Ⅲ層上面で人力により遺構検出作業を行った。その結果、溝跡４条、井戸跡１基、土坑２基、ピット２基を検出した。

適宜、平面・断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

３　遺跡の位置と環境

中在家南遺跡は、仙台市の東部、ＪＲ仙台駅から東南東約5.5㎞の地点に位置する。遺跡は、緩やかに蛇行しながら東西方向に流れる河川跡と、その自然堤防上に立地している。遺跡の範囲は、東西330ｍ、南北約150ｍに及ぶ。

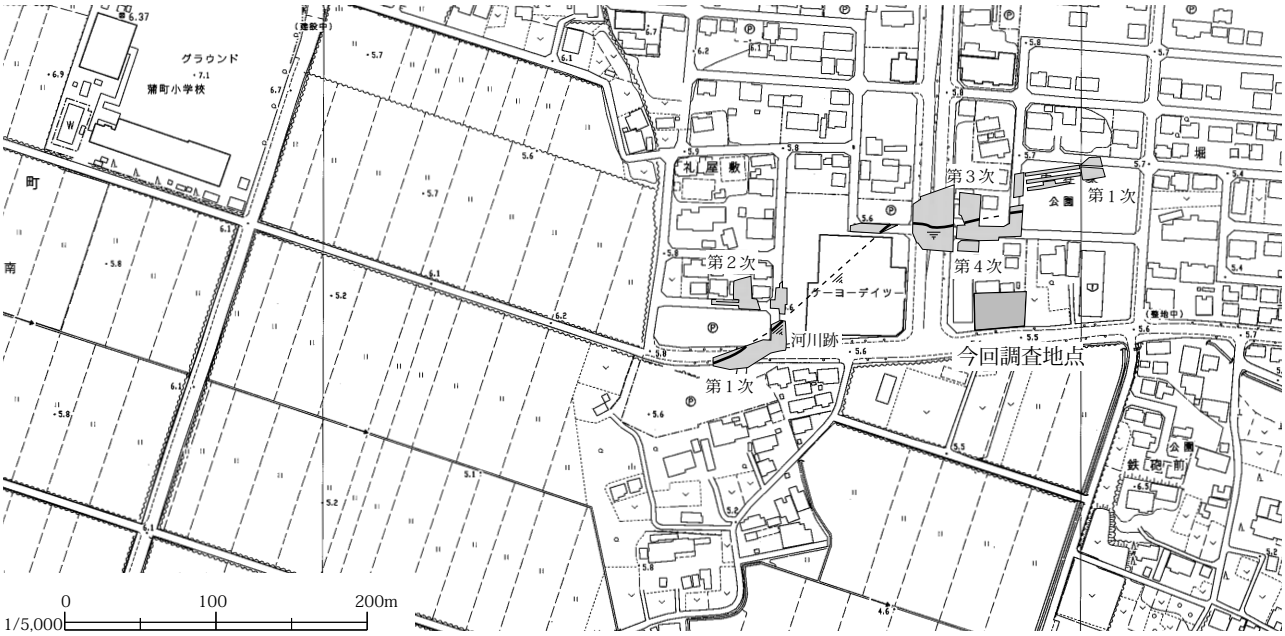
当遺跡では、これまで、４次にわたり本発掘調査が行われている。その結果、遺跡西部では弥生時代中期の遺物包含層や古墳時代前期の方形周溝墓などが、遺跡中央部では、古墳時代と平安時代の竪穴住居跡などが、遺跡東部では弥生時代中期の土壙墓や土器棺墓が検出されている。また、河川跡は、幅25ｍ、深さ約2.5ｍであり、弥生時代から中世にかけての木製品をはじめ、土器や石器、骨角器など豊富な遺物が出土している。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	中在家南遺跡	土器棺墓・土坑墓・方形周溝墓・河川跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	弥生・古墳・平安・中世・近世
2	荒井館跡	城館跡	自然堤防	中世
3	荒井畑中遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代・中世
4	沓形遺跡	生産遺跡	自然堤防	弥生・古墳・古代・中世
5	押口遺跡	河川跡・水田跡・包含地	自然堤防・後背湿地	弥生・古墳・古代・中世・近世
6	高屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代

番号	遺跡名	種別	立地	時代
7	中在家遺跡	包含地	自然堤防	平安
8	荒井畑中東遺跡	包含地	自然堤防	古墳
9	長喜城跡	城館跡	自然堤防	中世
10	仙台東郊条里跡	条里跡	後背湿地	古代
11	南小泉遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	弥生・古墳・古代・中世・近世
12	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　調査区の位置

4　基本層序

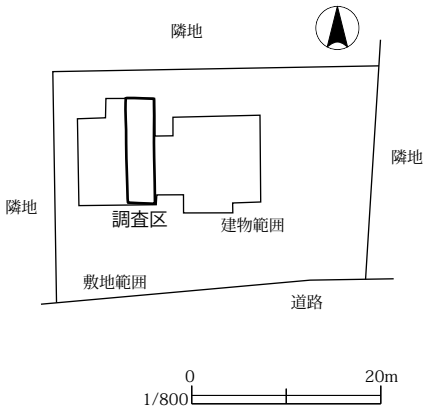
Ⅰ層：層相から４層に細別される。黄灰色、暗黄灰色などのシルトで、旧畑地耕作土である。調査区北部で確認した。層厚は35cm程度である。

Ⅱ層：黒褐色（10ＹＲ２／２）の粘土質シルトである。底面の凹凸が著しく、水田耕作土と考えられる。層厚は10～20cmである。遺構の掘り込み面である。

Ⅲ層：均質な黄褐色（2.5Ｙ５／３）の砂質シルトである。層厚は30cm程度である。今回の調査における遺構検出面である。

Ⅳ層：均質な灰黄褐色（10ＹＲ５／２）の粘土である。層厚は35cm程度である。

Ⅴ層：均質なにぶい黄褐色（10ＹＲ５／４）のしまりのない細砂である。



第３図　調査区配置図

5　発見遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構には、溝跡４条、井戸跡１基、土坑２基、ピット２基がある。遺物は基本層、遺構堆積土から、土師器、須恵器、陶器、石器、石製品、金属製品、動物遺存体が出土している。

１）溝跡

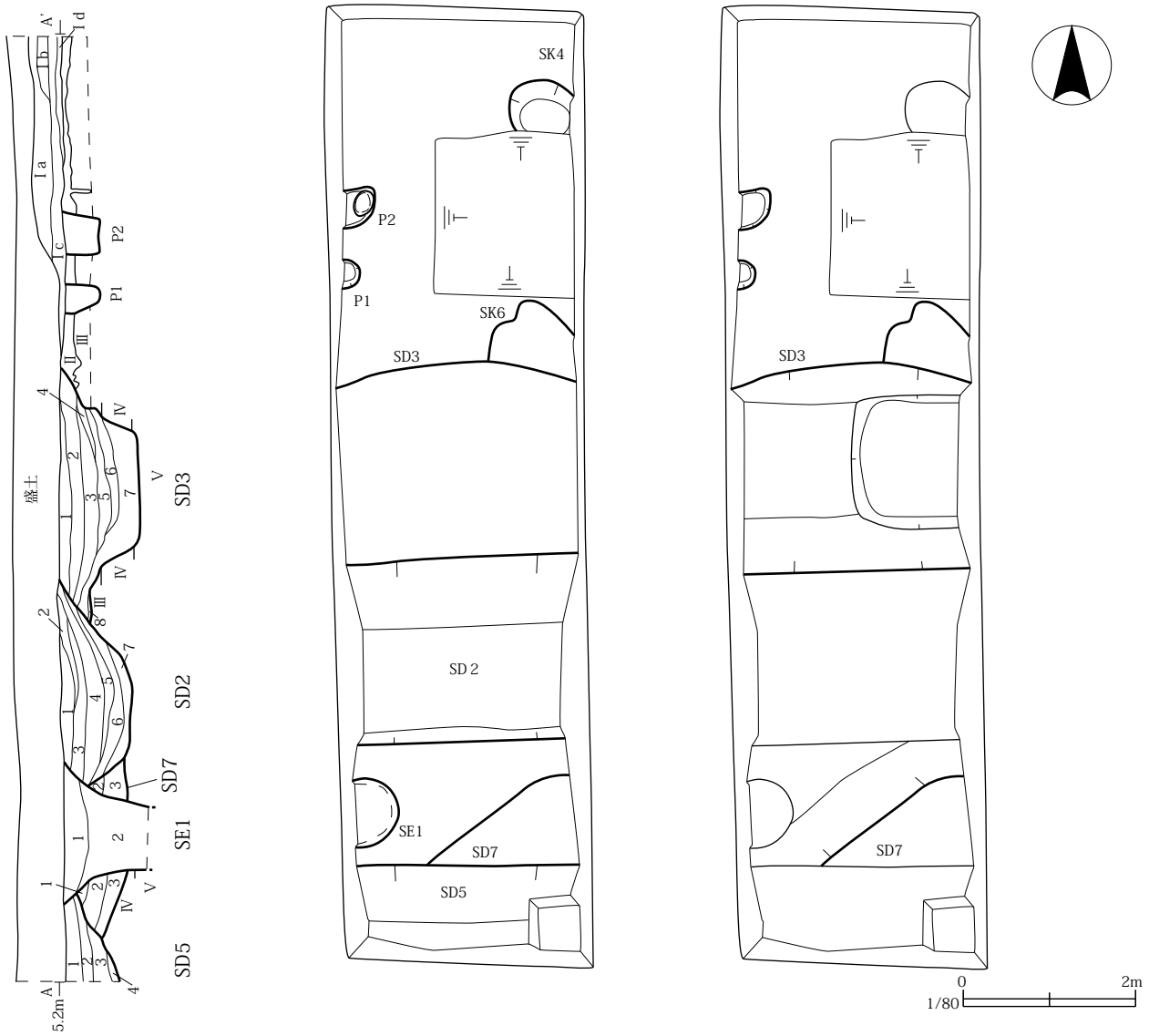
ＳＤ２溝跡

調査区中央部に位置する東西方向の溝跡である。ＳＥ１井戸跡、ＳＤ３・７溝跡と重複し、ＳＤ３・７溝跡よりも新しく、ＳＥ１井戸跡よりも古い。検出長は約2.5mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約3.0m、下端幅約1.2m、深さ80cmほどである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は２層に大別される。上層は３層に細別され、オリーブ褐色や黒褐色などのシルト、粘土で、人為的埋土である。下層は５層に細別され、黒色や黄灰色などの粘土、粘土質シルトで、自然堆積土である。

遺物は、土師器、須恵器甕、砥石（第７図－１）、不明金属製品が出土している。

ＳＤ３溝跡

調査区中央部に位置する東西方向の溝跡である。ＳＤ２溝跡、ＳＫ６土坑と重複し、ＳＤ２溝跡よりも古く、ＳＫ



層位	土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考	層位	土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
Ⅰa	2.5Y 4/1 黄灰色シルト	ややあり	ややあり	均質	畑地耕作土	Ⅱ	10YR 2/2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	Ⅲ層を巻き込む。底面の凹凸が著しい	水田耕作土
Ⅰb	2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト	ややあり	ややあり	均質		Ⅲ	2.5Y 5/3 黄褐色砂質シルト	あり	あまりなし	均質	
Ⅰc	10YR 4/2 灰黄褐色粘シルト	ややあり	ややあり	均質		Ⅳ	10YR 5/2 灰黄褐色粘土	ややあり	あり	均質	
Ⅰd	10YR 4/1 褐灰色シルト	ややあり	ややあり	Ⅱ層をブロック状に含む	天地返しか	Ⅴ	10YR 5/4 にぶい黄褐色細砂	あまりなし	なし	均質	

遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
SE 1	1	10YR 3/4 暗褐色シルト	ややあり	あまりなし	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土をブロック状に少量含む	人為的埋土
	2	2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土を小ブロック状に若干含む	
SD 2	1	2.5Y 4/3 オリーブ褐色シルト	あまりなし	あまりなし	炭化物を粒状にごく少量含む、比較的均質	人為的埋土
	2	10YR 3/3 暗褐色粘土	あまりなし	あり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土をブロック状に若干含む	
	3	10YR 3/2 黒褐色粘土	あまりなし	あり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土をブロック状に含む	
	4	2.5Y 3/2 黒褐色粘土	あまりなし	あり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土を粒状にごく少量含む	自然堆積土
	5	2.5Y 4/1 黄灰色粘土	あまりなし	あり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土をブロック状に含む	
	6	10YR 3/2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土をブロック状に少量含む　植物遺存体を多く含む	
	7	10YR 3/1 黒褐色粘土	なし	あり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土を斑状に含む	
	8	10YR 2/1 黒色粘土	あまりなし	あり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土をラミナ状に含む	
SD 3	1	2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に若干含む	
	2	10YR 3/2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物、灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土を粒状に少量含む	
	3	2.5Y 4/2 暗灰黄色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	黒色(10YR 2/1)の粘土を斑状に含む	
	4	2.5Y 4/2 暗灰黄色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土をブロック状に含む	
	5	2.5Y 3/2 黒褐色粘土	あまりなし	あり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土をブロック状に若干含む	
	6	10YR 3/2 黒褐色粘土	あまりなし	あり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土をブロック状に少量含む	
	7	10YR 2/2 黒褐色粘土	あまりなし	あり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土(壁崩落土)をブロック状に含む	
SD 5	1	10YR 3/3 暗褐色シルト	ややあり	あまりなし	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土を粒状に少量含む	人為的埋土
	2	2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土を粒状にごく少量含む	
	3	2.5Y 3/2 暗褐色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土をブロック状に含む	
	4	2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘土	あまりなし	ややあり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土をブロック状に少量含む	
SD 7	1	10YR 3/3 暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を少量含む	自然堆積土
	2	10YR 3/1 黒褐色粘土	あまりなし	あり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土をブロック状にごく少量含む	
	3	10YR 2/2 黒褐色粘土	なし	あり	灰黄褐色(10YR 5/2)の粘土をブロック状に少量含む	
P 1	1	10YR 3/2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	Ⅲ層をブロック状に含む	
P 2	1	10YR 3/2 黒褐色粘土質シルト	あり	ややあり	Ⅲ層をブロック状にやや多く、にぶい褐色(7.5Y 5/3)の粘土をブロック状にやや多く、含む	

第4図　平面・断面図

６土坑よりも新しい。検出長は約2.5mで、さらに調査区外へ延びる。南側上端がＳＤ２溝跡によって壊されているが、規模は上端幅約2.3m以上、下端幅約1.4m、深さ95cmほどである。断面形は上部が開く逆台形を呈する。底面は東半部が西半部から10cmほどの段をもって低くなっている。堆積土は７層に細分される。黒褐色の粘土などで、いずれも自然堆積層とみられる。

遺物は、土師器、土師器甕、常滑産甕（第６図－１、写真図版３－２、３）、在地産甕（写真図版３－４）・鉢（第６図－２）、山茶碗系片口鉢（写真図版３－６）、蛤歯片刃石斧（第７図－５）・砥石（第７図－２、３）、擦石（第７図－４）、ウマ臼歯（写真図版３－15、16）が出土している。

ＳＤ５溝跡

調査区南端に位置する東西方向の溝跡である。ＳＥ１井戸跡、ＳＤ７溝跡と重複し、ＳＤ７溝跡より新しく、ＳＥ１井戸跡よりも古い。検出長は約2.5mで、さらに調査区外へ延びる。検出は一部であるが、規模は上端幅1.0m以上、下端幅0.2m以上、深さ60cm以上である。堆積土は４層確認した。１～３層は灰黄褐色（10YR５／２）の粘土を粒状、ブロック状に含む暗褐色などのシルトや粘土質シルトで、人為的埋土である。

遺物は、土師器、産地不明擂鉢（第６図－３）が出土している。

ＳＤ７溝跡

調査区中央部に位置する北東―南西方向とみられる溝跡である。ＳＥ１井戸跡、ＳＤ２、５溝跡と重複し、いずれよりも古い。検出長は約2.5mで、さらに調査区外へ延びる。重複のため、上部を大きく壊されているが、規模は上端幅1.5m以上、下端幅0.6m以上である。西壁断面で確認した深さは、75cmほどである。堆積土は３層に細分される。灰黄褐色（10YR５／２）の粘土や炭化物などを少量含む黒褐色の粘土などで、いずれも自然堆積土とみられる。

遺物は出土していない。

２）井戸跡

ＳＥ１井戸跡

調査区南部に位置する。ＳＤ２・５・７溝跡と重複し、いずれよりも新しい。一部が調査区外となるが、平面形は円形を呈するとみられる。規模は径1.7m以上で、深さ90cm以上である。底面は未検出であるが、断面形は漏斗状を呈するものとみられる。堆積土は２層確認した。暗褐色や暗オリーブ褐色のシルトと粘土質シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

遺物は、土師器、在地産鉢（写真図版３－９）、大堀相馬碗（第６図－４）、石核が出土している。

３）土坑

ＳＫ４土坑

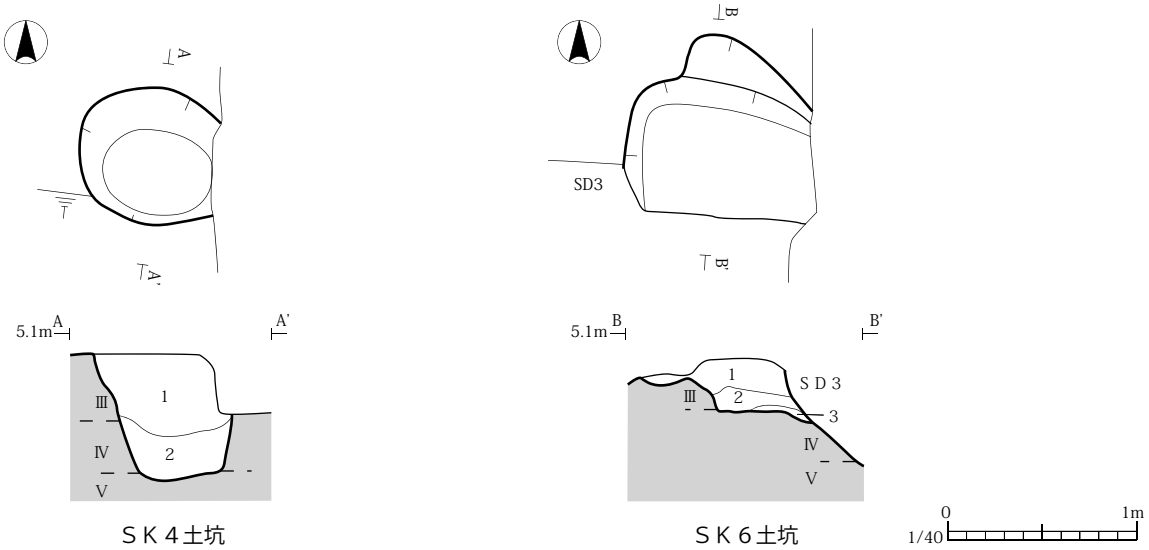
調査区北部に位置する。他の遺構との重複はない。一部が調査区外となるが、平面形は円形を基調としたものとみられる。規模は径0.75mほどで、深さ55cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は２層に細分される。にぶい黄褐色（10YR５／３）の砂質シルトなどをブロック状に含む黒褐色の粘土などで、いずれも人為的埋土である。

遺物は土師器が出土している。

ＳＫ６土坑

調査区北部に位置する。ＳＤ３溝跡と重複し、これよりも古い。一部が調査区外となるが、平面形は不正形を呈するものとみられる。規模は長軸1.0m以上、短軸0.6m以上で、深さ30cmである。断面形は上部が開く逆台形を呈する。堆積土は３層に細分される。１～２層は、黄褐色（2.5Y５/3）の砂質シルトをブロック状に含む黒褐色（10YR３／２）や黒色（10YR２／１）の粘土質シルトなどで人為的埋土とみられる。３層は、有機質の植物遺存体を互層状に含む黒色（10YR２／１）の粘土で、自然堆積土である。

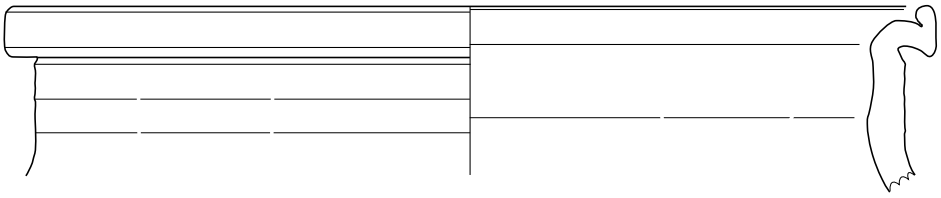
遺物は、土師器、須恵器坏が出土している。



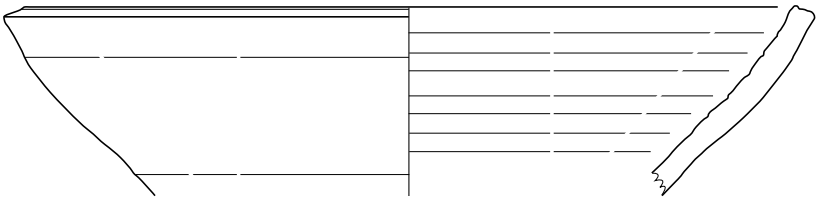
ＳＫ４土坑　　ＳＫ６土坑

遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
SK 4	1	10YR 2／3 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色(10YR 5／3)の砂質シルトをブロック(大)状に、にぶい褐色(7.5YR 5／3)の粘土をブロック(大)状にを若干、含む	人為的埋土
	2	10YR 2／2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色(10YR 5／3)の砂質シルトを小ブロック状に若干、にぶい褐色(7.5YR 5／3)粘土ブロック(大)を含む	
SK 6	1	10YR 3／2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	あまりなし	Ⅲ層ブロックを含む	人為的埋土か
	2	10YR 2／1 黒色粘土	ややあり	あり	Ⅲ層ブロックをやや含む	
	3	10YR 2／1 黒色粘土	ややあり	あり	有機植物遺存体(5 YR 4／8 赤褐色)を互層状に含む	自然堆積土

第５図　土坑　平面・断面図

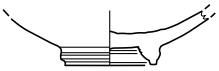


1



2

3



4

0　10cm
S=1/3

図中番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴・備考	写真図版
1	I－1	SD 3	陶器	甕	(36.2)	－	(7.4)	常滑　13C後半	3－1
－	I－3	SD 3	陶器	甕	－	－	－	常滑	3－2
－	I－4	SD 3	陶器	甕	－	－	－	常滑	3－3
－	I－5	SD 3	陶器	甕	－	－	－	在地(白石窯か)　13C後半～14C前半	3－4
2	I－2	SD 3	陶器	鉢	(32.1)	－	(7.5)	在地(白石窯)　13C後半～14C前半	3－5
－	I－6	SD 3	陶器	片口鉢	－	－	－	山茶碗系　13C～14C	3－6
3	I－7	SD 5	瓦質土器	擂鉢	－	－	－	産地不明　筋目７本一単位　16C以降	3－7
4	I－9	SE 1	施釉陶器	碗	3.7	(2.1)	－	大堀相馬　白濁釉　18C後半	3－8
－	I－8	SE 1	陶器	鉢	－	－	－	在地(白石窯)　13C後半～14C前半	3－9
－	Q－1	SD 3	動物遺存体	ウマ	－	－	－	臼歯	3－15, 16

第６図　出土遺物１

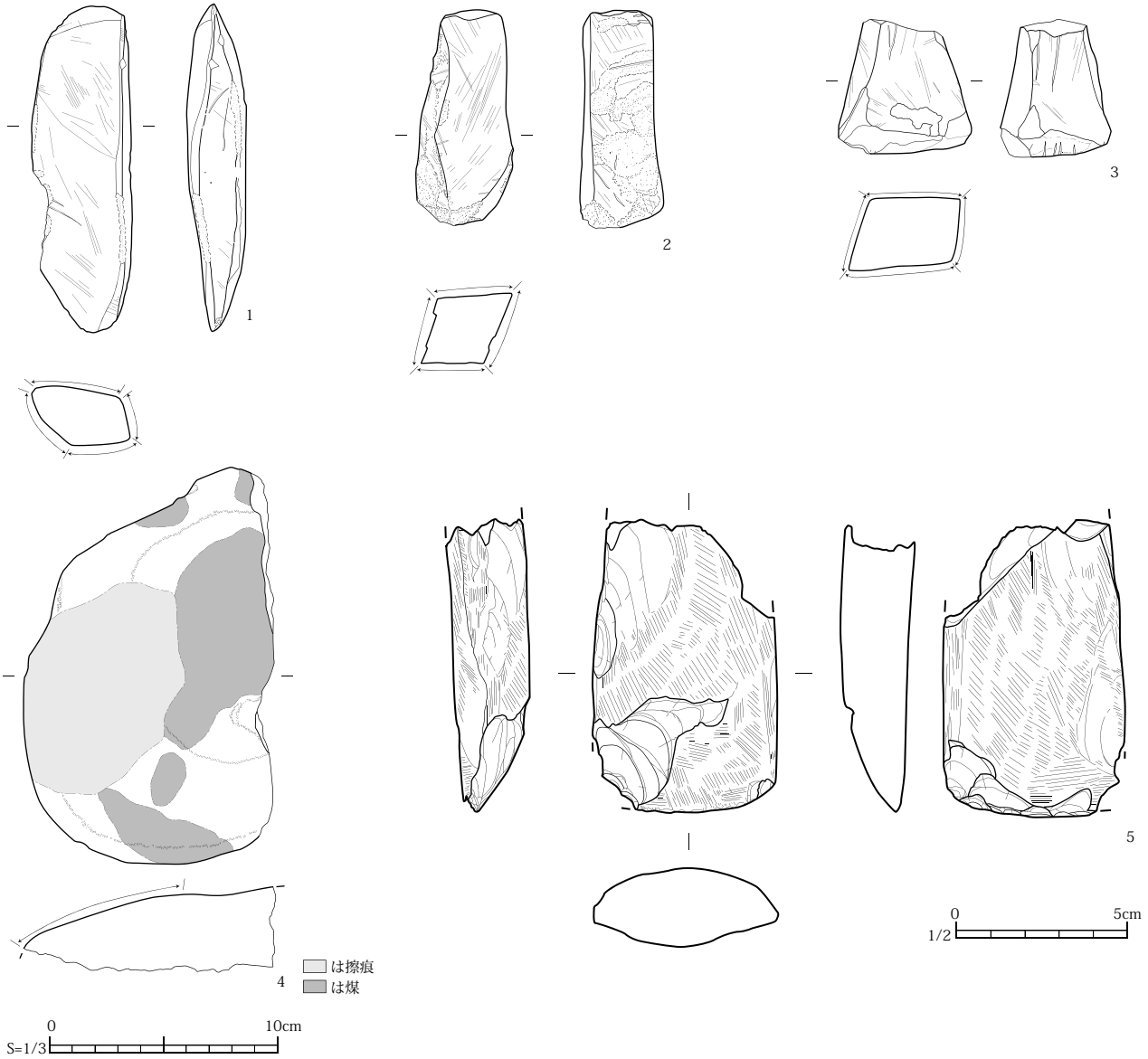
４）ピット

調査区北部調査区西壁際で２基を検出した。いずれも他の遺構との重複はない。調査区の制限から、建物跡は確認することはできなかったが、Ｐ２の底面からは平坦な河原石が検出され、礎板石の可能性がある。堆積土はいずれも単層で、基本層Ⅲ層を起源とする黄褐色の砂質シルトをブロック状に含む黒褐色（10YR３／２）の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

５）その他の出土遺物

表土、基本層から、土師器、肥前産染付鉢が出土している。



図中番号	登録番号	遺構・層位	種別	器種	法量(cm) 長	幅	厚	特徴・備考	写真図版
1	K－1	SD２	石製品	砥石	14.4	4.3	2.6	石材:凝灰岩　砥面４面	３－10
2	K－3	SD３・下層	石製品	砥石	(9.4)	4.3	3.3	石材:粘板岩　砥面４面	３－11
3	K－5	SD３	石製品	砥石	(6.0)	5.8	4.0	石材:凝灰岩　砥面５面	３－12
4	K－2	SD３	礫	擦石	(17.4)	(11.0)	(4.1)	石材:安山岩　煤状付着物	３－13
5	K－4	SD３	石器	扁平片刃石斧	(8.5)	5.3	2.3	石材:黒色頁岩	３－14

第７図　出土遺物２

6　まとめ

今回の調査地点は、中在家南遺跡の南部に位置し、第４次調査区の南側にあたる。今回の調査では、溝跡４条、井戸跡１基、土坑２基、ピット２基を検出した。

ＳＤ２、３、５溝跡は、ほぼ同位置で規模、方向が類似することから、数時期にわたる変遷の可能性があり、本調査区で建物跡などは確認されなかったが、区画施設としての機能も想定される。

出土遺物には、土師器、須恵器、陶器、磁器、石器、石製品、金属製品、動物遺存体がある。ほとんどが破片資料であり、散在して出土していることから、出土遺物から詳細な遺構の年代を明らかにすることはできない。しかし、ＳＥ１井戸跡からは、18世紀後半の大堀相馬白濁釉碗が出土している。また、ＳＤ３溝跡からは常滑産甕、在地産甕、山茶碗系片口鉢など、ＳＤ５溝跡からは16世紀以降とみられる産地不明擂鉢などが出土した。このことから、ＳＥ１井戸跡は近世以降、ＳＤ２、３、５溝跡は中世以降の年代が推定される。

また、今回の調査で出土した遺物には、弥生時代に属する扁平片刃石斧や石核が含まれる。当遺跡は、広瀬・名取川の自然堤防上に立地するが、この自然堤防上には他にも押口遺跡など弥生時代の遺跡が分布する。また、東方の沓形遺跡では、同時期の水田跡が広く検出されている。本遺跡の周辺には該期の集落が分布していたことを示すものと考えられる。

1　遺構検出状況（北から）

2　SE１井戸跡・SD２溝跡断面（北東から）

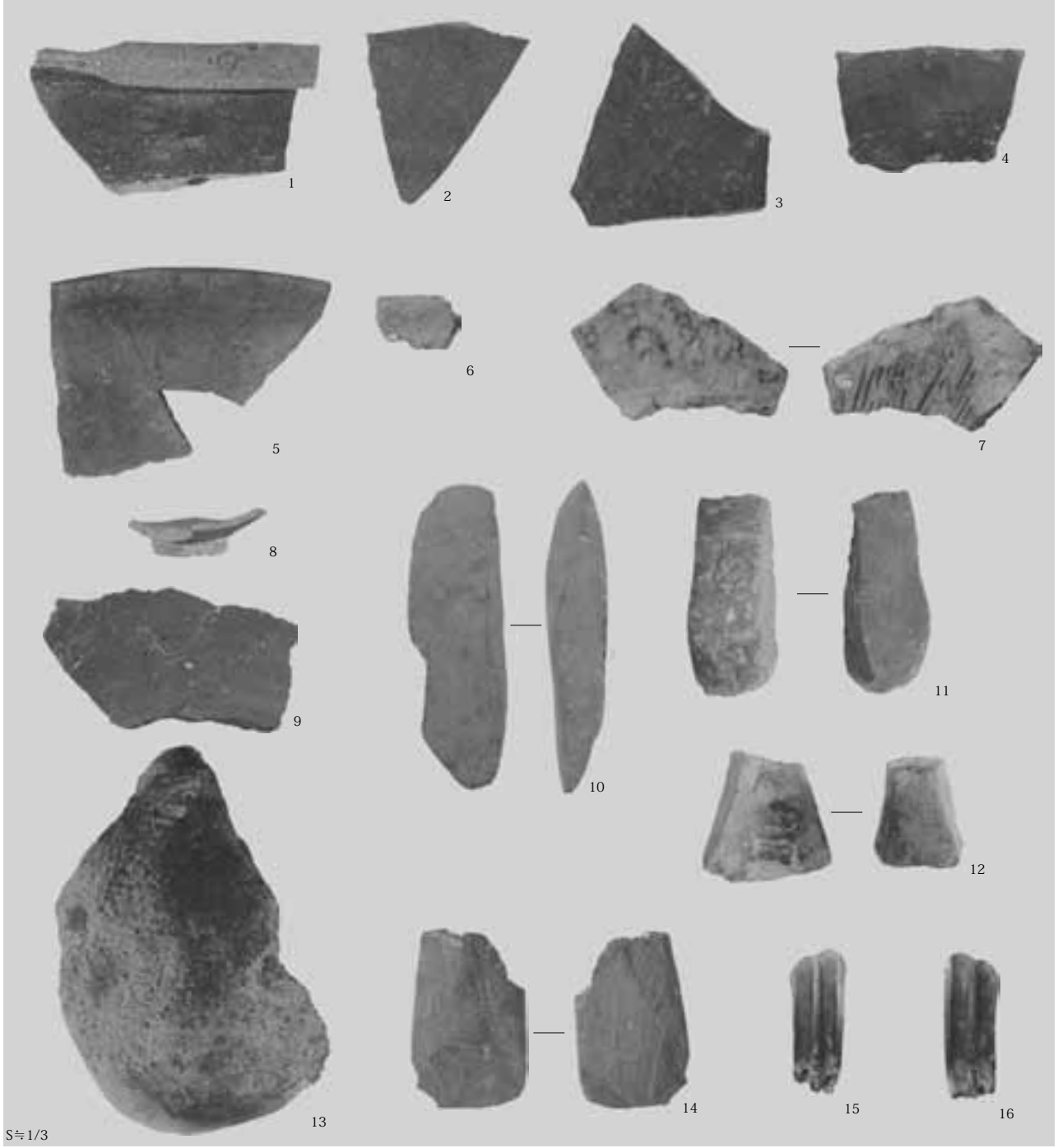
写真図版１

3　SD2,7溝跡完掘状況（東から）

4　SD３溝跡完掘状況（東から）

5　完掘状況（南東から）

写真図版２



写真図版 3

Ⅸ　城丸古墳第１次発掘調査報告

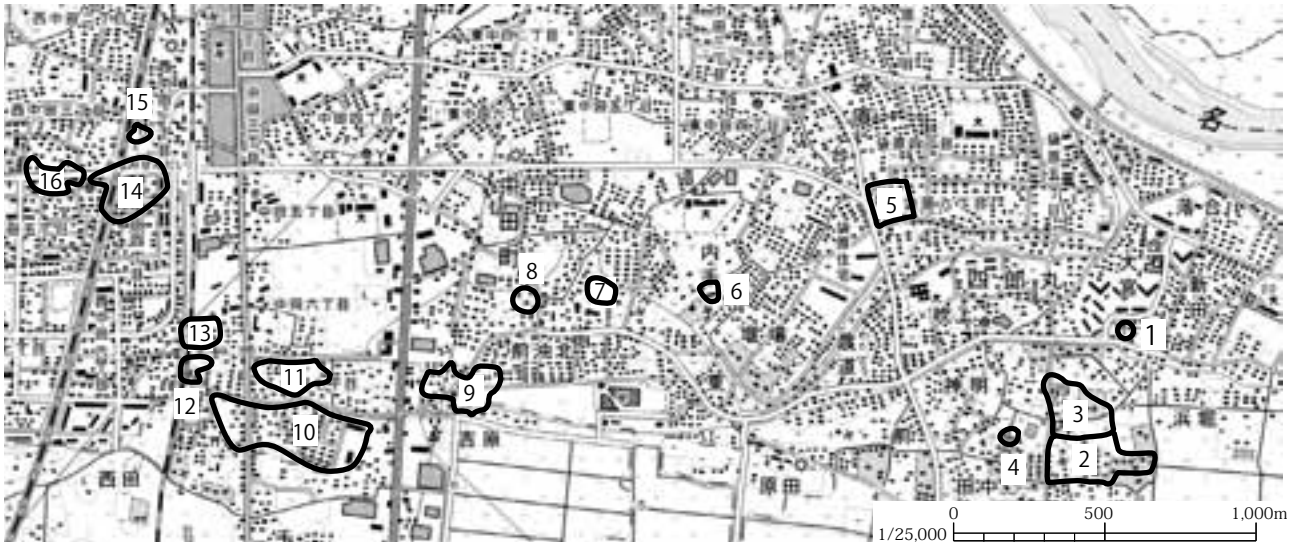
１　調査要項

遺　跡　名　　城丸古墳（宮城県遺跡登録番号01011）
調 査 地 点　　仙台市太白区四郎丸字大宮54－１、52－４
調 査 期 間　　平成23年10月７日～12日
調査対象面積　　122.48㎡
調 査 面 積　　31.5㎡
調 査 原 因　　個人住宅建設工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員　　主事　小泉博明　文化財教諭　吉野信　佐藤洋平

２　調査に至る経過と調査方法

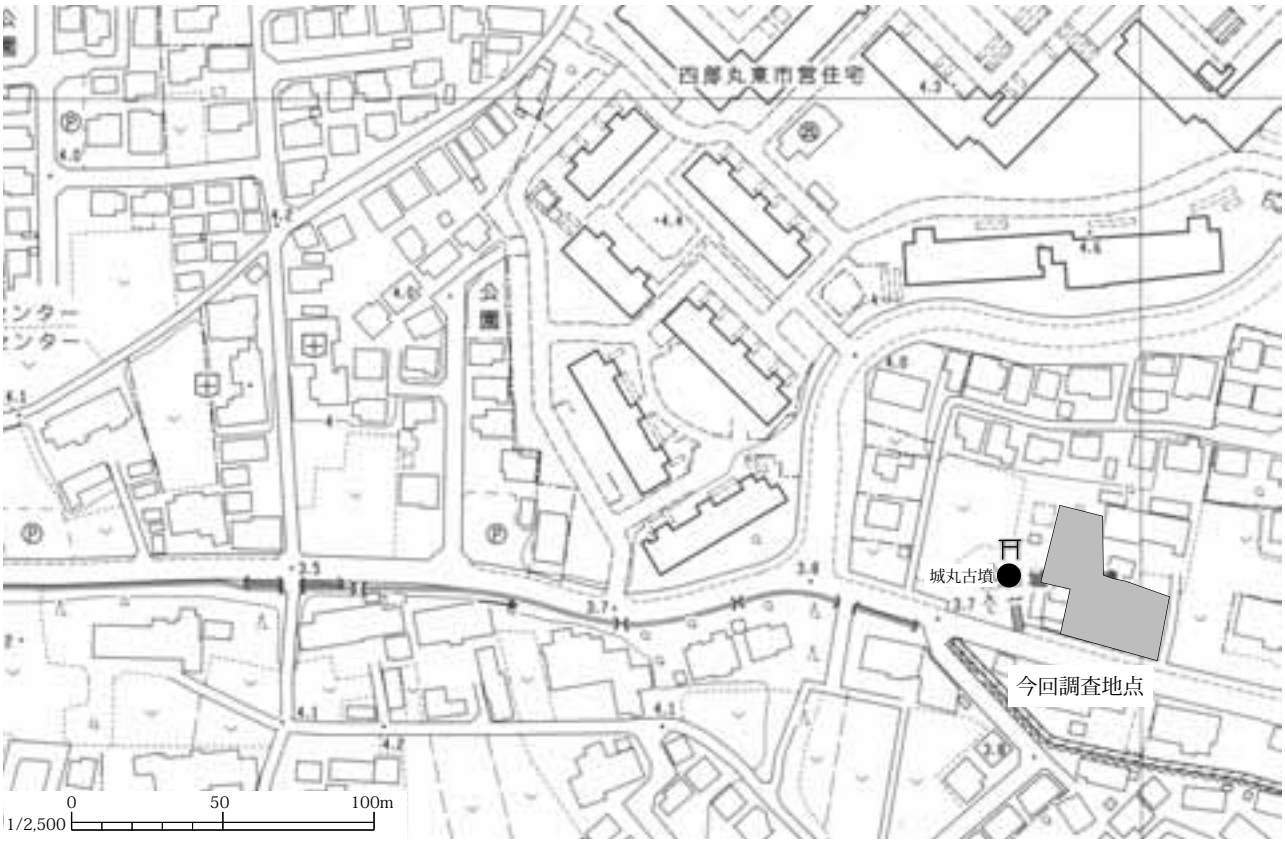
今回の調査は、平成23年９月15日付で、申請者より提出された、個人住宅建築工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出について」に対して、文化財保護法第93条（H23教生文第106－183号で回答）に基づき実施した。調査は平成23年10月７日に着手し、遺構が検出されたため、引き続き本発掘調査を実施した。住宅建築範囲内に南北3.0m×東西10.5mの調査区を設定した。重機により現表土およびⅠ～Ⅱ層を除去後、Ⅲ層上面で人力により遺構検出作業を行い、溝跡３条を検出した。なお、工事に伴う掘削深度の都合から、主に遺構の上面の精査に留まっている。

適宜、平面・断面図（Ｓ＝１/20、Ｓ＝１/40）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	**城丸古墳（大宮古墳）**	**円墳**	**自然堤防**	**古墳**
2	四郎丸館跡	方形周溝墓、集落跡、城館跡	自然堤防	古墳、古代、中世
3	戸ノ内遺跡	集落跡、方形周溝墓	自然堤防	弥生、古墳、古代、中世
4	神明遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
5	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳、古代
6	内手遺跡	散布地	自然堤防	古代
7	前沖北遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
8	前沖中遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
9	後河原遺跡（前沖遺跡）	水田跡	自然堤防、後背湿地	弥生、古代、中世、近世
10	中田南遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世
11	北遺跡	散布地	自然堤防	古代
12	壇腰遺跡	散布地	自然堤防	古代
13	前田館跡	城館跡	自然堤防	中世
14	安久東遺跡	集落跡、方形周溝墓	自然堤防	弥生、古墳、古代、中世、近世
15	中田神社裏遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
16	安久遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古代、中世

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

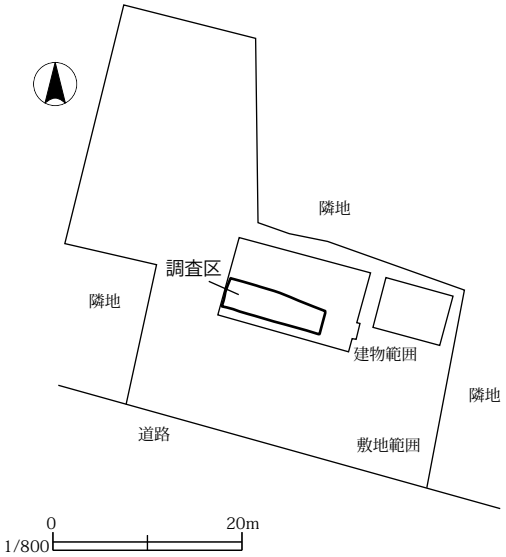


第２図　調査地点の位置

3　遺跡の位置と環境

城丸古墳は、仙台市の南部、ＪＲ南仙台駅から南東約3.1kmの地点に位置する。広瀬川と名取川の合流地点より南へ約２kmの地点にあり、名取川右岸の自然堤防上に立地している。城丸古墳の南西には、直径約７ｍの円墳である弁天囲古墳や、古墳時代前期の竪穴住居跡や方形周溝墓などが検出された戸ノ内遺跡などが分布している。

城丸古墳は現況では、高さ約2.2mで、古墳上に城丸大明神が祀られている。また、直径約23mの円墳で、周溝を伴うものと考えられているが、これまで発掘調査が行われたことはない。



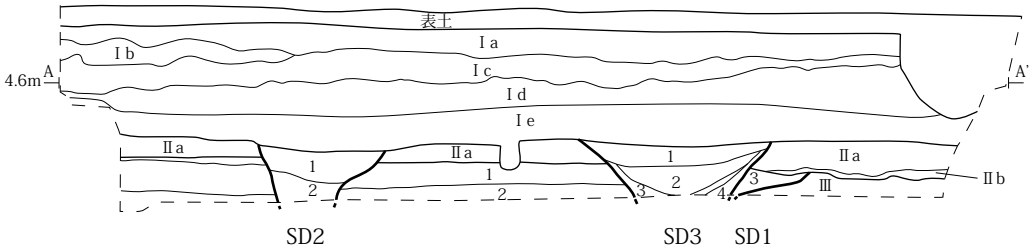
第３図　調査区配置図

4　基本層序

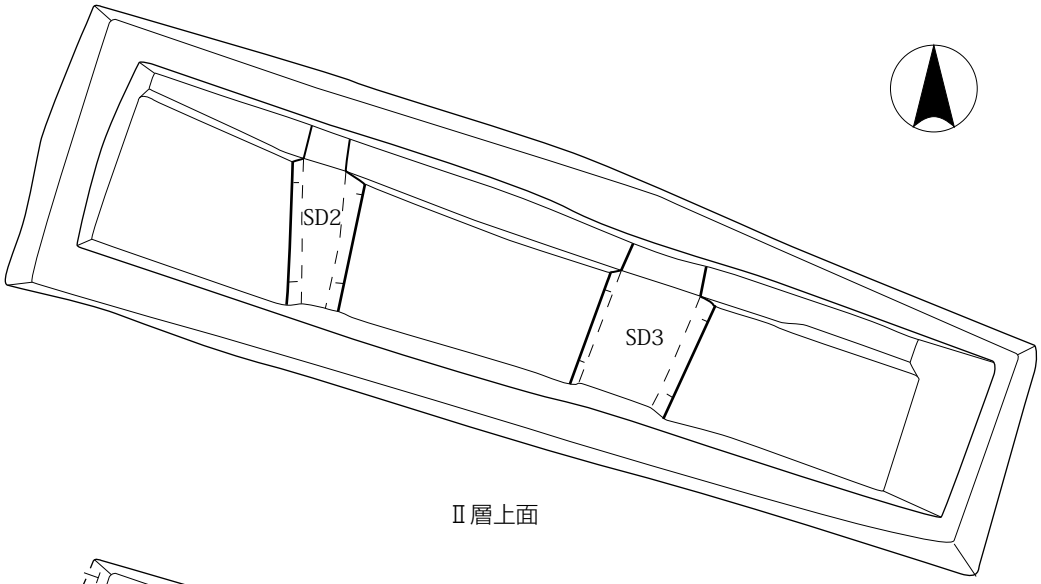
Ⅰ層：層相から５層に細分される。しまりのあまりない比較的均質な暗褐色（10YR３／３）などのシルトで、宅地化前の畑地耕作土などである。層厚は約1.2mである。

Ⅱ層：黒褐色（2.5Y３／２、10YR３／２）の粘土質シルトで、にぶい黄褐色（10ＹＲ５／４）の砂質シルトを含む。層厚は約35cmである。ＳＤ２溝跡、ＳＤ３溝跡の掘り込み面である。

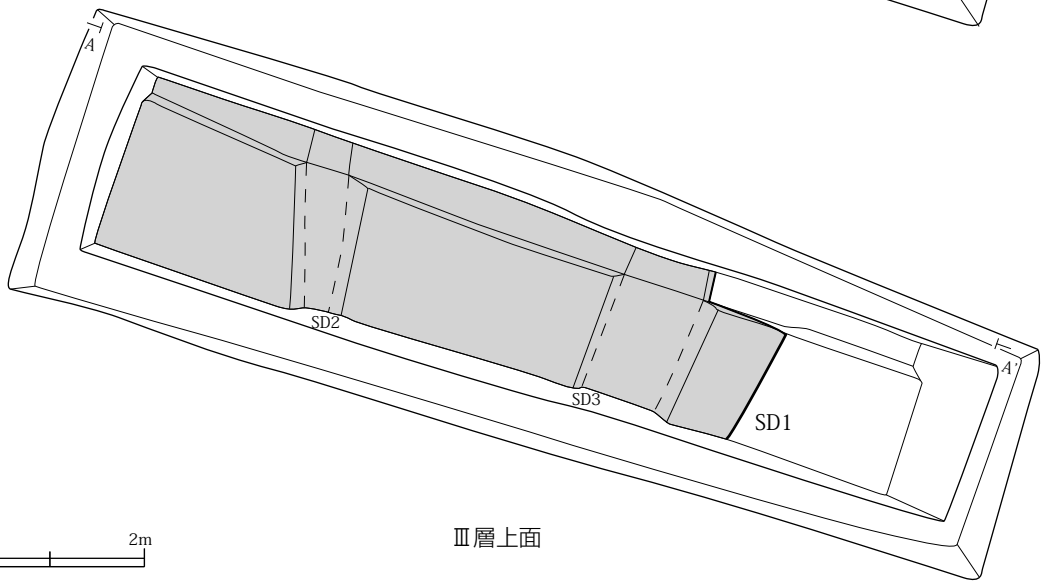
Ⅲ層：にぶい黄褐色（10ＹＲ５／４）で、粘性のない均質な砂質シルトである。ＳＤ１溝跡の掘り込み面であり、今回の調査におけるすべての遺構の検出面である。



北壁断面



Ⅱ層上面



Ⅲ層上面

0　2m
1/80

遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等
Ⅰa		10YR４/３にぶい黄褐色シルト	あまりなし	あまりなし	暗褐色(10YR３/３)のシルトをブロック状に含む
Ⅰb		10YR４/２灰黄褐色シルト	あまりなし	あまりなし	炭化物を粒状に少量含む
Ⅰc		10YR３/３暗褐色シルト	あまりなし	あまりなし	均質
Ⅰd		2.5Y３/３暗オリーブ褐色シルト	あまりなし	あまりなし	均質
Ⅰe		10YR２/３黒褐色シルト	あまりなし	あまりなし	黒褐色(10YR３/２)のシルトを粒状に含む
Ⅱa		2.5Y３/２黒褐色シルト	あまりなし	あまりなし	黒褐色(10YR３/２)のシルトを粒状に含む
Ⅱb		10YR３/２黒褐色シルト	あまりなし	あまりなし	にぶい黄褐色(10YR５/４)のシルトをブロック状に含む
Ⅲ		10YR５/４にぶい黄褐色シルト	あまりなし	あまりなし	均質
SD１	1	10YR４/３にぶい黄褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	灰白色火山灰をブロック状に含む
	2	2.5Y４/３オリーブ褐色粘土	ややあり	ややあり	炭化物をごく少量に含む
	3	10YR２/２黒褐色粘土	ややあり	あり	にぶい黄褐色(10YR５/４)のシルトをブロック状にやや多く含む
SD２	1	2.5Y４/２暗灰黄色粘土質シルト	ややあり	ややあり	灰黄褐色(10YR４/２)のシルトを粒状に含む
	2	10YR３/４暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	黒褐色(10YR２/２)の粘土をブロック状に少量含む
SD３	1	10YR３/３暗褐色粘土質シルト	あまりなし	あまりなし	褐灰色(10YR４/１)の粘土を斑状に含む
	2	2.5Y３/３暗オリーブ褐色粘土	あまりなし	あまりなし	褐灰色(10YR４/１)の粘土を斑状に含む
	3	10YR４/１褐灰色粘土	あまりなし	あり	均質
	4	10YR４/２灰黄褐色粘土	あまりなし	あまりなし	黒褐色(10YR２/２)の粘土を粒状にごく少量含む

第４図　平面・断面図

5　発見遺構と出土遺物

溝跡３条を検出した。遺物は、遺構堆積土から須恵器が出土している。

1）Ⅱ層上面検出遺構

溝跡２条を検出した。遺物は須恵器が出土している。

ＳＤ２溝跡

調査区西部に位置する南北方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長は約1.9mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約1.2m、下端幅は底面未検出のため不明である。掘り込み面からの深さは60cm以上で、断面形は上部が開く逆台形を呈するものとみられる。堆積土は２層を確認した。暗褐色、暗灰黄色の粘土質シルトで、いずれも自然堆積土である。

遺物は、１層から須恵器甕が出土している。

ＳＤ３溝跡

調査区東部に位置する南北方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長は約1.9mで、さらに調査区外南北へ延びる。規模は、上端幅約0.8m、下端幅は底面未検出のため不明である。掘り込み面からの深さは60cm以上で、断面形は逆台形を呈するものとみられる。堆積土は４層を確認した。暗褐色の粘土質シルトと褐灰色などの粘土で、いずれも自然堆積土である。

遺物は出土していない。

2）Ⅲ層上面検出遺構

溝跡１条を検出した。遺物は出土していない。

ＳＤ１溝跡

調査区中央～西部に位置する南北方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長は約1.9mで、さらに調査区外へ延びる。一部の検出であることから規模は不明であるが、上端幅7.2m以上である。掘り込み面からの深さは40cm以上で、断面形は不明であるが、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は３層に細分され、にぶい黄褐色～黒褐色の粘土、粘土質シルトである。１層は、10世紀後半に降下したと考えられる灰白色火山灰の２次堆積層とみられる。

遺物は出土していない。

6　まとめ

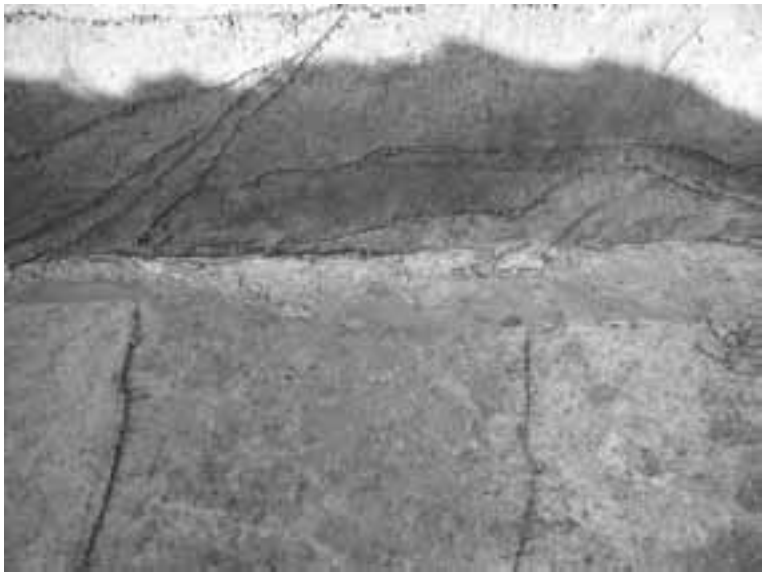
今回の調査地点は、現存する城丸古墳墳丘の東側に位置する。

今回の調査では、溝跡３条を検出した。

ＳＤ２、３溝跡は、性格は不明であるが、ＳＤ１溝跡に堆積した灰白色火山灰より新しく、さらに基本層Ⅱ層を挟むことから、古代以降の年代が考えられる。

ＳＤ１溝跡は位置や規模、上層に灰白色火山灰を含む堆積土の状況などから、城丸古墳の周溝である可能性がある。ただし、城丸古墳については、これまで発掘調査が行われたことはなく、実態が捉えられていないことから、詳細は今後の検討課題である。

1　調査区全景（東から）



2　SD１溝跡壁断面（南から）

3　調査区北壁断面（南東から）

写真図版

X　大野田官衙遺跡第７・９次発掘調査報告

1　調査要項

遺　跡　名　　大野田官衙遺跡（宮城県遺跡登録番号01566）

調 査 地 点　　第７次：仙台市太白区大野田字竹松８－11の一部（15ブロック・２ロット）

（平成23年１月20日届出、H22教生文第114―250号回答）

第９次：仙台市太白区富沢駅周辺土地区画整理事業17Ｂ－５Ｌ

（平成23年６月24日届出、H23教生文第106－66号回答）

調 査 期 間　　第７次：平成23年２月１日～３日

第９次：平成23年７月５日～７日

調 査 面 積（調査対象面積）　　第７次：24㎡（71.87㎡）　第９次：30.0㎡（75.90㎡）

調 査 原 因　　個人住宅建築工事

調 査 主 体　　仙台市教育委員会

調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係

担 当 職 員　　第７次：主事　及川謙作　　文化財教諭　鈴木健弘

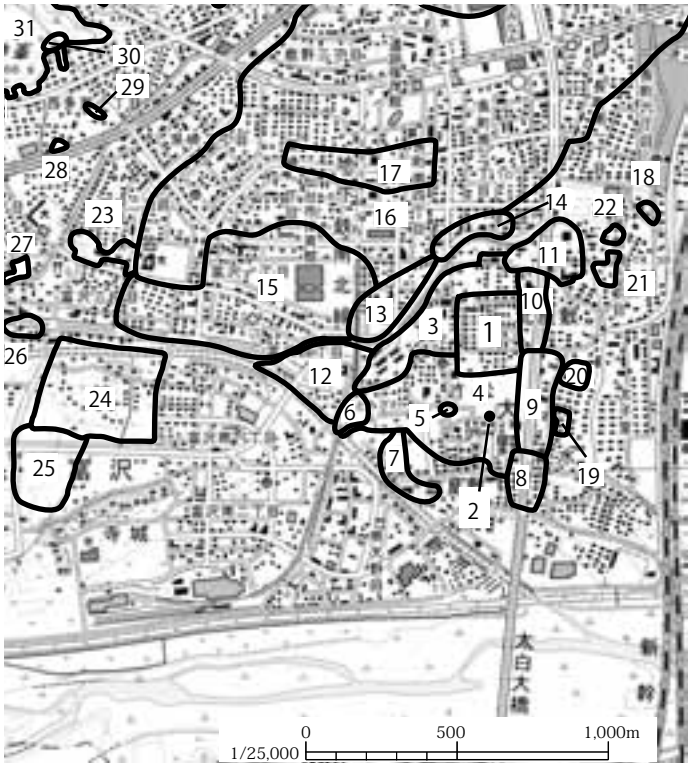
第９次：主査　平間亮輔　　文化財教諭　吉野　信　石山智之

2　調査に至る経過と調査方法

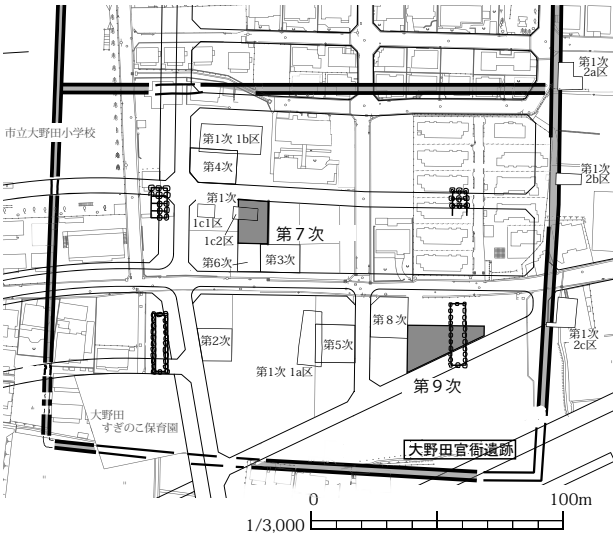
今回の調査は、申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」に対して、文化財保護法第93条に基づき実施した。確認調査を実施したところ、各調査区で遺構が検出されたため、引き続き本発掘調査を実施した。調査区は、いずれの調査区も住宅建築範囲内に設置した。

適宜、平面・断面図（Ｓ＝１/20、１/40）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

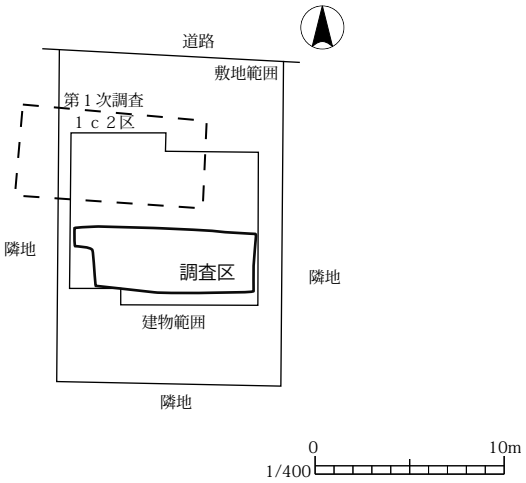
番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	大野田官衙遺跡	官衙跡	自然堤防	古代
2	鳥居塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳中期
3	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～古代、近世
4	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳
5	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳
6	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古墳～古代
7	伊古田B遺跡	集落跡水田跡	自然堤防	古墳～古代
8	皿屋敷遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	古代、中世
9	王ノ壇遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文～中世
10	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防	縄文～古代
11	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、古代～近世
12	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～奈良
13	下ノ内浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文～中世
14	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
15	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～中世
16	富沢遺跡	包含地、水田跡	後背湿地	後期旧石器～近世
17	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～古墳、平安、近世
18	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	古代
19	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古代
20	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古代
21	新田遺跡	散布地	自然堤防	古代
22	長町南遺跡	散布地	自然堤防	古代
23	富沢清水遺跡	散布地	自然堤防	古代
24	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世
25	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	平安
26	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
27	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文、平安
28	原東遺跡	散布地	丘陵麓	古墳～古代
29	裏町東遺跡	散布地	丘陵麓	平安
30	金山窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳中期
31	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文、平安



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　調査区の位置



第３図　第７次調査　調査区配置図

3　遺跡の位置と環境

大野田官衙遺跡は、仙台市南東部に位置し、仙台市営地下鉄南北線富沢駅から北東へ約0.4kmの地点にある。名取川左岸に広がる郡山低地にあり、名取川およびその支流により形成された自然堤防上に立地する。

大野田官衙遺跡周辺は、現在まで中小あわせて40基の円墳が確認されている大野田官衙遺跡、縄文時代から古代、近世にかけての集落跡である六反田遺跡など、遺跡が密集する地域である。これまで「富沢駅周辺土地区画整理事業」に伴い、発掘調査が進められてきた。その過程で、規則的な配置や規格性のある大型建物跡とそれを囲む溝跡などが発見された。平成21年度７月に官衙関連の溝跡に囲まれた部分を新たに大野田官衙遺跡として登録し、以降、６次にわたり発掘調査が行われている。

4　基本層序

大野田官衙遺跡周辺では、現在「富沢駅周辺土地区画整理事業」に伴う発掘調査が進んでおり、その調査成果と対応させ、基本層の層位名を付した。なお、Ⅱ、Ⅲ層は、いずれの調査区でも削平を受けており、確認されなかった。

Ⅰ層：盛土直下の旧水田層である。

Ⅳ層：灰白色火山灰降下以前の古代遺構の検出面である。暗褐色、黒褐色の粘土質シルトである。調査地点によって、２層以上に細分される。下面に著しい凹凸が認められる地点があり、また、下層で小溝状遺構が検出されることから、畑地耕作土の可能性があると考えられている。

Ⅴ層：古墳時代前期から古代に属する遺構の検出面である。にぶい黄褐色のシルトや粘土質シルトである。大野田官衙に関わる掘立柱建物跡は、本層上面で検出されている。

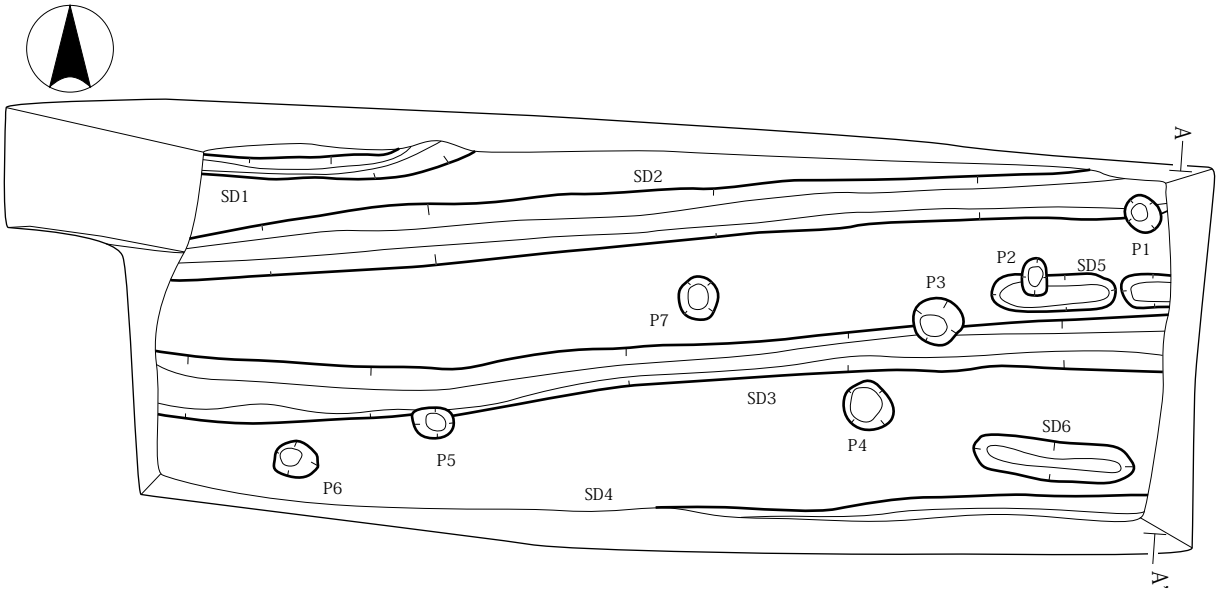
5　第７次調査

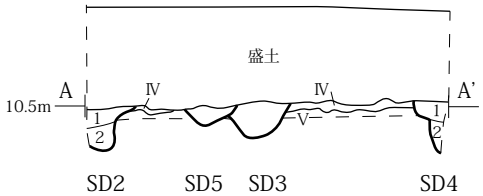
1）発見遺構と出土遺物

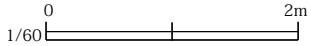
溝跡６条、ピット７基を検出した。Ⅴ層上面まで掘り下げ検出したが、調査区壁断面の観察などにより、いずれもⅣ層上面からの掘り込みであることが確認された。遺物は発見されなかった。

（1）溝跡

６条検出した。このうちＳＤ１～４溝跡は、同一の小溝状遺構群とみられる。また、ＳＤ５～６溝跡についても同様の可能性が高いが、調査区の制約上、詳細は不明である。







層位	土色・土質	しまり	粘性	混入物等
Ⅳ	10YR３／４暗褐色シルト質粘土	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に中量含む
Ⅴ	10YR４／４褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色(10YR５／３)の粘土をブロック状に含む

遺構・層位		土色・土質	しまり	粘性	混入物等	検出長	上幅(長径)	下幅(短径)	深さ
SD１		10YR３／４暗褐色粘土質シルト	あり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に下層に多量に含む	2.2	20	10	15
SD２	１	10YR３／３暗褐色粘土質シルト	あり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に少量含む	7.8	45	20	35
	２	10YR４／４褐色粘土質シルト	あり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に主体とし、炭化粒を少量含む				
SD３		10YR３／３暗褐色粘土質シルト	あり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に下層に多量含む	8.0	45	30	30
SD４	１	10YR３／４暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に多量、炭化物を粒状に少量、灰白色火山灰をごく少量、含む	3.8	(20)	(５)	40
	２	10YR４／４褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に少量含む				
SD５		10YR４／４褐色粘土質シルト	あり	ややあり	炭化物を粒状に少量含む	1.4	30	14	15
SD６		10YR４／４褐色粘土質シルト	あり	ややあり	炭化物を粒状に少量、下層ににぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に中量、含む	1.2	30	10	9
P１		10YR３／４暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	炭化物を粒状に少量含む	－	30	25	38
P２		10YR３／３暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に少量、炭化物を粒状に少量、含む	－	30	20	31
P３		10YR３／４暗褐色粘土質シルト	あり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に少量、炭化物を粒状に少量、含む	－	40	30	34
P４		10YR３／４暗褐色粘土質シルト	あり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に中量、含む	－	40	40	30
P５		10YR３／４暗褐色粘土質シルト	あり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に含む	－	25	25	31
P６		10YR３／３暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に少量、含む	－	35	30	46
P７		10YR３／４暗褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に下層に中量、含む	－	35	30	34

単位　検出長:m　　その他:cm

第４図　平面・断面図

小溝状遺構群１

東西方向の溝跡４条（ＳＤ１～４溝跡）からなる。ＳＤ５溝跡、Ｐ１・３・５と重複関係があり、これらよりも古い。検出長は、約2.2～7.8mである。規模は上端幅20～45cm、下端幅10～30cmで、深さは15～35cmを測る。断面形は逆台形ないし浅い皿状を呈する。各溝跡の間隔は、心々距離で1.2m前後である。堆積土は単層ないし２層に細分され、暗褐色や褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

ＳＤ５溝跡

東西方向の溝跡である。検出長は、1.4mである。規模は上端幅30cm、下端幅14cmで、深さは15cmを測る。断面形

は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、炭化物を粒状に少量含む褐色の粘土質シルトである。
遺物は出土していない。

ＳＤ６溝跡
東西方向の溝跡である。検出長は、1.2mである。規模は上端幅30cm、下端幅10cm、深さ９cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、炭化物を粒状に少量含む褐色の粘土質シルトである。
遺物は出土していない。

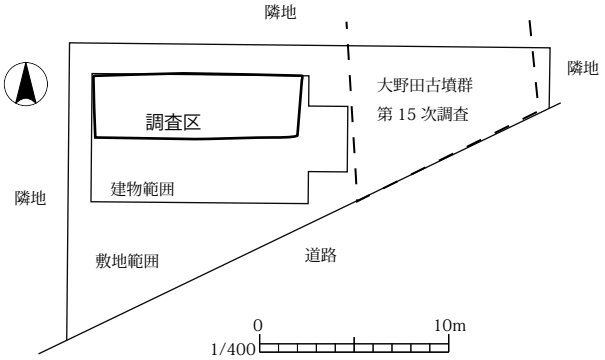
（２）ピット
７基検出した。平面形は円形、もしくは楕円形で、規模は径25～40cm、深さは30～46cmである。いずれも柱痕跡等は確認されなかった。
遺物は出土していない。

6　第９次調査

1）発見遺構と出土遺物

溝跡７条、ピット２基を検出した。遺構はすべて盛土直下のⅤ層上面で検出した。遺物は、遺構堆積土から土師器が出土した。

（１）溝跡
７条検出した。規模や方向、堆積状況等からすべて小溝状遺構群の一部である可能性が高いが、調査区の制約上、詳細は不明である。



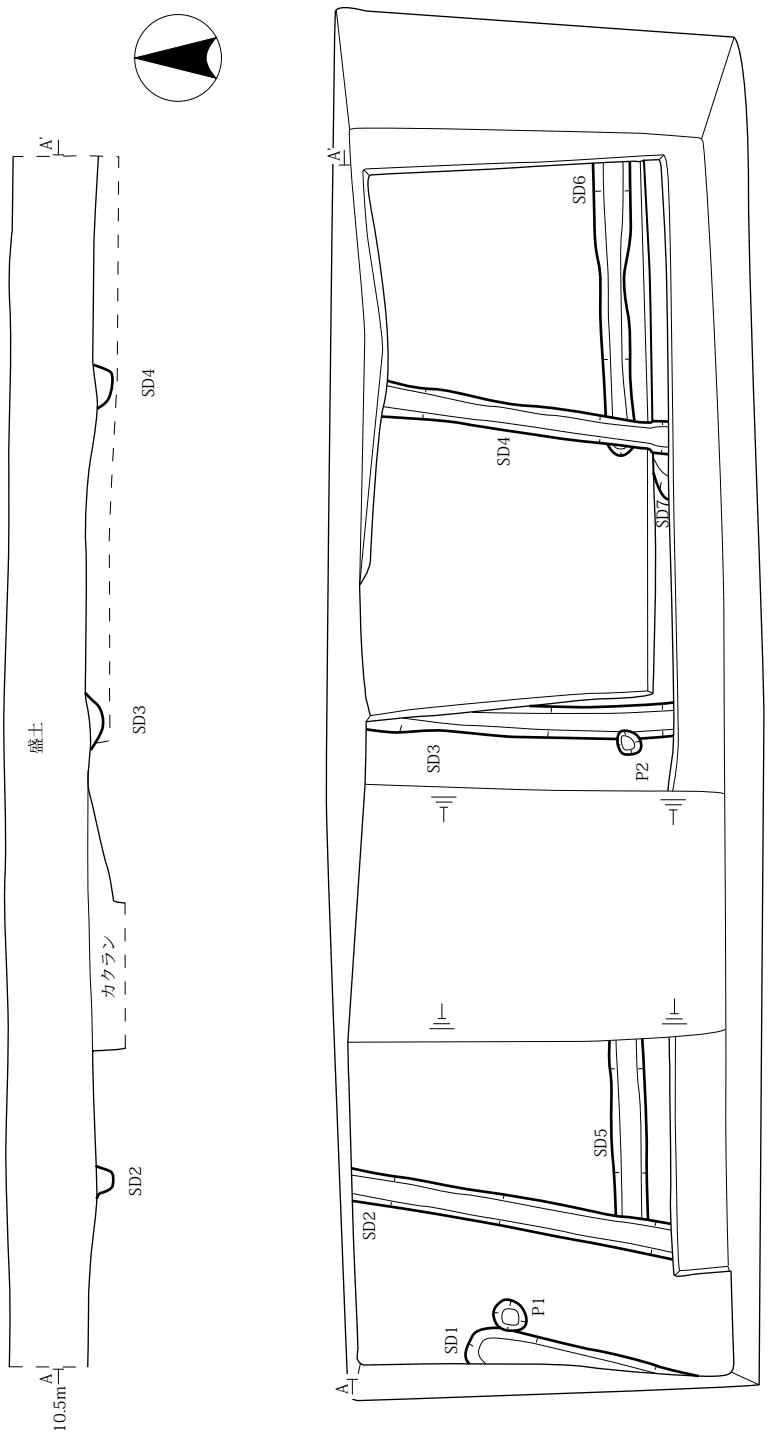
第５図　第９次調査　調査区配置図

ＳＤ１溝跡
南北方向の溝跡である。Ｐ１と重複し、それよりも古い。検出長は、1.8mである。規模は上端幅32cm以上、下端幅24cm以上で、深さは10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、暗褐色の粘土である。
遺物は出土していない。

ＳＤ２溝跡
南北方向の溝跡である。ＳＤ５溝跡と重複し、それよりも新しい。検出長は、2.5mである。規模は上端幅26cm、下端幅16cmで、深さは９cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、褐灰色の粘土質シルトである。
遺物は出土していない。

ＳＤ３溝跡
南北方向の溝跡である。Ｐ２と重複し、それよりも古い。検出長は、2.1mである。規模は上端幅24cm、下端幅12cmで、深さは８cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、黒褐色の粘土質シルトである。
遺物は出土していない。

ＳＤ４溝跡
南北方向の溝跡である。ＳＤ６・７溝跡と重複し、それらよりも新しい。検出長は、2.3mである。規模は上端幅32cm、下端幅16cmで、深さは７cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、黒褐色の粘土質シルトである。
遺物は、土師器が出土している。

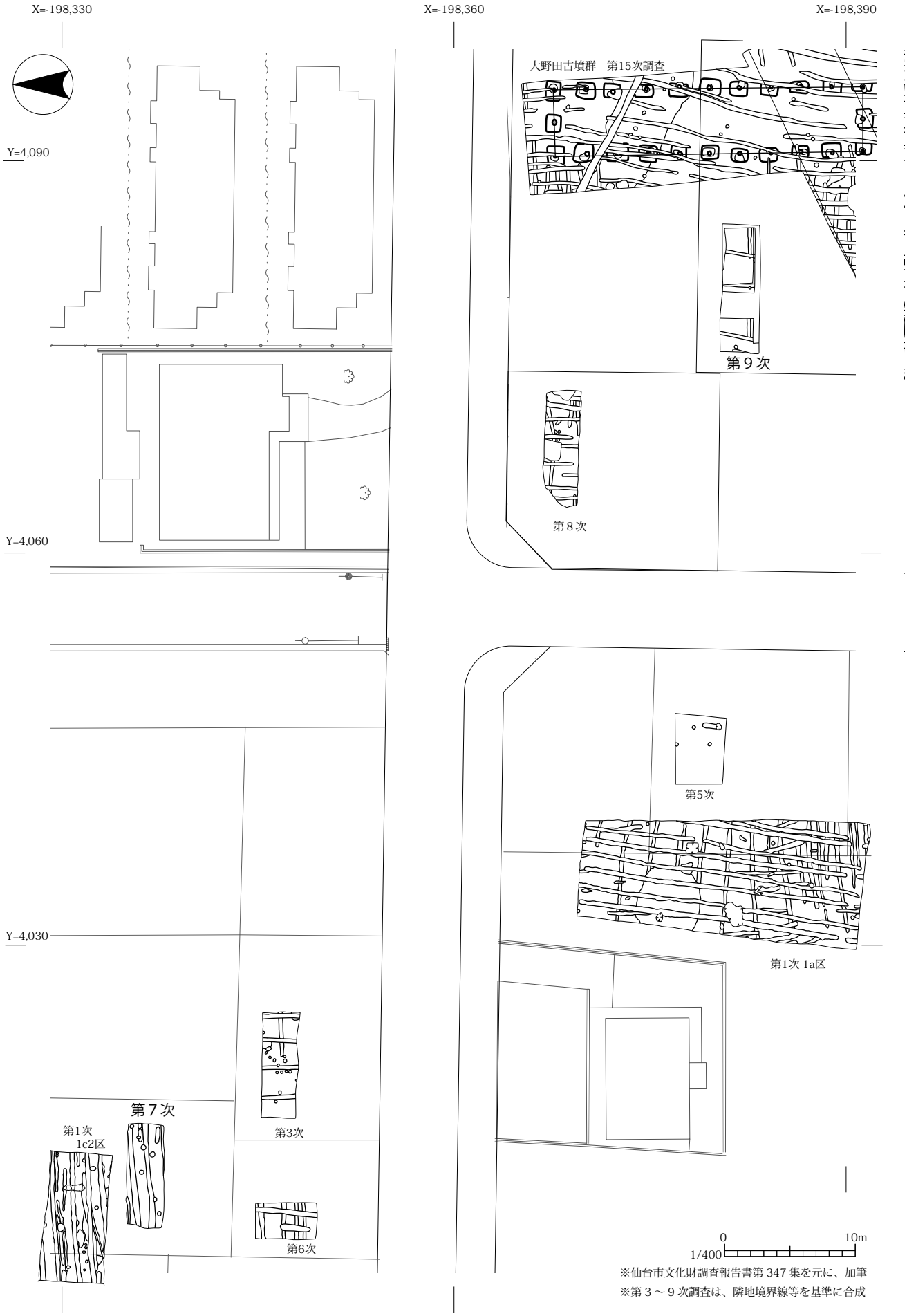


基本層	土色・土質	しまり	粘性	混入物等	備考
V	10YR 3 / 4 暗褐色粘土	ややあり	ややあり	褐色(10YR 4 / 3)の粘土を小ブロック状にわずかに含む	一部グライ化する

遺構	土色・土質	しまり	粘性	混入物等	検出長	上幅(長径)	下幅(短径)	深さ
SD 1	10YR 3 / 4 暗褐色粘土	ややあり	ややあり	暗褐色(10YR 3 / 4)の粘土を小ブロック状に含む	1.8	(32)	(24)	10
SD 2	10YR 4 / 1 褐灰色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	暗褐色(10YR 3 / 4)の粘土を小ブロック状にわずかに含む	2.5	26	16	9
SD 3	10YR 3 / 2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	混入物ほとんどなく均質	2.1	24	12	8
SD 4	10YR 3 / 2 黒褐色粘土質シルト	ややあり	ややあり	混入物ほとんどなく均質	2.3	32	16	7
SD 5	10YR 3 / 2 黒褐色粘土	ややあり	ややあり	暗褐色(10YR 3 / 4)の粘土を小ブロック状に多く含む	1.4	30	18	5
SD 6	10YR 3 / 4 暗褐色粘土	ややあり	ややあり	暗褐色(10YR 3 / 4)の粘土を小ブロック状に多く含む	2.3	30	14	6
SD 7	10YR 3 / 2 黒褐色粘土	あまりなし	ややあり	暗褐色(10YR 3 / 4)の粘土を小ブロック状に含む	2.6	(14)	(14)	9
P 1	10YR 3 / 3 暗褐色粘土	ややあり	ややあり	酸化鉄を多く含む	−	26	24	22
P 2	10YR 4 / 1 褐灰色粘土質シルト	あまりなし	ややあり	混入物ほとんどなく均質	−	22	16	5

単位　検出長:m　　その他:cm

第 6 図　第 9 次調査　平面・断面図



※仙台市文化財調査報告書第 347 集を元に、加筆
※第３～９次調査は、隣地境界線等を基準に合成

第７図　既調査区と今回の調査区

ＳＤ５溝跡

東西方向の溝跡である。ＳＤ２溝跡と重複し、それよりも古い。検出長は、1.4mである。規模は上端幅30cm、下端幅18cmで、深さは５cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、黒褐色の粘土である。

遺物は出土していない。

ＳＤ６溝跡

東西方向の溝跡である。ＳＤ４溝跡と重複し、それよりも古い。検出長は、2.3mである。規模は上端幅30cm、下端幅14cmで、深さは６cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、暗褐色の粘土である。

遺物は出土していない。

ＳＤ７溝跡

東西方向の溝跡である。ＳＤ４溝跡と重複し、それよりも古い。検出長は、2.6mである。規模は上端幅14cm以上、下端幅14cm以上で、深さは９cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、黒褐色の粘土である。

遺物は出土していない。

2）ピット

計２基検出した。平面形は円形で、規模は径16～26cm、深さは５～22cmである。いずれも柱痕跡等は確認されなかった。

遺物は、出土していない。

7　まとめ

個人住宅建築に伴い、２次にわたる調査を行った。また今年度は、長屋建築にともなう発掘調査も行っている（第８次：97頁第７図参照）。いずれの調査区でも小溝状遺構群、溝跡、ピットを検出した。小溝状遺構群は、大野田官衙遺跡だけでなく、周辺の調査で広く検出され、古代の畑耕作に関わる小溝状遺構群として認識されているものである。今回検出した溝跡についても、その規模や規則性などから小溝状遺構群の一部である可能性が高いと考えられる。ただし、調査区の制約等もあり、「富沢駅周辺土地区画整理事業」に伴う発掘調査などの成果を待ってから、改めて確定したい。

また、大野田官衙に関連する遺構は、検出されなかった。

1　第７次調査　遺構検出状況（西から）

写真図版１

2　第７次調査　遺構完掘状況（西から）

3　第９次調査　遺構検出状況（南西から）

4　第９次調査　遺構完掘状況（南西から）

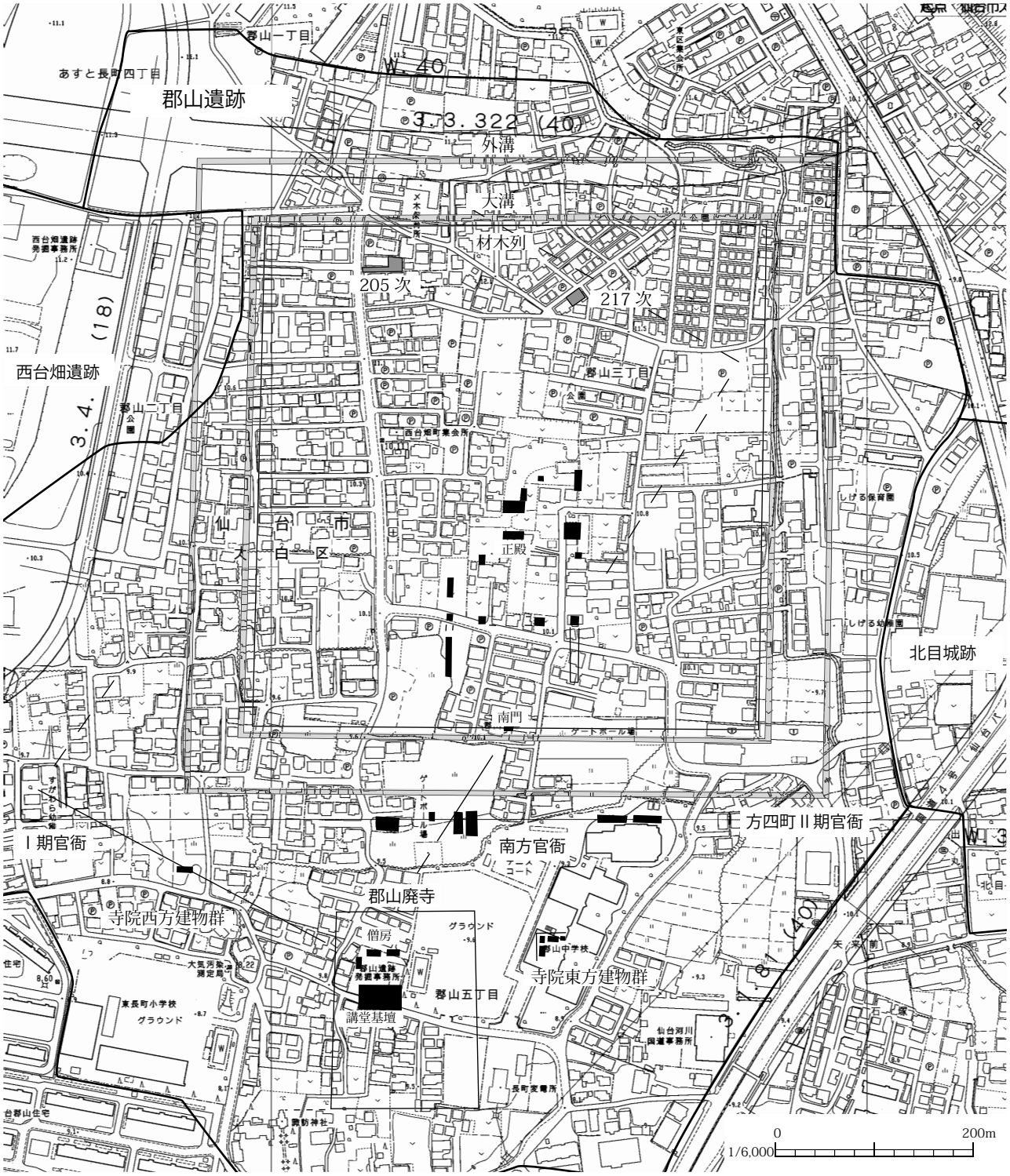
写真図版２

Ⅺ　郡山遺跡

平成23年度実施した個人住宅建築に伴う発掘調査は、第１表･第１図の通りである。なお、第205次調査の結果および抄録は仙台市文化財調査報告書第406集『郡山遺跡32』に収録し、第207次調査については『郡山遺跡33』（次年度刊行予定）で報告予定である。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因
郡山遺跡第205次	Ⅱ期官衙北西部	67.23㎡	５月９日～６月４日	個人住宅建築工事
郡山遺跡第217次	Ⅱ期官衙北東部	22.1㎡	１月10日～16日	個人住宅建築工事

第１表　調査実績



第１図　調査地点位置図

報　告　書　抄　録

ふりがな	せんだいへいやのいせきぐん
書名	仙台平野の遺跡群
副書名	平成23年度発掘調査報告書
巻次	22
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第404集
編著者名	小泉博明・橋本勇人・廣瀬真理子
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980－8671　宮城県仙台市青葉区二日町１－１　　電話　022－214－8894
発行年月日	平成24年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
洞ノ口遺跡 （14次）	仙台市宮城野区岩切字洞ノ口106番１	4100	01372	38° 18′ 10″	140° 57′ 6″	2011・05・16 2011・05・19	36㎡	記録保存 (個人住宅建築)
洞ノ口遺跡 （15次）	仙台市宮城野区岩切字洞ノ口82番48	4100	01372	38° 18′ 6″	140° 57′ 7″	2011・09・13 2011・09・27	22.8㎡	記録保存 (個人住宅建築)
洞ノ口遺跡 （16次）	仙台市宮城野区岩切字洞ノ口165－７	4100	01372	38° 18′ 10″	140° 57′ 11″	2011・09・26 2011・09・27	24.3㎡	記録保存 (個人住宅建築)
洞ノ口遺跡 （17次）	仙台市宮城野区岩切字洞ノ口102番１	4100	01372	38° 18′ 8″	140° 57′ 9″	2011・11・07 2011・11・10	28.8㎡	記録保存 (個人住宅建築)
洞ノ口遺跡 （18次）	仙台市宮城野区岩切字洞ノ口105	4100	01372	38° 18′ 10″	140° 57′ 7″	2011・10・14 2011・10・17	20.0㎡	記録保存 (個人住宅建築)
鴻ノ巣遺跡 （13次）	仙台市宮城野区岩切字鴻巣79－６	4100	01034	38° 17′ 52″	140° 57′ 32″	2011・07・11 2011・07・12	20㎡	記録保存 (個人住宅建築)
沖野城跡 （６次）	仙台市若林区沖野７丁目303－21	4100	01234	38° 13′ 44″	140° 55′ 2″	2010・11・08. 2010・11・09	28.8㎡	記録保存 (個人住宅建築)
沖野城跡 （７次）	仙台市若林区沖野７丁目303－19	4100	01234	38° 13′ 45″	140° 55′ 2″	2010・11・15 2010・11・18	31㎡	記録保存 (個人住宅建築)
沖野城跡 （８次）	仙台市若林区沖野７丁目307番	4100	01234	38° 13′ 41″	140° 55′ 4″	2011・07・19	30.3㎡	記録保存 (個人住宅建築)
沖野城跡 （９次）	仙台市若林区沖野７丁目304番	4100	01234	38° 13′ 41″	140° 55′ 3″	2011・09・05	43.2㎡	記録保存 (個人住宅建築)
沖野城跡 （10次）	仙台市若林区沖野７丁目７－10	4100	01234	38° 13′ 44″	140° 55′ 2″	2011・09・12	40.5㎡	記録保存 (個人住宅建築)
沖野城跡 （11次）	仙台市若林区沖野７丁目331の一部	4100	01234	38° 13′ 47″	140° 55′ 9″	2011・11・29 2011・12・２	67.8㎡	記録保存 (個人住宅建築)
南小泉遺跡 （65次）	仙台市若林区南小泉４丁目58番９、61番３	4100	01021	38° 14′ 17″	140° 54′ 21″	2011・09・26 2011・09・29	30㎡	記録保存 (個人住宅建築)
南小泉遺跡 （66次）	仙台市若林区南小泉２丁目40－43、40－104	4100	01021	38° 14′ 31″	140° 54′ 24″	2011・08・01 2011・08・05	16.0㎡	記録保存 (個人住宅建築)
小鶴城跡 （６次）	仙台市宮城野区新田３丁目194－３、102－２、100－２の各一部	4100	01194	38° 16′ 49″	140° 55′ 55″	2011・06・29	27㎡	記録保存 (個人住宅建築)
小鶴城跡 （７次）	仙台市宮城野区新田３丁目37－14	4100	01194	38° 16′ 44″	140° 55′ 44″	2011・08・29	22.2㎡	記録保存 (個人住宅建築)
今泉遺跡 （９次）	仙台市若林区今泉２丁目50－3，50－4，50－5	4100	01235	38° 12′ 36″	140° 55′ 33″	2011・02・21 2011・02・22	30㎡	記録保存 (個人住宅建築)
中在家南遺跡 （５次）	仙台市若林区荒井字中在家29	4100	01427	38° 14′ 29″	140° 56′ 7″	2011・08・29 2011・08・30	33㎡	記録保存 (個人住宅建築)
城丸古墳 （１次）	仙台市太白区四郎丸字大宮54－1，52－４	4100	01011	38° 11′ 32″	140° 55′ 7″	2011・10・07 2011・10・12	31.5㎡	記録保存 (個人住宅建築)
大野田官衙遺跡 （７次）	仙台市太白区大野田字竹松８－11の一部（15ブロック・２ロット）	4100	01566	38° 12′ 58″	140° 52′ 31″	2011・02・01 2011・02・03	24㎡	記録保存 (個人住宅建築)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおのだかんがいせき 大野田官衙遺跡 （９次）	せんだいしたいはくくとみさわえきしゅうへんち 仙台市太白区富沢駅周辺土 ちくかくせいりじぎょう 地区画整理事業17B－５L	4100	01566	38° 12′ 56″	140° 52′ 35″	2011・07・05 2011・07・07	30㎡	記録保存 (個人住宅建築)

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
洞ノ口遺跡 （14次）	集落跡・城館跡・屋敷跡・水田跡	古墳～近世	溝跡、井戸跡、土坑、ピット	土師器、須恵器、瓦質土器、陶器・磁器、土製品、石製品、金属製品	
洞ノ口遺跡 （15次）	集落跡・城館跡・屋敷跡・水田跡	古墳～近世	溝跡、土坑、ピット	土師器、須恵器、陶器、土製品、石製品、金属製品、銭貨	
洞ノ口遺跡 （16次）	集落跡・城館跡・屋敷跡・水田跡	古墳～近世	溝跡	土師器、須恵器、陶器、瓦、銭貨	
洞ノ口遺跡 （17次）	集落跡・城館跡・屋敷跡・水田跡	古墳～近世	整地層、井戸跡、土坑、焼土遺構、ピット	土師器、須恵器、陶器、磁器、金属製品	
洞ノ口遺跡 （18次）	集落跡・城館跡・屋敷跡・水田跡	古墳～近世	溝跡、井戸跡、土坑	土師器、須恵器、陶器、土製品、瓦	城館に伴う区画施設か
鴻ノ巣遺跡 （13次）	集落跡・屋敷跡・水田跡	弥生～中世	溝跡、土坑、ピット	土師器、須恵器、赤焼土器、陶器、瓦、金属製品	
沖野城跡 （６次）	城館跡	中世	溝跡	なし	
沖野城跡 （７次）	城館跡	中世	溝跡	なし	
沖野城跡 （８次）	城館跡	中世	堀跡	陶器、金属製品、銭貨	沖野城に伴う堀跡
沖野城跡 （９次）	城館跡	中世	堀跡	銭貨	沖野城に伴う堀跡
沖野城跡 （10次）	城館跡	中世	溝跡、ピット	土師器、須恵器	
沖野城跡 （11次）	城館跡	中世	堀跡	石製品、金属製品	沖野城に伴う堀跡
南小泉遺跡 （65次）	屋敷跡・集落跡	縄文～近世	土坑	土師器、須恵器、陶器、石製品	
南小泉遺跡 （66次）	屋敷跡・集落跡	縄文～近世	竪穴住居跡、溝跡	土師器、須恵器、金属製品	焼失住居
小鶴城跡 （６次）	城館跡	中世	堀跡	なし	障壁を伴う堀跡
小鶴城跡 （７次）	城館跡	中世	溝跡	なし	
今泉遺跡 （9次）	集落跡・城館跡・包含地	縄文～近世	溝跡、性格不明遺構	弥生土器、土師器、陶器	
中在家南遺跡 （５次）	土器棺墓・土坑墓・方形周溝墓・河川跡・水田跡	弥生・古墳・平安～近世	溝跡、井戸跡、土坑、ピット	土師器、須恵器、陶器、石器、石製品、金属製品、動物遺存体	
城丸古墳 （１次）	円墳	古墳	溝跡	須恵器	古墳周溝か
大野田官衙遺跡 （７次）	官衙跡	古代	溝跡、ピット	なし	
大野田官衙遺跡 （９次）	官衙跡	古代	溝跡、ピット	なし	

要　約	洞ノ口遺跡では、５次にわたる調査を行った。第14次～17次調査では、溝跡、井戸跡、土坑、ピットなどを検出した。遺物は、陶器を主体に、土師器、須恵器、金属製品、石製品などが出土している。年代の判明する遺物は少量であるが、13～14世紀を中心とする。また、その他、第14次調査では縄文時代に遡る石棒、第15次調査では南小泉式の土師器壺、第17次調査では12世紀代の渥美産甕なども出土している。また、第18次調査では幅4.4m以上の規模の大きな溝跡が検出された。15～16世紀にかけての城館に伴う区画施設の可能性がある。
	鴻ノ巣遺跡第13次調査では、溝跡、土坑、ピットを検出した。このうちSD3溝跡は、第１次調査で検出した中世屋敷ないし中世村落の区画溝と考えられている溝跡の延長線上にあたり、一連の溝跡とみられる。
	沖野城跡では、６次にわたる調査を行った。このうち、第８、９、11次調査で、沖野城にかかわる区画施設とみられる堀跡を検出した。第８、９次調査は南北方向、第11次調査では東西方向の堀跡である。一方、第６、７、10次調査では、一連のものと見られる南北方向の溝跡と、第４次調査と一連のものと見られる東西方向の溝跡を検出した。 沖野城の地割を踏襲した溝跡と判断されるが、遺物の出土がなく、掘削の時期については不明である。

要　約	南小泉遺跡では、２次にわたる調査を行った。第65次調査では、土坑３基を検出した。出土遺物には茶臼の下臼などがある。第66次調査では、竪穴住居跡を検出した。床面を炭化材が覆っており、焼失住居とみられる。
	小鶴城跡では、２次にわたる調査を行った。第６次調査では、小鶴城にかかわる堀跡を検出した。小鶴城で初めてとなる障子堀を確認した。第７次調査では、溝跡を１条検出した。第４次調査で出土した東西方向の溝跡と一連の溝跡であるが、小鶴城との関わりについては不明である。
	今泉遺跡では溝跡、性格不明遺構を検出した。ＳＤ１溝跡からは、17世紀中頃の美濃産陶器皿が出土しており、この溝跡の機能時期がこのころまで遡る可能性がある。
	中在家南遺跡では、溝跡、井戸跡、土坑、ピットを検出した。溝跡は４条検出したが、ＳＤ２、３、５溝跡は位置や規模などから数時期にわたる区画施設などの可能性がある。また、出土遺物には中世以降の陶器、磁器等が含まれ、遺構は中世ないし近世以降の年代が推定される。
	城丸古墳では、溝跡３条を検出した。そのうち、ＳＤ１溝跡は、上層に灰白色火山灰を含むことや、位置や規模などから城丸古墳の周溝である可能性がある。
	大野田官衙遺跡では、２次にわたる調査を行った。いずれの調査区でも溝跡、ピットなどを検出したが、官衙に関わる遺構は検出されなかった。

仙台市文化財調査報告書第404集

仙台平野の遺跡群22

平成23年度発掘調査報告書

2012年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区二日町１－１
文化財課　TEL 022（214）8894

印刷　株式会社 仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目１－14
TEL 022（231）2245㈹